SPECIAL STORY

FIRE EMBLEM

【ファイアーエムブレム・紋章の謎】

紋章の謎・下

篠崎砂美
Sami Shinosaki



ファミ通文庫

ファイアーエムブレム

紋章の謎　紋章の謎・下

篠崎砂美

FB
Famitsu Bunko
ファミ通文庫

篠崎砂美
Sami Shinosaki

1960年7月22日生まれ。埼玉県出身。ファンタジーから近未来アクションまで幅広く手がける。裏設定満載の緻密な作風が好評。著書に『ファイアーエムブレムトラキア776』(全3巻、エンターブレイン)、『ブレイクーエイジ　戦士たちの夏』(アスペクト)など多数。『マッチメーカー』というパソコン用ロボットバトルシミュレーターのデザイナーでもある。
http://hp.vector.co.jp/authors/VA000787/

日野慎之助
Shinnosuke Hino

1973年11月26日生まれ。滋賀県出身。メーカーでコンシューマーゲームのキャラクターデザイナーとして活躍後、イラストレーターとして独立。『ファイアーエムブレムトラキア776』全3巻のイラストとオリジナルコミック(いずれもエンターブレイン刊)を担当。ほかに、『トリスメギトス　光の神遺物』、『狂骨歌　神咒鏖殺行　巻之壱』(いずれも角川書店)などのイラストがある。

カバーイラスト／日野慎之助



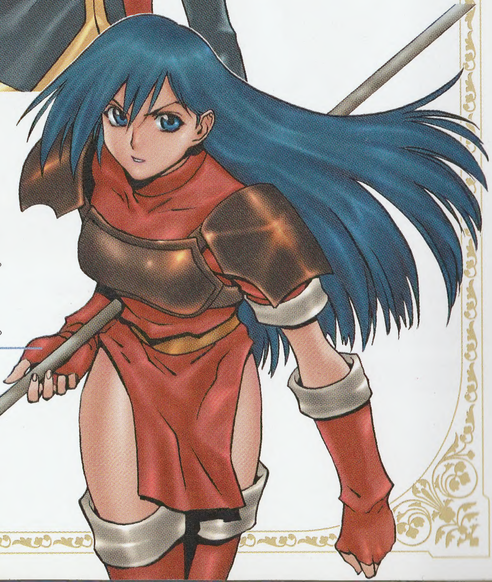
紋章の謎・下

ファイアーエムブレム　紋章の謎



マルス

アリティア国王子で英雄アンリの末裔。朋友ハーディンの変貌を信じられないまま、アリティアの人々、そして自分を信頼してくれる人たちのために再び戦いに身を投じる。

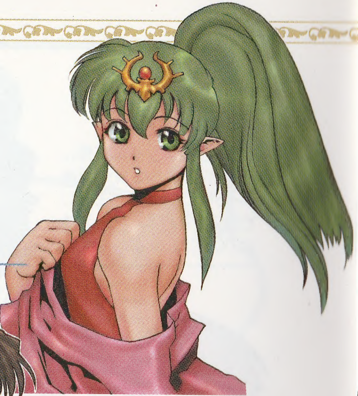


シーダ

タリス王国王女。先の暗黒戦争では女性ながらペガサスナイトとして参戦。戦後はマルスと婚約、幸せな日々を過ごしていたが彼女もまた戦場へ……。

チキ

神竜王ナーガのひとり娘で、計り知れない力を持つ竜族の王女。その力のため永い年月封じられてたが、暗黒戦争時に覚醒、マルスを助けて戦った。



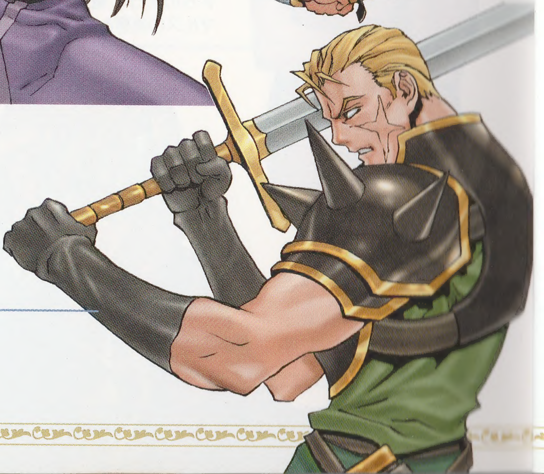


ナバール

その過去は誰も知らない、孤高の傭兵。だが、暗黒戦争、そして英雄戦争と、なぜかマルスの側について戦ってくれている。

オグマ

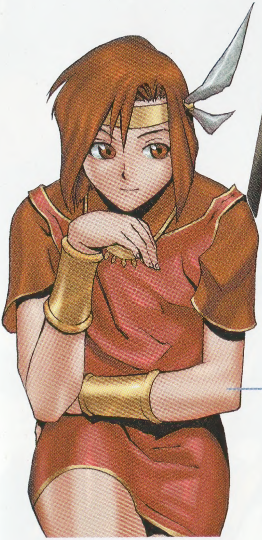
シーダへの恩から、タリス王国の傭兵隊隊長となった元奴隷剣闘士。腕が立ち、頭も切れる凄腕の戦士。



シーマ

グラの王女。父王に反発し国を出ていたが、父の死後ハーディンにより女王として国に戻される。マルスは父の仇だが……!?





チェイニー

誰にでも変身できるという能力を持つ竜族の青年。ただし、チキやバヌトゥのように竜には変身できない。マルスの道標として重要な存在。

シリウス

オグマの窮地を救った仮面の騎士。その後マルスと共に戦うが、本人は自らを"傍観者"と呼ぶ謎の男。



ファイアーエムブレム

紋章の謎～紋章の謎・下～

篠崎砂美

Famitsu Bunko
ファミ通文庫

イラスト　日野慎之助

目次

History ……………………………………………………4

Prologue : The Legend
プロローグ　伝説 ……………………………………………7

Chapter 1 : The Secret of the Emblem
第１章　紋章の謎 ……………………………………………11

Folklore 1 : The Succession to the Throne
伝承１　王位継承 ……………………………………………49

Chapter 2 : The Prince Returned
第２章　王子の帰還 …………………………………………59

Folklore 2 : Kingdam of Saint Akaneia
伝承２　アカネイア聖王国 …………………………………99

Chapter 3 : Dark Kaisar
第３章　暗黒皇帝 ……………………………………………107

Folklore 3 : The Dark Dragon
伝承３　暗黒竜 ………………………………………………149

Chapter 4 : The Sanctuary of the Dragon
第４章　竜の祭壇 ……………………………………………163

Epilogue : The King of the Kings
エピローグ　王の中の王 ……………………………………205

後書き …………………………………………………………217

死んでくれ!? ……………………………………………………221

History

アカネイア暦六〇八年から始まった英雄戦争は、その後のアカネイア大陸の運命を決定づけたと言える。王の中の王と賞されるマルス王によって、後に続く平和の基礎が築かれた時代だからである。

アカネイア暦六〇五年、ハーディン、ニーナ王女と結婚。アカネイア王国第二四代国王に。
六〇七年、アカネイア神聖帝国建国。
同年、グラ王国、アリティア王国から独立。
同年、グルニアで反乱が起きる。英雄戦争の始まり。
同年、アカネイア神聖帝国・アリティア王国連合軍によって、グルニアの反乱鎮圧。
同年、マケドニア王国で反乱が起きる。
同年、アリティア王国軍によって、マケドニアの反乱鎮圧。
同年、アカネイア神聖帝国・オレルアン王国・グラ王国連合軍、アリティア王国占領。
同年、アリティア王国とアカネイア神聖帝国が全面戦争に突入。
同年、アリティア王国軍がグルニア王国をアカネイア神聖帝国より解放。
六〇八年、カダイン、アリティア王国に協力。

同年、マルス王子、アンリの道踏破。
同年二月、アリティア王国軍、祖国奪回。
同年、アリティア王国、グラ王国を占領。
同年、オレルアン王国、アリティア王国と不戦条約締結。
同年、アリティア王国、アカネイア神聖帝国を占領。
同年、アカネイア七王国連合軍、竜の祭壇にむけて進軍開始。
同年、ガーネフ死亡。メディウス、再封印される。
六〇九年、マルス王子、アリティア国王に即位。
同年、マルス王、結婚。
同年、マルス王、アカネイア連合王国国王となる。

六〇九年、アカネイア連合王国記録室資料より

プロローグ　伝説

遙かな太古、我らが大地を絶望が被（おお）いぬ。
冥府よりいでし暗黒神に、五色の悪しき竜ども率いられん。
生きとし生ける者は踏みにじられ、死と破壊が世の主となりぬ。
大地は裂け、森は燃え、川は白く氷らん。
竜は地を這い空を飛び、人は彼らの糧となりぬ。
嘆きは地に満ち、涙は涸れ果てん。
世は、滅びの道を辿りぬ。
我ら、天に救いを求めん。
長きに渡る祈りの後、神、我らの祈り聞き届けん。
現われし者、神の化身なり。
その姿巨大にして、我らが守護神なり。
輝く光を剣となし、五色の光集めて盾となす。
彼（か）の剣光発する時、荒ぶる者ども鎮まれり。
彼（か）の盾五色に輝く時、邪悪なる魂石に帰するなり。
暗黒神が化身、邪悪なる暗黒竜、ことごとく倒れり。
世、静まりて、古き時代は終わらん。
新しき時代、残りし竜は人となりて、邪悪なる魂魄（こんぱく）を石となして
大地の底に沈めたり。

神は、大いなる慈悲を持って人を救いたり。
人は、神の教えを守りて地に栄えん。
暗黒竜再び目覚めし時、神は選ばれし者に剣を遣わさん。
闇を払い、古き魂を鎮めんがために……。

ナーガ神の伝説より

第1章　紋章の謎

1

氷竜神殿。

かつてマムクートとなった氷竜族が拠点とした都市の遺跡である。

テーベとは違い、戦場とはならなかった氷竜神殿はほぼ無傷の姿で残っている。

けれども、その後マムクートたちはドルーア帝国に移り、神殿は生き残った野生の氷竜たちが集う無法の地となっていた。

人もマムクートも近よらぬこの地を、大賢者ガトーが隠遁の地と定めたのも当然のことだったのであろう。人跡未踏の高山にあり、吹き荒れる吹雪と、凶暴な氷竜たちが訪れようとする者の行く手を阻む。他との接触を断つには最適であったのだ。

だが、勇者アンリは、それらの障害を乗り越えてガトーに会いにきた。

光剣ファルシオンを譲り受け、愛するアルテミスを救うために。

そして今、氷竜神殿を訪れたマルスは、何を思うのであろう。

もちろん、愛するシーダのために。そして、祖国アリティアのために。あるいは、ハーディンのために。すべての人々のために……。

すべてを背負って、マルスは氷竜神殿へとやってきた。

に飛び込む。
すかさず、ミネルバやシーダたちが、飛竜や天馬に乗ったまま、その隙間から神殿の中
バヌトゥが頭を押しあてて、神殿の大扉を開く。
マルスが叫んだ。
「早く中へ！」

「扉を閉めるんだ！」
ルークたちも、バヌトゥの背中から飛び降りると、両開きの扉の隙間から中へと飛び込んでいった。バヌトゥも人の姿に戻ると、神殿の中に駆け込む。
マルスの命令で、ルークとロディが渾身の力を込めて、左右の扉を元通りにぴったりと閉めた。外にいる氷竜たちの咆哮が小さくなる。
「みんな、下がってください」
リンダが、ルークたちを下がらせた。ブリザードの魔道書を取り出す。火竜の谷でほとんどの魔力を使い切ってしまい、もしもの時にと後一回分を秘蔵しておいた物だ。
左手で魔道書を胸の前に持ち、右手を額の高さに掲げて印を結ぶ。
「白き貴婦人よ、冷たき御手(みて)は荒ぶる者の魂を鎮める……」
魔法の力場が彼女の周囲で渦巻き、長衣(ローブ)の裾や髪の毛を微かに浮き上がらせた。魔道書から、魔文字が浮き上がって白い魔方陣を空中に描き出す。
「吹き荒れよ、氷雪の嵐！」

リンダの呪文を唱える凛とした声の響きに、魔方陣から氷雪の嵐が吹き出した。それは氷竜神殿の入り口の大扉を直撃し、分厚い氷でそれをつつみ込んだ。

魔法の波動が消え、衣の裾がリンダの素足を再び隠し、茶色の髪が背中を隠した。力を失ったブリザードの魔道書が、リンダの手の中で崩れて床に落ちる。

直後に、ドンという鈍い衝撃が扉を震わせる。氷竜が、中に入ろうと扉に体当たりしたのだろう。厚い氷につつまれた扉がびくともしないのを知ると、今度は扉を無数の棒で叩くような音が響き渡った。おそらくは、氷竜たちが氷のブレスを吐きつけているのだ。おかげで、神殿の扉はよけい分厚い氷につつまれ、完全に氷竜たちが中に入れないようになってしまった。

冷気を武器としている氷竜たちでは、同じ冷気で固められた扉を溶かすことはできない。本能で冷気の攻撃を吐きつければよけい扉を堅固にするだけだと考えたリンダの作戦は、うまくいったのである。

「これで外の氷竜たちは心配なくなった」

さすがに、マルスがほっと一息ついた。

「上出来だよ。さあ、ガトーに会いにいこうぜ」

チェイニーがマルスたちを促した。

神殿の中は静まりかえっていて、音一つない。まるで、時間まで寒さで氷りついているかのようだ。

マルスたちは、テーベの塔でチェイニーが用意しておいてくれた旅用の毛皮の外套の前をぴったりと合わせ直した。

チェイニーを先頭に、マルスたちは広い神殿内を進んでいった。一応古びた絨毯が敷かれている他は、神殿内の床も壁も天井も、磨き上げられた鏡のような氷に被われていた。元は大理石らしいのだが、見た目は神殿そのものが氷でできているのではないかと錯覚するほどだ。

壁や床に映る自分たちの姿にときおり目を遣っては白い吐息を吐きつつ、マルスたちは神殿の深部へと進んでいった。

「おーい、マルスたちを連れてきてやったぜ」

奥まった一室の扉を乱暴に開けると、チェイニーが遠慮のかけらも見せずに大声で言った。

扉が開けられたとたん、中から暖かい空気が勢いよく吹き出してくる。

外の世界よりも何倍も寒いと感じる神殿内部に閉口していたマルスたちは、逃げ込むように部屋の中に入った。

「御苦労じゃったな、チェイニー。マルス王子も、よくぞここまで参られた。さあ、暖をとるがよい」

赤い丈の高い帽子(タージ)を被ったガトーが、マルスたちに暖炉のそばのテーブルを囲む椅子を勧めた。不思議なことに、椅子はぴったり人数分用意されていた。

「お言葉に甘えさせていただきます」
マルスは一礼すると、すぐそばの椅子を引いてシーダを座らせた。続いて、自分もその隣に座る。
チェイニーがさっさとマルスの隣に座ったため、カチュアやマリクたちは自然とその他の椅子に腰を下ろした。
「どうした、そなたも座らぬか」
自分も椅子に着いたガトーが、憮然（ぶぜん）とした表情のまま立っているバヌトゥを促した。
「いいえ、私は、ここで」
「マルス殿の前で、そなた一人を立たせておくわけにもいかぬ。さあ、座らぬか。思うところもあるのであろうが、それは後でわしに述べよ。今は、マルス殿の用むきが先じゃ」
拒否するバヌトゥに、ガトーが再度言った。そのやりとりから、彼らの明確な上下関係が見てとれる。チェイニーがマルスに明かしたように、間違いなくガトーは竜族でも最高位に位置する神竜族の一人なのであろう。そのため、下位の火竜族であるバヌトゥは、一歩下がった位置にいようとしているのだ。
あるいは、二人の間には、今でもわずかなわだかまりがあるのかもしれない。かつて、ガトーはチキを封印していたという。それを見かねたバヌトゥが、チキを連れ出したのだとマルスは聞いていた。暗黒戦争後、チキはガトーの保護下に移ったとバヌトゥは言っていた。

「バヌトゥ、座ってくれないか。あなたは私の大切な仲間の一人だ。同じ席についてほしい。あなたにはその権利がある」
マルスは言った。
「それでは……」
バヌトゥが椅子に座った。
「さて、では、食事でもしながら話をしようか」
ガトーが、テーブルの上にあった呼び鈴をつまみ上げて鳴らした。少しして、数人の娘たちが温かい食事を持って現われた。
どれも、銀色の髪のほっそりとした娘たちである。おそらくは、この神殿に最初から住んでいた氷竜族のマムクートたちなのであろう。
無口な娘たちは、食事を配り終えると一礼して部屋を出ていった。
「さて、まずはそなたたちの勇気を祝福しよう。よくぞ、ここまで参られた。さすがはアンリの正当な後継者であるマルス殿じゃ。約束通り、光のオーブはそなたに預けよう」
「ありがとうございます」
ガトーの言葉に、マルスは礼を述べた。
「私の方も、ガトー様にお渡ししたい物がございます」
マルスは、星のオーブのかけらをガトーに差し出した。
「おお。これは……。ウェンデルに命じたものであったが、そなたがこれを持ってこよう

とはの」
わざと驚いたように、ガトーが言った。
「はい。ウェンデル司祭は御高齢のため、こたびはカダインに残っていただきました。アカネイアによるカダインへの攻撃を恐れ、ここへは少数の若い者たちで参ったのです。これらの星のオーブのかけらは、マケドニア周辺でウェンデル司祭や私たちが見つけた物と、チェイニー殿の見つけた物です。どうかお納めください」
「うむ」
ガトーが、マルスから受け取った星のオーブのかけらを、正しく黄道十二宮順にならべて両手でつつみ込んだ。マルスたちが見守る中、小さな声で呪文をつぶやき続ける。やがてガトーが両手を開いた時、星のオーブは元通りの姿を取り戻していた。
「マルス殿、これはそなたに預けよう」
ガトーは、星のオーブをマルスに差し出した。
「星のオーブまでお預けくださると言うのですか、でもなぜ……」
マルスが問い返した。隣で、チェイニーまでもが怪訝な顔をしている。
「まあ待ちなさい、すべては食事が終わったら話してしんぜよう。このままでは、せっかくの料理が冷めてしまうでな」
悪戯（いたずら）っぽく話をはぐらかすと、ガトーがテーブルの上の料理をマルスたちに勧めた。

2

食事が終わると、ガトーは一同を水盤のそばに集めた。人の腰ぐらいの高さの台に、両手を広げたほどより少し大きな水盤が載っている。そこに水を満たすと、ガトーがマルスにその中へ星のオーブを沈めるように言った。

「さて、この世界には五つのオーブがある。一つはここにある星のオーブと光のオーブ。そして、今はアリティアにある大地のオーブ。オレルアン王の持つ命のオーブ。そして、ハーディンの持つ闇のオーブじゃ。これらのオーブは、我ら神竜族に古くから伝わる秘宝であった」

自らが神竜族であることを隠そうともせずに、ガトーが話し始めた。チェイニーがマルスに対して口先軽く話してしまったことなど、先刻御承知と言った様子だ。

「我らが長(おさ)であったナーガ様は、地竜族との決戦において、これらオーブの力を一つに集めて彼らを封印したのだ」

「では、チェイニーが話してくれた通り、その昔人間を救った神の使いというのは、ラーマン神殿に祀られているナーガ神、神竜ナーガだったのですね」

「いかにも」

ガトーがマルスにうなずいた。

「その後、ナーガ様は五〇〇〇年に渡る生涯を終えられ、テーベに没されたのじゃ。その時、五つのオーブは封印の盾に填(は)め込まれ、地竜たちを封印した竜の祭壇の封印を維持するようになった。この封印は、もともと我ら竜族が邪悪な魂、すなわち心の中に起こる破壊衝動を結晶化して身体から分離したものと同じなのじゃ。わしらは、オーブの力で竜としての力を封印し、竜人となった。世界そのものの姿を変えてしまうような力と衝動は、世界創造の時代には必要であったのかもしれないが、今の時代には必要ないものじゃ。それを拒んだ地竜たちは、身も心も力に支配されてしまった。破壊衝動のみしか持たぬ地竜たちは、封印の力によって肉体までが石と化して地中深くに封印されておる。彼らは大地そのものから力を得ているので、本当の意味で殺すことはできないのだ」

ガトーが、五つのオーブの持つ真実を明かした。それは、メディウスたち地竜族の真実の一端をも明かすものであったのだ。

「では、メディウスも死んだのではなかったのですか……。いや、それだからこそ、アンリ王が倒したはずなのに蘇ったのですね？」

マルスは、ガトーに訊ねた。長い間疑問だったこと、なぜアンリが倒したはずのメディウスが復活したのかという謎が解けたと思えたからだ。マリクを始めとする他の者たちも、おとなしく二人の会話に耳をかたむけていた。

「その通り。一度命を失ったかのように見えても、一〇〇年かけて地の底から生命力を吸い上げて復活することができる。しかも、それを何度か繰り返すうちに、地竜は暗黒竜へ

と進化することができるのじゃ。メディウスも、次に蘇ることがあれば暗黒竜へと変わるであろう」

「暗黒竜ですか」

聞き慣れない言葉に、マルスは聞き返した。

「神竜の長であるナーガ様が光の象徴であったのと同様に、地竜の長となる血筋の者は闇の象徴である暗黒竜となる。もしそうなれば、チキが成竜となるまではメディウスにかなう者はいまい。それに、メディウスが暗黒竜となれば、星のオーブが砕けたことによって弱まった結界を完全に破り、地竜たちを復活させるであろう。そうさせぬためにも、五つのオーブを集めて封印の盾を復活させねばならない。封印の盾の力によって、数千という地竜族とメディウスを完全に封印し直さねばならぬのだ。そうでなければ、一〇〇年後には復活したメディウスによって封印を解かれた数千の地竜たちに、すべてが滅ぼされてしまうであろう。見よ」

ガトーが、水盤の表面に軽く手を触れた。波紋が広がり、水盤の中に何かの風景が映し出される。

それは、荒れ果てたラーマン神殿の姿であった。

「ナーガ様は、封印の盾と、自らの牙から作りだした光剣ファルシオン、そして、側近であった火竜族、氷竜族、飛竜族の長たちの牙から作りだした炎弓パルティア、氷剣メリクルソード、風槍グラディウスをもしもの時の人の力にとラーマン神殿に収め、神殿全体に、

竜人以外の竜族が入れないようにと結界を張ったのじゃ。だが、今の神殿の姿を見よ」

ガトーの指し示す水盤の中に映るのは、盗賊たちに荒らされたラーマン神殿の姿であった。

「メディウスも、最初はあんな奴じゃなかった。奴は、ナーガの言葉に賛同して地竜族でただ一人竜人となり、神殿を守る者としてずっとラーマンにいたんだ」

チェイニーが、メディウスを哀れむかのような口調で言った。

「メディウスが、ナーガを始めとするあなたたちの味方であったと言われるのですか」

かつて戦った時のメディウスの猛々(たけだけ)しさを思って、マルスは聞き返した。

「その通りじゃ。だが、ある時、ラーマン神殿に一人の盗賊が入り、メディウスを騙してファルシオン以外の武器と封印の盾を持ち去ってしまったのじゃ。人間に失望したメディウスは、あのような邪心に満ちた存在となってしまった。悲しいことじゃ。そして、封印の盾を持ち去った盗賊は、オーブを外して売りさばき、その富と三種の武器の力を使ってアカネイア大陸に初めての王国を築いたのじゃよ」

「では、その盗賊というのは」

「もちろん、アカネイア聖王国の建国王、アドラ一世のことじゃ」

ガトーの言葉に、マルスたちは少なからず衝撃を受けた。聖なる血筋と崇拝していたアカネイア王家が盗賊の血筋だったというのは、彼らにとっては予想もしなかった事実であったのだ。

だが、マケドニア王国出身のミネルバたちにとっては、さほど驚くようなことではなかった。なぜなら、マケドニア王国の建国王アイオテも、ドルーア帝国の奴隷の身から一国を起こした者であったからだ。まして、国らしき国が存在しなかった時代、どのような身分の者が国を起こそうと、それは自然のことであっただろう。けれども、さんざん国王の出自のことでマケドニアを蔑(さげす)んできたアカネイアの者たちが、滑稽(こっけい)に思えて哀れであった。

「アドラは、自分に幸運をもたらしてくれた封印の盾を、王家の紋章として大切に保管した。そう、その盾こそがマルス殿の持つファイアーエムブレムなのだ」

「紋章の盾が、封印の盾であったと……」

マルスは、テーブルの脚に立てかけるようにしておいてあるファイアーエムブレムを振り返って言った。他の者たちも、紋章の盾に注目する。

「情けないことであるが、わしもつい最近までは気がつかなかった。アドラによってかなりの装飾が施されてしまっておったからな。それに、第一次ドルーア戦争では、あの盾はカルタスが持っており、わしの許(もと)を訪ねてきたアンリは持っておらなんだ。その後はアカネイアの宝物庫に収められていたため、わしが封印の盾をこの目で見ることができたのはマルス殿がマケドニアでわしと会った時が初めてだったのじゃ」

「そいつが分かった上に、オーブの在処(ありか)も分かったんなら、昔のようにさっさと集めりゃいいじゃないか」

ガトーの言葉に、チェイニーが不満げに言った。

「確かに、オーブが散逸して以来、わしは各地を渡り歩いてそれらを再び集めた。一度ならず、遠く二つの神を戴（いただ）く大陸や、その昔一人逃れた暗黒竜を追ってナーガ様の遺産を持って訪れたことのある大陸まで……。商人たちは遙か遠くまでオーブを持ち去っていったのだ。だが、やっとの事で集めたオーブも、暗黒戦争で再び散逸してしもうた。ラーマン神殿を任せていた神官たちがすべて殺され、盗賊たちに盗まれてしまったのじゃ。ガーネフのことにかまけていたため、気づかなかったわしの失敗じゃ。しかも、ガーネフめは、今もどこかで暗躍しておる」

「今もということは、ガーネフは生きているのですか。まさか、奴も地竜だとおっしゃるのでは……」

　マルスは、ガトーに詰めよった。最大の懸念が、現実になろうとしている。

「ガーネフは竜族ではない、間違いなく人間だ。だが、あ奴はすでに人間ではなくなっておる。闇のオーブに囚われたガーネフは、オームの杖による延命を試みたのだ。だが、わしがオームの杖を封じたがために、充分な生命力を得ることができなんだ。そしてスターライト・エクスプロージョンにより肉体を破壊されたガーネフは、闇のオーブに寄生する悪しき魂として生きのびたのだ。今あ奴は、以前作りだした自分の複製の身体を使って暗躍しておる。早急に、あ奴の陰謀を暴き、迷える魂をスターライト・エクスプロージョンによって浄化せねばなるまい」

　ガトーが、微かな悔恨（かいこん）を込めて言った。ガーネフが現在のようになってしまったことに

は、彼も少なからず責任を感じているからだ。

「ガーネフが闇のオーブと関係があるのならば、ハーディンの近くにいるのではないでしょうか」

マリクが、ガトーに進言した。

「確かに、闇のオーブは今はハーディンとともにある。ガーネフも、彼のそばにいることが多かろう。だが、ガーネフの目的はハーディンにはない。しょせん、ハーディンはガーネフにとって手段でしかないのだ」

ガトーが水盤に触れると、ハーディンの姿がそこに映し出された。

拳大の漆黒の球体を指先でつまんだハーディンは、それをゆっくりと回しながら眺めていた。食い入るように闇のオーブを見つめるその瞳は、尋常なものではなかった。彼がそこに何を見ているのかは、彼だけにしか分からぬことであった。あるいは、ハーディンはすべてのものを闇のオーブを通してしか見ていないのかもしれない。

「あ奴は高名な司祭を次々にさらっている。マケドニアのマリア王女とレナ司祭、アリティアのエリス王女、アカネイアのニーナ王妃。おそらくは、彼女たちの高潔な魂を使って自分の肉体の完全復活を目論(もくろ)んでおるに違いない。そうなれば、闇のオーブの悪霊となったガーネフは、生きた闇のオーブそのものとなって人々に厄災を振りまくであろう。一刻も早く彼女たちを救い出し、ガーネフの野望を防がねばならん」

「ガーネフが、姉上たちを連れ去ったと言うのですか。それで、姉上たちは無事なのでし

ようか」

　マルスは、ガトーにエリスたちの姿を映し出してくれと頼んだ。

「ガーネフめが、闇のオーブの力を利用して結界を張っているので、正確な場所までは分からんが、何とかニーナ王妃の思念を追ってみよう」

　ガトーが、精神を集中しながら水盤に触れた。水面がゆらいだ後、薄暗い部屋が映し出される。

「ここに、ニーナ王妃の気配が残っているのだが……」

　ガトーも怪訝そうな顔をすると、水盤の映像をはっきりさせようと念を集中した。映像が少しはっきりすると、そこには寝台（ベッド）に横たわっているボア司祭の姿があった。ボアは暗黒戦争以後アカネイアの宮廷司祭長となり、ニーナの片腕としてアカネイア復興に努めていたはずであった。

「ボア様はどうなされたのでしょうか。ファイアーエムブレムを城から持ち出してマルス様の許へいくように指示なされたのも、ボア司祭様だったのです。ハーディン皇帝の目を盗んで、危険を顧（かえり）みずにニーナ様の御命令を私やミディア様に伝えていてくれたんです」

　心配そうな目でボアの姿を見つめながら、リンダが言った。

「ボア司祭と、話すことはできないのでしょうか。司祭なら、ニーナ様がどこにいるか知っているかもしれません」

「うむ。魔道士ではないそなたでは、あまり長い間心を飛ばすことはできぬが、短い会話

を交わすだけならば何とかなるであろう。マルス殿、水盤に手を浸すがいい。だが、くれぐれも、そっとであるぞ」
ガトーに言われて、マルスはそっと右手を水の中に浸した。
短い呪文が聞こえ、マルスは軽く目を閉じた。そして、再び目を開けた時、マルスはボアの枕元に立っていた。その姿は半分透き通っており、まるで幻か幽霊のようだ。
「マルス王子が……。わしは、夢を見ているのだろうか……」
力無くボアが言った。
「ボア司祭、夢ではありません。マルスです。ガトー様のお力を借りて、こうして心を飛ばして参りました」
「おお、最後にマルス殿と言葉を交わせるとは。許してくれ、マルス殿。すべてはわしの責任だ」
マルスの言葉に、ボアが涙を流しながら言った。その声はか細く途切れ途切れで、今にも消えてしまいそうだった。
「どういうことなのですか、ボア殿」
「あなたにだけは話しておかねば」
ボアが、声を振り絞って語り始めた。
「すべては、暗黒戦争終結後に遡る。あの戦いの後、早急なアカネイアの復興を思ったわしは、ニーナ様に婚姻をお勧めしたのだ。速やかに王を戴くことこそ、国をまとめる最良

の策だと思ってな。候補としては、マルス王子、あなたとハーディン侯がおられた。そして、わしは、ニーナ様に、答えを強要してしまったのだ。どちらを選ぶのかと」
「そんな、ニーナ様の気持ちはどうなるのです」
　思わず、マルスは叫んだ。
　ニーナは、ドルーア帝国に囚われた時、占領軍の司令官であるカミュによって救われたのであった。メディウスによる再三の処刑命令を無視して彼女を守っていたカミュであったが、ついにメディウスその人が直接アカネイアの首都パレスにやってくると聞かされて、密かに彼女をオレルアンに逃がしたのである。
　グルニアという国の将軍であったカミュは、アカネイアという国には怒りを感じていたが、ニーナという個人には何の恨みもいだいてはいなかった。いや、むしろニーナの毅然とした高潔な心に好意をいだいたのである。そして、ニーナも、敵であっても高潔な騎士の魂を守り続けている公明正大なカミュに惹かれていったのであった。
「それは分かっていた。だが、カミュは敵将、国民が認めるはずはない。しかも、生死不明の者など候補に挙げるわけにはいかないではないか。だからこそ、アカネイア王国を守り、民を守るためには、その身を捧げることが王家の義務だと思い、わしはそうニーナ様に強要してしまったのだ。思えば、本当に愚かなことをしてしまったものだ」
　ボアが、目を閉じて言った。その目から、一筋涙が零れ落ちる。
「ニーナ様はこうおっしゃられた。マルス王子にはシーダ姫がいるからだめだと。彼女を

悲しませることはできないと言っておられた。そして、ニーナ様はハーディン殿との結婚をお決めになったのだ」
「それでは、ニーナ様も、ハーディンも、あまりにもかわいそうだ」
思わず、マルスはつぶやいた。わずかに運命が違っていれば、マルスがハーディンの立場に立っていたかもしれないのだ。
「それでも、ニーナ様を心から愛したハーディン殿が、幸せな毎日でニーナ様の心を癒してくれるのではないかと期待した。事実、ハーディン殿は、ニーナ様を慈しんでくれたのだ。だが、ニーナ様の心は彼の上にはなかった。さすがに、ハーディン殿も気づかれたのだ、王妃の心が他の者のところにあることを。そして、ハーディン殿は変わっていかれた。許されよ、マルス王子。ハーディン殿がアリティアを蹂躙したのも、元はと言えばこのわしの罪。そうなる前にと、ニーナ様と相談して、密かにリンダに紋章の盾を持たせてそなたの許へむかわせ、ハーディン殿を諫めてもらおうと思ったのだが、すでに、遅すぎた。すべてを知ったハーディン殿は、わしを斬り、あろうことかニーナ様をガーネフに渡してしまったのだ。迂闊であった。まさかガーネフが生きていて、ハーディン殿に取り憑いていたとは。わしは、もう……だめだ。アカネイアのことも、もうどうでもよい。だが、せめて……ニーナ様だけは……。頼む、マルス王子……」
「分かりました。ニーナ様を助けるとお約束いたします」
マルスは、ボアに近づいて言った。

「感謝す……」

答えかけたボアの言葉が、最後まで音にならない。

「司祭！」

マルスは叫ぶと、ボアの手をとろうとした。だが、虚像である彼の手は、ボアの手を空しくすり抜けただけであった。

景色が暗転する。

一瞬の意識の喪失があった後、マルスは再び水盤の前に立っていた。

「マルス……」

シーダが、不安そうにマルスの腕をとった。彼が、手の届かないところに消えてしまいそうで心配だったのだ。それに、もしニーナがマルスと結婚すると言っていたら、自分はどうしていただろうと思う。はたして、ハーディンのように、闇のオーブに囚われないと自信を持って言えるだろうか。

「アルテミスの運命（さだめ）……」

ジェイガンがつぶやいた。

「紋章の盾を行使する決断をした者は、愛する者とは決して結ばれない……」

「ほう、そのような迷信がまだ信じられていたのか」

ジェイガンの言葉に、ガトーが愚かだと言いたげにつぶやいた。

「迷信かもしれません。けれども、紋章の盾には、アルテミス姫とニーナ様の悲しみが染

み込んでいる。それは、アドラ王が盾を盗み出して以来、アカネイア王家にまつわる運命なのかもしれない」
マルスは悲しげにつぶやいた。
「みんなが心配だ。ガトー様、ミディアや、カインたちの様子を見ることはできませんか」
「うむ。望みとあれば映し出してやろう」
ガトーが水盤に触れた。
ゆれる波紋の中に、牢の中のミディアの姿が映し出された。
「出ろ」
牢番の兵士が、ミディアのむかいの牢から兵士を連れ出す。
「待て、連れていくなら私にしろ！」
鉄格子をつかんでミディアが叫んだ。
「だめだ、貴様の処刑は最後にしろという皇帝陛下の御命令だ。貴様は、そこで部下たちが一人ずついなくなるのを見守れ。それが、反乱を起こしたお前たちに科せられた罰であると皇帝陛下はおっしゃっておられる」
無慈悲に言うと、牢番は牢の中から一人の若者を連れ出した。
「お世話になりました。将軍は、生きのびて機会を待ってください。マルス王子は御健在です。時間が、我らに味方いたしましょう。私の時間は、将軍にさしあげます。どうか、有効にお使いください」

牢番に抗って言い残すと、若い騎士は連れていかれた。

鉄格子をつかんだまましゃがみ込み、ミディアは嗚咽を漏らした。何度このような場面が繰り返されたことであろう。

ハーディンは、グルニア遠征を理由に国民に強制的な徴兵や資材の提供を強要した。従わない者には、傭兵を中心とした部隊を送り込み、家ごと取り壊すというようなことも強行したのである。人々の怒りは蓄積し、ハーディンがアリティアを占領したと聞いてその怒りは爆発した。自分たちが指導者と認めていた男が、自国にとっても他国にとってもただの略奪者だと気づいたからである。

ミディアを旗印として、パレスに残っていた騎士団が決起した。多くの市民たちも、それに参加したのである。ハーディンの留守をついて、反乱は成功したかに見えた。だが、幽閉されたニーナを見張る魔道士たちに手こずるうちに、ハーディンが戻ってきたのである。反乱の報を聞いたハーディンは、カダイン攻めを中止し、パレスにとって返したのであった。

カインたちアリティア騎士団を中心としてカダインに残った者たちは、ミディアの反乱によってかろうじて全滅をまぬがれた。だが、ミディアたちは戻ってきたハーディンによって窮地に立たされたのである。それでも、ハーディンの軍の中からも、皇帝に逆らう者たちが現われ、戦いは混沌とした様相を呈した。だが、闇のオーブに守られたハーディンの力は絶対的で、グラディウスを振るう彼には誰も立ちむかえなかったのである。

ミディアを中心とする騎士団は砦の一つに立てこもり、その間にトムスたちがパレスを逃げ出す人々を率いて決死の脱出を行なった。

ミディアたちが捕まった時、パレスに残るのは逃げ遅れた人々か、ハーディンに忠誠を誓う者たちだけであったのだ。

水盤がゆらいだ。

ミディアの姿が消え、ガルダの港が映し出される。

「これから、どうするつもりだ」

トムスが、バーツに訊ねた。暗黒戦争以降、タリスに戻ったサジやマジとは違って、バーツはアカネイア軍に入って彼の下についていたのだった。

「この町にいれば、ダロスに会えると思うんで、彼を待つつもりです。やっぱり騎士団なんか、俺の性には合わなかった。船乗りとして、気ままに暮らすつもりです」

「そうか。では、ここでお別れだな。俺たちは……、そうだな、気ままな傭兵でもして暮らすか。なあ、ミシェラン」

トムスが、双子の兄弟に聞いた。

「それもいいが、オレルアンの草原でのんびり過ごすというのも悪くはない」

ミシェランが答えた。

「どのみち、もう俺たちは自由の身だ」

そう言うと、トムスはアカネイア騎士団の記章を破り捨てた。

水盤がゆらぐ。
砂漠を進むカインたちの姿が映し出された。
ハーディンがパレスの反乱によって帰国した機会を逃さずに、アリティア奪回に全軍を動かしたのであった。
本来はマルスを待って軍を動かすべきなのであろうが、カダインは敵を迎え撃つにはあまりにも適さない場所であった。パレスの反乱が失敗に終わった場合、戻ってきたハーディンの軍勢の攻撃を受けるのは必至である。砂漠に守られているとはいえ、城塞ではないカダイン神殿では、敵の攻撃を防ぐことは困難だ。それを知るからこそ、カインたちは全軍を移動させてアリティアを目指した。アリティアを取り戻せば、地の利を生かして籠城することが可能だ。それで、マルスが戻ってくるまでの時間を稼ごうと考えたのである。
水盤の映像が変わる。
アベルの姿が映し出された。
彼のそばには、アリティア占領軍指令官のウィローの姿がある。
「皇帝陛下が帰国なさった以上、カダインにいる反乱軍はここへと攻めよせてくるだろう。分かっておるな、アベルよ」
「ああ。彼らを、このアリティアには一歩も入れない。それでいいのだな」
ウィローの言葉に、アベルは苦渋に満ちた顔で答えた。
「その通りだ。逆らえば、貴様の女を始めとするアリティア市民の命はない。そのことを

忘れるではないぞ」
「分かっている」
「ならば、早く迎撃の準備をせぬか」
ウィローが、アベルを急きたてた。
アリティアを占領した帝国軍は、国民の中から非戦闘員を多く人質に取り、予備兵役の者たちを無理矢理従わせたのである。
当然、アリティアの者たちは味方であるアリティア軍と戦うつもりなどないであろうが、人質を取られている手前、アリティア軍に合流することもできないはずであった。そして、アリティア軍の方も、同胞であるアリティア軍に合流することもできないはずだ。そこで立ち往生したところを、戻ってきたハーディンとともに叩こうという作戦である。野戦はハーディンのもっとも得意とするところであるし、すでにグラから呼びよせた兵士たちも国境付近に伏せてあった。
よしんば、アリティア軍がアベルたちを切り捨てて攻撃を仕掛けたとしても、それは結果的に同士討ちになるだけで、帝国軍としての被害はまるでないという小狡い作戦であった。
水盤がゆらぐ。
水はただの水に戻り、それはのぞく者の顔を映すだけとなった。
「なんて卑怯なことを。急ぎましょう、マルス様」

「そうです。今こそ、祖国を取り戻すべき時です」
ルークとロディが、怒りで拳を震わせながら叫んだ。
「エストまで捕まっているというの」
カチュアが、パオラの腕を握り締めて言った。
「アベルも辛いでしょうに。エストを助け出さなくては……」
妹をだきよせながら、パオラが言う。
「ミディア様も、早く助けなければ。ボア司祭様のような目に遭わせてはいけません」
リンダが、涙を滲ませながら言った。ボアの死を悲しんでばかりでは、他の多くの命が失われるのを見過ごすだけだと考えて、無理をして気丈に振る舞っている。
「カインたちの進軍を見る限りでは、明日にでも国境に達しそうですね。急がないと」
言いつつ、マリクの顔が難しいものになった。
「それでは、ここからでは間に合わないかもしれないのでは……」
ここまでの道のりを思って、セシルが顔を曇らせた。カダインを出発してから、一月近い時間が経っている。シーダたちの天馬の力を借りたとしても、アリティアまでは数日で辿り着ける距離ではなかった。
「心配しなくてもよい。そなたたちの試練の一つは終わった。帰りは、わしが魔法でアリティアへ送り届けよう」
「ありがとうございます」

ガトーの言葉に、マルスは礼を述べた。
「では、出発の準備だな。作戦も立てねばならぬだろう」
ミネルバが、マルスに言った。
「そうですな。人質を助け出し、カインやアベルと連絡をとって全軍でアリティアを奪回する。言葉では簡単ですが、綿密な段取りができていなければ不可能でしょう」
ジェイガンが、ミネルバに賛同した。
「ならば、そちらは戦いの算段をするがよいだろう。マルス殿はわしと一緒に参られよ。光のオーブをお渡しするゆえ」
ガトーが、マルスだけを促(うなが)した。
「ガトー様」
低い声で、バヌトゥがガトーを呼び止めた。
「分かっておる。ぬしらもついてくるがよい」
バヌトゥの同行を認めると、ガトーが歩き出した。何も言わずに、チェイニーもその後に続く。
部屋の外は、再び極寒の世界であった。一息ごとに、吐く息が白く凍りつく。
「この部屋に、光のオーブと、チキがおる」
そう言って、ガトーは氷竜神殿の端に位置する部屋の扉を開けた。
「チキが!?」

言われて中に入ったマルスは、部屋の中を見て驚きに目を見張った。

部屋の中央には床に描かれた魔方陣から上り立つ光の柱があり、その中にチキの姿があった。かつてテーベの塔で見つけたエリスと、ほとんど同じ状態で眠ったように光の中に浮かんでいる。そして、チキの前におかれた台の上に、光のオーブが載っていた。

「これは、あの時のガトー様の結界ですね。ですが、なぜチキがこのように結界の中に入っているのですか。いったい、何からチキを守ろうとしているのです」

怪訝（けげん）そうにマルスは訊ねた。ガーネフが復活した今、確かにチキを狙わないとも限らない。だが、ここまでして彼女を守らねばならない理由というのも、すぐには思いつかなかった。

「この結界は、チキを彼女自身から守るためのもの。そして、世界を守るためのものであった」

ガトーが答えた。

「彼女自身から……」

マルスは、さらに困惑の度を深めた。

「チキはまだ幼い。ゆえに、自分では完全に神竜としての力を制御することができぬのだ。彼女は、神竜王ナーガ様の一人娘。そして、ナーガ様を超える力を持った者なのだ。もしもチキが竜族の持つ破壊衝動に囚われてしまったら、メディウスなどとはくらべものにならない破壊神となってしまうであろう。そうならないために、結界の中に閉じこめておる

のだ」

「そんな。では、彼女はずっとこのままなのですか」

マルスは、驚いて聞き返した。

ガトーの言葉が正しいのであれば、チキは今初めて結界に閉じこめられたわけではないはずだ。

「わしが連れ出すまで、およそ六〇〇年。チキはずっと、今のように結界の中で眠っておった。彼女が結界の外に出たのは、わしと一緒にいたわずか一〇年ほどの間だけじゃ」

バヌトゥが、うなだれながら言った。ガトーに仕えていたバヌトゥは、ずっとチキを見守っているうちに、彼女がかわいそうになってしまったのだ。そのため、結界の魔方陣を壊し、チキを外に連れ出したのであった。短慮であると言われても仕方のない行動であるが、バヌトゥの目には、チキの姿が石となって大地の中に沈んでいった地竜族と大差ないように見えたのであった。

「そんなにも長い間……。かわいそうではありませんか」

思わずマルスはガトーに言った。

「確かにそうであろう。だが、仕方がなかったのだ。チキが孵った時、すぐに封印の盾の力を使い、彼女は竜人となった。だが、その直後に封印の盾は盗まれてしまったのだ。そのため、彼女から竜石を完全に分離できなんだ。時間とともに、チキの持つ神竜石は、彼女の中に戻りつつある。もし、完全に戻ってしまえば、チキは再び竜の姿に戻ったままと



なるであろう。そうなってしまえば、いずれは他の竜たちと同じように破壊に心を囚われて、この世界を滅ぼしてしまう」

「それでは、チキはずっとこのままなのですか」

「今のままではな。だが、封印の盾が元通りとなれば、盾の力がチキを守ってくれる」

ガトーが答えた。その言い方に、チェイニーがじれたように口を開いた。

「ようは、五つのオーブを集め直して、封印の盾を元通りにすりゃいいのさ。そうすれば、チキも助かるし、メディウスを始めとする地竜の奴らも封印することができる。ガトーは、それをマルスにやらせたいのさ」

「私にですか。もちろん、チキのためにも、ハーディンのためにも、すべてのオーブを集めるつもりですが……」

マルスは、戸惑いを隠せないでいた。自分たちのためにも、封印の盾を復活させることはやぶさかではない。だが、ガトーの力をもってすれば、マルスよりもそれは容易なことのように思える。

「白状しちまえよ、ガトーの爺さん。もう人間に関わるのが嫌になったんだろ」

「それは違う」

責めるように言うチェイニーに、ガトーは首を振った。

「あんたが人間に魔法を教えた結果が、ガーネフだ。俺たちは、人間に関わらない方がよかったのさ」

チェイニーの指摘は、ガトーにとって耳の痛いものであった。ガーネフが執着しなければ、暗黒戦争もあそこまで大陸全土を巻き込んだものにはならなかったかもしれないのだ。

「それは違う、チェイニー」

マルスは、チェイニーの言葉を否定した。

「元はと言えば、私たち人間が封印の盾を壊してしまったからいけないんだ。そんなことをしなければ、私たちと君たちとはもっと早くから友達になれていたかもしれない。メディウスだって……。ガーネフも、ハーディンも、闇のオーブに魅入られることはなかったはずなんだ。そう考えなければ、あまりにも悲しいじゃないか。私たちは、神竜族に一度助けられている。だからといって、今度も君たちに助けを求めてばかりじゃだめだと思うんだ。もしここでまた頼ったら、また神竜の力であるオーブの力を頼って、封印の盾を盗み出す者が現われるかもしれない。うまく言えないけれど、オーブのために私たちが動くのではなく、私たちが自分たちの中に潜む闇と戦うことによって、オーブが力を貸してくれるようにならなければいけないんだと思う」

マルスは、うまく自分の思いを言葉にできなくて、もどかしげに身振り手振りでチェイニーに気持ちを伝えようとした。それを見て、チェイニーが呆れたような顔になる。

「マルス、お前って、つくづく馬鹿だな。馬鹿正直もここまでくると、芸術品だよ。まあ、だからこそほうっておけないんだが。そんなんだから、ガトーも自分の役割をお前に押しつけようなんて考えちまうのさ」

何ともかわいい者を見るような優しい目で、チェイニーがマルスを見ながら言った。
「どういうことですか、ガトー様」
「チェイニーの言う通りじゃよ。時代は、すでに人間たちのもの、マルス殿たちのものとなっておるのだ。我らも、主導権はそなたたちに渡すべき時だ。大賢者だなんだと言って、そなたたちを子供扱いして何でも押しつけるのは間違いだと考え始めたのじゃ。道はそなたたちで切り開き、そして、そなたたちが進むべきものだ。わしらは、すでに傍観者でしかない」
そう言うと、ガトーが光のオーブを手に取り、マルスに手渡した。
「さあ、チキの結界を解こう。マルス殿、チキもそなたにお預けする。神竜石を捨て去ったわしやチェイニーよりも、彼女はマルス殿の役に立つであろう。そして、封印の盾を復活させ、彼女を忌まわしい運命から解放してやってくれ。これは、わしからの頼みじゃ」
ガトーが両手を挙げた。
光の柱がゆっくりと消え、チキが床に降り立った。
「チキ？」
マルスは、チキの正面に進み出て、そっと彼女の名を呼んだ。
少女の目がゆっくりと開かれる。
「――マルスお兄ちゃん⁉　わあ、本物のマルスお兄ちゃんだ」
マルスの顔を見たチキが、勢いよく彼にだきついてきた。

「淋しかったのかい」
「うん。ずっと怖い夢を見ていたの。真っ暗なところにずっと一人でいる夢。そこで、私は神竜に戻っちゃってるの。それで、たまに知っている人が現われるんだけど、誰も私のことを覚えてないの。怖がって逃げていくから後を追いかけていくと、いつの間にか私は町の中にいて、みんな壊してしまっているの。嫌だと思っても身体は止まらなくてみんな死んじゃうの。それでね、また独りぼっちになって……。それが何度も何度も、繰り返されるの」
思い出してしまったのか、チキが涙を浮かべた顔をマルスの身体に擦りつけてきた。
「もう大丈夫。そんな夢は見なくてもいいんだよ。私が、チキを守ってあげるから」
「本当、マルスお兄ちゃん？　私がいてもいいの。私なんかいらないって言わないでくれるの？」
チキが顔を上げてマルスの顔を見上げた。
「本当だよ。チキは私にとって必要な存在だよ。これからは、ずっと一緒にいよう」
「私も、マルスお兄ちゃんやみんなと一緒にいるのがいい」
マルスは、小さなチキの身体をだきしめてやった。
やっと落ち着いたのか、チキが周りを見回す。
「あ、バヌトゥー」
バヌトゥの姿を見つけたチキが、勢いよく彼の許へ駆けよった。その次にガトーの姿を

見つけて、わずかに怯（おび）えたように顔を強ばらせた。
「チキよ、心配するでない。わしのことは、さぞかし恨んでいような。だが、もう眠りにつく必要はないのだよ。マルス殿とともにいくがよい。そして、彼を助けるのだ」
ガトーの言葉に、チキが瞬間きょとんとした顔になった。
「マルスお兄ちゃんと一緒にいってもいいの？」
チキが聞き返した。
「ああ」
ガトーが微笑んだ。
全身で喜びを表わすと、チキが再びマルスに飛びついていった。
「では、戻るとしよう。皆が待っていようからな」
ガトーが、マルスたちを促した。
「ガトー様は、これからどうなさるのですか。私たちとは、一緒にきていただけないのでしょうか」
マルスは訊ねた。
「マルス殿が望むのであれば、同行もしよう。だが、今はその時ではない。まだ、ガーネフの動向が分からぬからな。わしは、それを調べるつもりだ。代わりと言ってはなんではあるが……」
「分かってるよ。言われなくっても、俺はマルスについていくつもりさ」

チェイニーが、皆まで言うなとガトーに言い返した。

「そうですか。では、私はハーディンと闇のオーブを何とかいたします」

マルスは了解した。

「うむ。頼むぞ、我らすべての未来はそなたに託すつもりだ」

ガトーの部屋に戻ったマルスたちは、アリティアの人質奪回の作戦を綿密に練り上げ、その後カインたちのアリティア到着に合わせて充分な休息をとった。

そして、深夜、マルスたちはガトーの魔法によってアリティアへと転移されていった。

伝承1　王位継承

光剣ファルシオンを無事持ち帰ったアンリによって、ついにメディウスは倒された。

長きに渡った苦しい戦いも終わったのだ。

人々はそれぞれの故郷に戻った。

アリティア聖王国も、アルテミス王女の下（もと）に復興が始められた。

戦いに功績のあった者たちには恩賞が与えられた。だが、それは一つの時代の終わりでもあったのだ。

アンリにも、救国の英雄として多大な恩賞が与えられた。これによって、アンリはアリティア地方の領主となったのであった。

だが、それだけであった。

アンリとアルテミスが、ただの少年と少女の日に戻ることはなかったのである。

早急な王家の建て直しを迫られたアルテミス王女は、その意思とは関係なく伴侶を定めることを家臣団から要求された。

その時候補に挙がったのは、救国の英雄たちである。すなわち、メディウスを倒した英雄アンリ、解放軍を指揮した聖騎士カルタス。

アルテミスは、アンリを選んだ。

アンリは、最初からアルテミス一人のための勇者であったのだ。

だが、周囲の者は猛反発した。それは、アンリが平民の出身だったからである。アカネイア聖王国の筆頭貴族であったカルタスとでは、身分に極端な差があると重臣たちは考えたのだ。

それでも、アルテミスは自分の意志を貫こうとした。王家を捨ててでも、アンリを選ぼうとした。そのことがまた、重臣たちの危機感をあおったのであった。彼らは、現状の体制が崩れるのを恐れたのである。

結局、周囲の説得によってアンリが身を引く形で決着がついた。アルテミスの立場が危うくなるという言葉に、彼女の身を案じたアンリが結婚は辞退するとアルテミスに告げたのである。同時に、アルテミスもアンリの身を案じていた。このまま我を押し通せば、アンリの身に危険が及ぶことに気づいたのである。

そして、アルテミスとカルタスの婚姻が執り行なわれた。

下々の国民は、アルテミスとアンリの仲は聞き知っていたので、これは悲恋として語り継がれた。後に言う、「アルテミスの運命（さだめ）」である。

アカネイア聖王家の家宝であるファイアーエムブレムを行使する者は、真に愛する者とは決して結ばれないという逸話が、これによ

て作られたのである。

だが、カルタスとて王としての器を備えた英雄であり、国内に対しては善政を、国外に対しては領土拡大の辣腕（らつわん）を遺憾なく発揮してアカネイア王国を栄えさせていった。そのため、アルテミスとアンリに同情する者はいても、彼らを結び合わせようとする者はいなかったのである。

カルタスも、まだ少女が恋に恋する時期のこととして、二人の仲には言及しなかった。そのことによって、自分の度量の広さを国民に印象づけようとしたのである。また、アンリが必要以上に真面目であり、密通など決してしない性格だということを見抜いていたからということもあった。

その後、カルタスはオレルアンを平定して、弟のマローンを国王に据えた。

アカネイア以外の王国の誕生に国民は喜び、アンリを国王にという声が高まっていく。他国をアカネイアの属国程度にしか考えていなかった国民は、安易に盛り上がったのである。

アルテミス王妃は、その声に応えた。アリティアを独立国として、アンリを王としたのである。

アンリは、アカネイアに終生変わらぬ忠誠を誓った後にアリティア王国の王位に就いた。
後にグルニア王国とマケドニア王国も独立し、アカネイア大陸の各国の基礎が作られるのである。
アルテミスはカルタスとの間に一子をもうけたが、その後崩御している。
アンリはアリティア王国の発展によく努め、アリティアの建国王として称えられたが、終生妻を娶ることはなかった。その心は、最期までアルテミスに捧げられていたのである。
アンリの悲恋は美談として残りはしたが、現実には、世継ぎを残さずに没したことは大問題であった。
アンリの血縁として、弟のマルセレスが王位を継承する。だが、アンリがあまりにも偉大な王であったがために、彼では臣下のすべてを掌握することができなかった。
マルセレスの統治に不満を持った一部の者たちが反乱を起こし、アリティアは分裂の危機に陥ったのである。
内乱に発展するかとも思われた反乱だったが、そうはならなかった。それは、アンリの力による。死してなお、アンリの存在は、人

人の中で大きかったのだ。そのため、人々は反発しながらもアリティアの国土を戦禍で汚すことをよしとせず、話し合いによる分離を成し遂げたのであった。

新しく起こった国の名をグラという。

分裂後しばらく、アリティア王国とグラ王国は緊張関係にあったが、統治者が次の世代となる頃には互いに和解し、軍事同盟を結ぶまでに国交は回復した。

だが、その関係も、グラ国王ジオルの時代に終焉を迎えることになる。

ドルーア帝国と内通したジオルは、アリティア王国を裏切って彼の国を滅亡に追いやったのである。

もともと政治に興味を持たなかったジオルは、酒や女に興じる日日を送っていた。そのため、ドルーア帝国の使者として突然現われたガーネフの恫喝に、いともたやすく従ってしまったのだった。

このジオルの優柔不断さは、後のグラ王国の運命を決定することとなる。

やがて、決起したマルス王子がオレルアン王国とアカネイア王国を次々に解放し、今や敵国となったグラへと攻め上ってきた。

戦いはあっけなく決着し、ジオルはその戦いで命を落とし、グラ王国はアリティア王国の属領となったのである。

そのまま、アリティア王国は初期の国土に戻ると思われた。だが、そこへ横槍を入れてきたのは、新しくアカネイア神聖帝国の皇帝となったハーディンである。

アルテミスの運命（さだめ）ゆえか、ファイアーエムブレムを行使したニーナ王女は愛するカミュとは結ばれず、ハーディンの妻となっていた。そして、王となったハーディンは、アリティアの国力の切り崩しを図ったのである。

そのための手段として使われたのは、ジオルの娘であるシーマであった。

女癖の悪かったジオルは、結局正妃との間には嫡子をもうけなかった。シーマは、王宮にいた侍女との間にできた最初の子供である。王宮で育ったシーマではあったが、当然のごとく周囲の風当たりはきつく、一五歳の時に出奔している。その後はアカネイア王国の首都パレスに隠れ住んでいたわけだが、そのことは結果的に彼女の命を救うこととなった。帝国と同盟を結んだ後に、ジオルの子供たちはすべて人質として連れ去られてしまったからだ。その後の彼ら

の消息は、暗黒戦争終了後も知られてはいない

終戦後にシーマの存在を知ったハーディンは、彼女を正当なグラ王国の世継ぎであるとマルスに報告した。そして、グラ王国の再興をマルスに提言したのである。

これにより、マルスはアリティア王国領となっていたグラを、いったんアカネイア神聖帝国へ委譲（いじょう）した。その後、アカネイア神聖帝国はグラを独立させたのである。

だが、その実体はアカネイア神聖帝国の完全なる属国であり、シーマもただの傀儡（かいらい）にすぎなかった。

そして、グラ王国は、最後の変転を迎えるのである。

第2章　王子の帰還

1

深夜、捕虜たちを監禁していた砦では、外壁の上に立つ歩哨たち以外は静かに惰眠を貪っていた。門を固く閉ざし、内外の出入りはできないものと安心しきっていたのだ。カダインから進軍してきているアリティア騎士団はまだ一日ほどの距離にあり、アリティア市民から作った部隊も国境近くに出ていて砦からは遠かった。後方であるという安心感が、アカネイア軍の油断を誘っていたのだ。

司令官であるエイベルは、その時自室で熟睡していた。そこへ、突然、マルスたちが現われたのである。声を出すこともできずに、エイベルは捕まってしまった。

ここで、チェイニーの力が実に役に立ったのである。

エイベルになりすましたチェイニーによって、砦の兵士たちはアリティア城へと移動させられた。アリティア騎士団の奇襲部隊が城を襲っているというデマを流し、兵たちを砦の外に追いやったのだ。

敵との戦力差を減らしたマルスたちは、再びチェイニーの力を借りて、武器庫を支配下においた。そのまま、エストたちの囚われている牢獄を開放したのである。

「パオラお姉様、カチュアお姉様！」

姉たちの姿を見たとたん、エストが立ち上がって叫んだ。

「さあ、みんなに武器を渡して。この砦を私たちのものにするわよ」
妹に剣を手渡しながら、パオラが言った。
人数的に優位にたったマルスたちは、ルークたちを先頭に砦内を制圧していった。実際の戦闘はロディたちが行なったが、背後に多くの人々がいるのを見て、敵はあっけなく戦意を失ってしまったのだった。
「他に人々が囚われている場所はあるか」
砦を完全に制圧すると、マルスはエイベルに問いただした。
「私を捕まえて、ただですむと思っているのか」
エイベルは虚勢を張ろうとしたが、無駄なことであった。
命乞いをするエイベルから必要な情報を仕入れると、マルスは彼らをエストたちの替わりに牢へ押し込めた。
捕虜となっていた人々はこの砦にしかいないが、城下町である王都アンリにはまだ人が残っていることを知ったマルスは、決断を迫られることになった。
「大丈夫です。城にはアストリアさんがいましたから、これ以上卑怯なことはさせないと思います」
エストが、持ち前の陽気さを取り戻してマルスに言った。アストリアの部隊はパレスには戻らず、アリティアに駐留しているとのことであった。おそらくは、ミディアの反乱に呼応することをハーディンが危惧したためであろう。

そのため、アリティア駐留部隊の司令官であるウィローと、何かと意見の対立を起こしているとのことであった。司祭からアカネイアの将軍となったウィローは、策士的な性格で、騎士の精神などは持ち合わせてはいない。そのため、正面から堂々と敵を征そうとするアストリアとは水と油であった。

「だが、アカネイアの傭兵隊長には、俺たちはさんざん苦しめられたんだぞ」

ルークが、渋い顔をして言った。

「いや、アストリアは、今は立場の違いから敵となっているが、ともにドルーア帝国と戦った仲間だ。いつまでも、人々を苦しめる戦いをするわけがない。私は、彼を信じたい」

「では、城下の人々は私たちが守ろう。もしも、敵が人々に手を出そうとしたならば、私がこの身を挺して守ってみせる。それが、マルス殿に対するせめてもの恩返しだ」

ミネルバが、マルスに約束した。

「作戦は決まりましたな。カインやアベルがやってくるまで、我らは少しでも敵をこの砦におびき出してやりましょう。へたに城や城下に立てこもられるよりも、野戦の方が我らに分があります」

ジェイガンが話をまとめた。エストがアベルに人質解放を告げ、合流した全軍をもって一気にアリティア城を奪回する作戦だ。その成否は、敵の援軍がくる前に、駐留軍を制圧できるか否かにかかっている。

「よし、では、皆それぞれの役目に頑張ってくれ」

マルスは、皆に告げた。

夜が明ける。

祖国の奪回をかけたマルスたちの戦いが始まったのである。

2

「止まれ！」

整然と進んでくるアリティア騎士団に対して、アベルが大声で呼びかけた。

「アベルじゃないか。俺たちに合わせて決起してくれたのか」

カインは、アベルの姿を認めて、喜んで前に進み出ようとした。

「止まれと言っている！」

アベルが、叫んだ。

「どういうことなんだ」

事情を知らないカインは、驚いて聞き返した。

「お前たち反乱軍を、これ以上アリティアに入らせるわけにはいかない。もし、進むと言うのであれば、我々が相手になろう」

「馬鹿な。お前は、いったい何を言っているのだ」

「アリティアの人々が人質となっているのだ。頼む、カイン、今は引いてくれ」

困惑を隠せないカインにむかって、アベルが白刃を向けた。
「よけいなことは、しゃべるんじゃない」
アベルの監視でついてきていた帝国軍の兵士が、アベルを睨みつけながら言った。
「おのれ、卑怯なまねを……」
カインは歯がみしたが、どうすることもできなかった。
その時、アリティア軍の後方で、戦いの喧噪がわき起こった。
「何ごとだ」
叫ぶカインの許に、後方から駆けつけた伝令が馬をよせてきた。
「後方から、グラ軍が現われました。現在、シリウス殿の率いるグルニアの部隊が交戦中です」
伝令が、現状を報告する。
「そういうことか。つくづく、相手の司令官は見下げはてた奴だな」
カインは言った。
アカネイア軍は、自軍を動かしてはいない。アベルたちアリティアの民兵でアリティア騎士団を足止めしておいたところへ、グラ軍で攻撃を仕掛けて挟み撃ちにしようというのだ。もし進めば、アリティアの人間同士という悲惨な戦いで士気が落ちたところへ、グラ軍とアカネイア本隊で挟撃するつもりなのだ。かといって、グラ軍のみと戦っても、時間と兵力を消耗するだけで、先へは進めない。そのうちに、ハーディンの騎士団がやって

きて、アリティア騎士団は全滅させられるだろう。しょせんは、グラ軍も時間稼ぎの捨て駒なのだ。

引くも進むもできない状況に、カインは苛立ちを抑えきれなかった。

「ドーガの部隊を後方へむかわせろ。我々は強行突破をかける」

カインは、きっとアベルたちの方を睨み据えた。

苦渋の選択であった。アベルたちが本気で攻撃してこないだろうということに一縷(いちる)の望みをかけて強行突破するしかなかった。その上で、人質となっている人々を助け出すか、敵の本陣を一気に攻め落とすかである。だが、それができるのはカインの率いる騎馬隊だけだ。戦力的には、かなりの苦戦を強いられるだろう。けれども、今はその方法しかカインには思いつかなかった。その怒りは、すべてアカネイア本隊にぶつけてやろうと心の中で誓う。

直属の騎士たちを集めて密集隊形をとったカインは、まさに手を挙げて突撃の合図を下そうとした。

その時、一頭のペガサスがカインとアベルの間に舞い降りた。

「みんな待って。アベル、私たちは無事よ。マルス様が助けてくださったの！」

エストが力の限り叫んだ。その言葉が、一条の光のようにカインやアベルたちの心を照らした。沈んでいた彼らの顔が、マルスの名を聞いたとたん一瞬にして精気と希望に満ちる。

「馬鹿な。嘘っぱちだ。さっさと攻撃を開始しろ。さもなければ、大臣の命はないぞ」

アベルの横にいたアカネイア兵士が叫んだ。

その言葉に従って、アカネイア兵士の幾人かがエストの口をふさごうと飛び出した。

「エスト！」

出遅れたアベルが叫んだ時、幾本もの矢が飛来してアカネイア兵士たちを貫いた。ジョルジュたちだ。

「このような卑怯な行ない、アカネイアの騎士にあらず。貴君らに未だ誇りがあるのならば、正義のために私に従え」

その言葉に、アカネイアの者たちが動揺する。

「ええい、反逆者の言葉に惑わされるな。アベル、さっさと攻撃を開始……」

皆まで言わせずに、アベルが槍を一振りしてアカネイアの隊長を馬から弾き落とした。

「アリティアと正義のために！」

槍を掲げてアベルが叫ぶ。

「アリティアと正義のために！」

人々が唱和した。アカネイア兵士の幾人かも、それに倣(なら)う。

たちまち、アカネイアに忠誠を誓う者たちと、アリティアに忠誠を誓う者たちの間で戦闘が開始された。

「アリティアの民を救うのだ。全員、突撃せよ！」

カインが叫んだ。アリティア騎士団の精鋭たちが乱戦の中に突入していく。
「我らに味方するアカネイア兵は、武器を下ろして下がれ。敵と間違われるぞ」
ジョルジュが叫んだ。味方となった兵を殺さぬように、自分のそばへと集めていく。
部隊を構成する兵士のほとんどがアリティアの味方となったため、アベルに同行していたアカネイア軍はあっけなく全滅した。
「アベル、よくぞ無事でいてくれた」
「お前こそ。こうして再び会えるとは、思ってもいなかったぞ」
アリティア軍の双璧と呼ばれたカインとアベルが、久方ぶりに固く互いの手を握り合った。
「それで、マルス様は無事なのか」
アベルがエストに訊ねた。
「無事だけれど、アストリアさんの部隊に取り囲まれて苦戦してるわ」
エストが、自分が砦を後にした時の状況をアベルたちに伝えた。
「ならば、私の部隊が先行してアストリアを説得してみよう。彼とて、いいかげん事の善悪がわかっていい頃だろう」
ジョルジュが、カインに申し出た。
「自信はあるのか」
カインは、聞き返した。

「マルス王子がいらっしゃるのであれば」
自信を込めてジョルジュがうなずく。
「では頼む。我々も、グラ軍を倒してすぐにそちらへむかう。アベル、ジョルジュとエストとともにマルス殿下の許にむかってくれ」
「心得た」
カインの言葉に、アベルが答える。すぐさま、彼らはマルスの許へむかっていった。
見送るカインの許へ、伝令がやってくる。
「アカネイアの伏兵です。側面から、大軍の攻撃を受けています」
「慌てるな。マルス殿下が、アンリの道を征して御帰還なさったのだ。もはや、我らに何を恐れる必要があろうか」
カインの言葉は、アリティアの者にとっては重大な意味を含んでいた。建国の祖であり、大陸を救った最高の英雄であるアンリと同じ試練を、マルスが乗り越えたのである。それは、とりもなおさず、マルスが真にアンリの再来であるということを示していた。
「スター・ロードの御帰還を全軍に知らせるのだ。勇者の加護と、正義は我らにありと」
カインは全軍の士気を高めると、新たに現われたアカネイア軍に騎士団をむかわせた。

3

「エストさんは、うまくやってるかしら」
「大丈夫。すぐにカインとアベルを連れて戻ってくるさ」
砦の城壁の上で、リンダとマリクが言葉を交わしていた。
今や、砦の周りにはアストリア率いるアカネイア傭兵団がひしめいている。
「マルス王子、無駄な抵抗はやめて、直ちに投降しろ。アカネイアに反旗(ひるがえ)を翻すことがどれだけ愚かなことか、お前にもわかっているだろう」
アストリアが、城壁の上に立つマルスにむかって呼びかけた。
「君こそ、よく目を開いて周りを見てくれ。今のハーディンのどこに正義があると言うんだ」
「それは問題ではない。俺は、ニーナ様のアカネイアに剣を捧げた。ニーナ様がハーディン皇帝を支持していらっしゃる以上、その命令には逆らえない」
アストリアが答える。
膠着(こうちゃく)状態が続いた。そこへ、ジョルジュたちの部隊が現われる。
アストリアの部隊を刺激しないようにと、アベルたちの部隊は距離をおいてジョルジュたちについてきていた。それが、アストリアたちの目には、ジョルジュたちの部隊がアリ

ティア軍に追われているように見えたのである。そのため、戦闘隊形をとりながらも、アストリアはジョルジュたちの部隊のぎりぎりまでの接近を許した。

「止まれ。それ以上進めば攻撃する」

アストリアの命令を受けた傭兵の一人が、ジョルジュたちの前に立ちはだかって彼らを止めた。

「アストリアはいるか。彼と話がしたい」

ジョルジュは大胆にも一人で前に進み出た。

遠目でも、美丈夫であるジョルジュは、手にしたパルティアとともすぐにそれと分かる。

連絡を受けたアストリアは、ジョルジュを自分の許へと連れてこさせた。

「久しぶりだな、ジョルジュ。裏切り者のお前も、アカネイアへ戻る気になったのか」

開口一番、アストリアがジョルジュを蔑む(さげす)ように言った。彼にとっては、まだジョルジュは卑劣な反逆者であるのだ。

「そうではない。私は、お前の真意を問いただし、説得しにきたのだ」

「まだそんなことを言っているのか」

ジョルジュの言葉に、アストリアが反発した。

「お前は、いったい何に忠誠を誓っているのだ。アカネイアという国になのか、それとも、ハーディンという一人の男にか」

厳しい口調で、ジョルジュがアストリアを問いただした。

「分かっているはずだろう。俺たち三人は、パレスで誓ったはずだ。ニーナ様に、この命を捧げると」

何を今さらと、アストリアが言い返した。

「ならば、どうしてハーディンの命令を聞く。ニーナ様は、ハーディンによって、ガーネフに引き渡されてしまったのだぞ。しかも、ニーナ様を助け出そうとしたミディアを始めとする多くの騎士たちは、ハーディンに捕まって、日に日に処刑されているというのに、お前は何をやっているのだ」

「何だと。それは本当か」

その言葉に、アストリアが表情を変えた。

「本当だ」

ジョルジュがうなずく。

「証拠はあるのか。ハーディンが、ニーナ様をそのような目に遭わせているという証拠が。俺はハーディンの命令になど従っているつもりはない。それが本当であれば、ニーナ様をお救いせねばならん。そして、ミディアも……。だが、その言葉が俺をたぶらかすためのものだとしたら、ハーディンが言うようにこの戦いがマルスの野心から始まったものであるならば、俺は貴様を許さんぞ」

アストリアが、動揺を隠しながらジョルジュに詰めよった。

「証拠ならある。マルス王子、お見せください」

ジョルジュが、城壁の上のマルスにむかって叫んだ。
マルスはジョルジュの意図することを悟ると、手に持った盾を高々と掲げた。
「あれは、ファイアーエムブレム。なぜ、マルスが、アカネイアの紋章を持っているのだ」
アストリアが叫んだ。戦闘中に彼の部隊がマルスの旗本隊に近づくことはなかったため、今初めて紋章の盾を目にしたのである。
ジョルジュがアストリアに詰めよった。
「ニーナ様は、マルス王子に紋章の盾を託されたのだ。その意味が分かるか」
「何かを正せと、マルスにアカネイアの魂を託されたというのか……。つまり、今ハーディンが動かしているアカネイアは、魂のない抜け殻なのか……」
部下の一人が、アストリアたちの会話に口を挟んだ。
「ですが、敵が紋章の盾を盗んだということはないのでしょうか」
「黙れ。もし盗まれた物であるならば、それこそハーディンはそれを口実としてアリティアを滅ぼしただろう。それに、紋章の盾のある宝物庫の鍵を持つのは、ニーナ様のみ。たとえ皇帝といえど、アカネイア王家の血を持たぬ者には、紋章の盾を盗み出すことは不可能なのだ」
アストリアが、部下を叱りつけた。
「では、ニーナ様がガーネフに連れ去られたというのも、本当なのだな」
「ああ。それに、ミディアや彼女の部下だった騎士たちが窮地に陥っているというのも事

実だ」

ジョルジュが、アストリアの言葉にうなずいた。彼の言葉に、ニーナを慕う兵士や、ミディアの部隊に知り合いのいる兵士たちが動揺する。

「アストリア。頼む、私たちを、マルス王子を信頼してくれ」

ジョルジュが頼むと、アストリアは彼に背をむけた。

部下の傭兵たちの方をむくと、アストリアは彼らを見回した。一時的に戦闘が中断されていたため、周囲には不思議な静けさが満ちている。

アストリアが、メリクルソードを高々と掲げた。

「俺は、真実を確かめ、ニーナ様をお救いするために、紋章の盾に従う。俺についてきたい者は残れ。そうでない者は、自由にするがいい」

そう叫ぶと、アストリアがマルスを見上げた。

「ファイアーエムブレムの勇者よ、我らを導くと誓うか！」

大音声（だいおんじょう）でアストリアがマルスに訊ねた。

「誓おう。私は、正義と真実を人々に知らしめると、このファイアーエムブレムにかけて誓う！」

マルスが答えた。

「我が剣を受けられよ、マルス王子。ファイアーエムブレムの下、正義とともに戦うと我らは誓う！」

アストリアが、メリクルソードを突き上げて誓った。多くの傭兵たちがそれに倣う。アストリアの部下たちは、傭兵といっても他国を渡り歩くような金だけが目当ての者たちとは違う。主に、騎士の身分を持たない地方の民兵たちが中央にやってきたものだ。そのため、アカネイアに対して強い愛国心を持っていた。その忠誠は、オレルアンからやってきたハーディンにではなく、アカネイア王家のニーナに注がれていたのである。

アストリアの部隊の合流を喜んで、ジョルジュの部隊の兵士たちも鬨の声をあげる。

「これは……。さすがはマルス殿下だ」

ジョルジュの部隊と合流したアベルが、感心したように言った。アリティアの市民兵たちも、マルスに剣を捧げるアカネイアの兵士たちを見て、かなり驚いている。つい昨日までは、目の前にいるアカネイア兵の半数は敵であったのだ。だが、もっと昔に遡れば、二年前には、同じ兵士たちがドルーア帝国からアリティア王国を取り戻すために戦ってくれたのだ。

人？　国？

自分たちを損なう存在が本当は何であるのか、アリティアの市民たちは戸惑いを隠せないでいた。

「みんな、アリティアの人々も、アカネイアの人々も、聞いてほしい」

マルスは、城壁の上から人々にむかって叫んだ。

「私たちが戦っているのは、闇のオーブという鏡が見せている自分自身の心だ。ハーディ

ンの持つ闇のオーブは、人の心の暗闇を引き出して悪に染めてしまう。だからこそ、私たちは手を携えて戦わなければならない。正義の心を示して、悪の心と戦わなければならないのだ。アリティアもアカネイアもない、私たちは人として、いや、この大陸に生きるものとして、ともに正しき心を示そう。それが、私たちの戦いなのだ」
「ファイアーエムブレムの下に」
「正しき心を集めよ」
「マルス王子とともに！」
「ファイアーエムブレムの下に、正しき心を！」
人々が唱和した。
砦を取り囲む人々の心が一つにまとまる。先ほどまで敵対していたことなど瑣末事であるかのように、人々はマルスの掲げるファイアーエムブレムを一斉に見上げた。
その時、天空から巨大な火球が落ちてきた。轟音をあげて落下する火球は、城壁に命中して粉々に破壊した。
「メテオの魔法だ。ウィローめ、俺たちがここにいることを知りながら……」
アストリアが怒りをあらわにした。おそらくは、いつまでたっても戦闘らしい戦闘が始まらないどころか、アリティア軍と一緒になってマルスの名を叫んでいるアストリアの部隊の現状を知らされて、ウィローが彼らを見限ったのだろう。
メテオはファイアー系の最高位魔法でありながら、威力がありすぎて禁呪とされた魔法

いたのであろう。ウィローは、暗黒司祭となることによってガーネフからメテオの魔道書を手に入れていたのだ。

「町に！」

アリティアの人々が叫んだ。火球は、マルスたちがいる砦だけでなく、城下町の方へも容赦なく降り注いでいた。

「何ということを。あそこには、女子供と老人しかいないんだぞ」

アベルが叫んだ。

圧倒的な攻撃に逃げ惑いながら、人々は街に残してきた家族たちのことを思い、混乱に我を忘れそうになった。

「皆の者、静まれ！」

老練な威厳に満ちた大音声が、恐慌をきたしかけた人々の動きを止める。

「マルス殿下」

ジェイガンが、マルスに言葉をつなげた。

マルスは、それにうなずいた。一定の間をおいて降ってくる火球を恐れもせず、一歩も動かずに人々の方を見据える。

「今こそ、我らの力をもって、悪しき行ないをやめさせる時だ。アベル、すぐに町へむかって人々を救え！」

「かしこまりました。皆、俺に続け！」

マルスの命令を聞いて、アベルたちが町へ急行した。街の上空には、ミネルバたちが人々を守って飛び交っている。安全な方向へ人々を誘導しているのか、あるいはウィローが町へさしむけた騎士団と戦闘に入っているのだろう。どちらにしても、早急に助けが必要であった。

「ジョルジュ殿、アストリア殿、二人は私と一緒に。アリティア城にいき、これ以上の非道な行ないをやめさせる」

「承知した」

マルスの言葉に、アストリアが答えた。

砦の中にいた兵士たちを素早くまとめて外に出ると、マルスはアカネイアの兵士たちと一丸となって城を目指した。

「あそこを！」

アリティア城の一番高い塔を指してマリクが叫んだ。そのバルコニーには、魔道書を掲げた一人の男の姿があった。彼の眼前の空中には炎によって描かれた魔方陣が浮かび上がり、そこから火球が空へと放たれていたのだ。その男こそ、ウィローに違いない。

マルスたちに気づいたウィローが、メテオの魔道書を持って振りむいた。

「マルス王子、ここは任せてくれ！」

ジョルジュが、立ち止まる。パルティアに矢をつがえると、力強く弓弦を引き絞った。ブンと音をたてて矢が放たれる。その流れるような動作は、ウィローが呪文を唱えるより

も早かった。正確な狙いで、炎につつまれた矢が遥か彼方の魔道書を貫く。
間一髪、難を逃れたウィローが、魔道書を投げ捨てて転がるように身を伏せた。矢に射抜かれた魔道書が、炎をあげて灰となる。
「今のうちだ。城に突入せよ」
ジェイガンが叫んだ。
待ってましたとばかりに、ルークたちが先陣を切る。遅れてなるかと、アストリアたちもそれに続いた。
遠距離から魔法で攻撃できなくなった帝国軍は、正門から騎士団を出撃させてきた。
「剣を捨てよ。ウィローの非道を見て見ぬふりをするのであれば、容赦なく切り捨てるぞ！」
アストリアが帝国兵たちに降伏を呼びかけたが、ウィロー直属の部下である敵騎士団は従わなかった。たちまち、激しい戦闘が始まる。
敵は切り札の戦力を温存していた分手強かった。押してはいるものの、足止めされる形になって城内になかなか突入できなかった。あまり時をかけては、ウィローに逃げられる恐れもある。
そこへ、アカネイアとグラの部隊を打ち破ったカインたちが駆けつけてきた。一気に形勢が逆転する。
「風は光に輝かん。荒ぶる魂は敵を切り裂く刃となれり。舞い踊れ、風の白刃よ！」

マリクが、エクスカリバーで城門を破壊する。
マルスの命令一下、アストリアたちが城になだれ込んでいった。馬を乗り捨てたロディたちが、剣を抜いてそれに続く。
「突入！」
「マルス王子はファイアーエムブレムを持っておられる。それに逆らうは、アカネイア王家に剣をむけるも同じこと。それを知ってもなお戦おうと言うのであれば、容赦はせん」
アストリアが叫んだ。アカネイア兵たちに動揺が走ったが、部隊長たちがすぐにそれを静めてしまった。もともと、ウィロー直属の騎士たちは、騎士とは名ばかりの者たちばかりだ。戦いの腕や野心をかわれてハーディンに騎士にしてもらった傭兵崩れが多い。彼らにとっては、ファイアーエムブレムの示すアカネイア王家の威光などどうでもいいことである。彼らが従うのは己の欲望のみ、そして、情け容赦のないハーディン皇帝に対する恐怖のみであった。
相次ぐ造反に孤立感を深めたウィローは、城の宝物庫から金になりそうなものを持ち出して脱出を図った。城の制圧もさることながら、大地のオーブの回収を第一に考えていたマルスたちと、意に図らずも宝物庫近くで鉢合わせする。
「ええい、血路を開くのだ。殺せ、殺せ！」
服のポケットに詰め込めるだけ宝飾品を詰め込んだウィローが、大地のオーブを握り締めて叫んだ。及び腰だった部下たちが、俄然士気を取り戻してマルスたちにむかってくる。

ルークとロディが前に飛び出し、セシルが素早くマルスのそばについた。狭い回廊の中で、接近戦が繰り広げられる。

「壁に！」

マリクと目を見交わしたマルスが、機会を見計らって叫んだ。反射的に左右の壁際に避難したルークたちの中央を、エクスカリバーの真空波が吹き抜けていく。前衛の兵士が倒れるところへ、魔法を追うようにして飛び出したアストリアとマルスが斬りかかった。

「往生際が悪いぞ、ウィロー。諦めて投降しろ」

ウィローに迫りながら、アストリアが叫んだ。

「誰が、裏切り者の貴様などに……」

「そうか」

その返事を聞いたアストリアは、容赦なくウィローの身体にメリクルソードを突き立てた。

「残念だが、俺は貴様を同志だと思ったことはない。それが今日はっきりと分かった」

倒れゆくウィローにむかって、アストリアが言い捨てた。

ウィローの手から零れた大地のオーブが、床の上を転がってマルスの足下に辿り着く。

「よかった。危うく、オーブを持ち去られるところだった」

大地のオーブを拾い上げて、マルスは言った。ルークたちの活躍によって、立っている敵はもう一人として残ってはいなかった。

4

祖国を奪回したマルスは、国民に歓呼とともに迎えられた。
大陸のすべての国を巻き込んだ二度に渡る戦争。その二度とも他国に占領されたアリティアを、マルスはそのたびに取り戻したのだ。たとえ何が起ころうとも、マルスさえいれば最後には救われる。人々にとって、マルスは希望そのものとなっていた。
だが、喜んでばかりもいられなかった。
手早く国内の残敵を掃討すると、マルスはいよいよアカネイアへの進攻にとりかかった。
このままアリティアに留まっていても、再び帝国軍の攻撃を待つだけである。マルスは、これ以上アリティアを戦場にしたくはなかった。それに、一刻も早くハーディンから闇のオーブを奪い、彼とアカネイアを正気に戻さなければならない。
幸いにして、カダインとグルニアが味方となっているため、アリティアの後顧(こうこ)の憂(うれ)いはない。そのため、マルスは全軍をアカネイアにむけて進めることが可能であった。だが、その進路に位置していたのがグラ王国である。
グラ自体は、今さら占領してもほとんど意味がなかった。脅威となるほどの戦力は残っていないはずであったし、アカネイア攻略を急ぐのであるのならば無視してもいいくらいだ。

だが、アカネイアの全軍を相手にするとなれば、アリティアとしても全戦力を投入せねばならなかった。その場合、いくら小勢力とはいえ、グラはアリティアの脅威であった。守備隊がほとんどいない状態であれば、再占領されて後方を撹乱される恐れがある。かといって、アカネイアとの決戦を前にして戦力を分散させるのは得策ではない。

「グラを落とす」

マルスは決断するしかなかった。

「だが、できれば降伏させ、無血開城させるんだ。いらぬ戦いは我々にとっても消耗するだけだから」

「いずれにしろ、最低限のアリティアの守りは必要でしょう。カダインに伝令を出して、守備においてきたナバールたちをアリティアに進ませましょう」

ジェイガンが、進言した。

帝国からの攻撃の心配がなくなったカダインの守備兵をアリティアへ移動させ、最終防衛線をアリティアとグラの間に敷こうというのだ。グラの戦力をほぼ無力化してしまえば、少数の兵と民兵たちでアリティアを守ることは可能だろう。

「そうしてくれ。では、全軍でパレスへむかう」

マルスの命令で、アリティア騎士団と、それに同行する各国の部隊の混成軍が移動を開始した。

その知らせは、かろうじて逃げ帰った少数のグラ兵からグラ女王シーマへと伝えられた。
「騎士団が全滅……。それで、アリティアを始めとする連合軍は、大軍をもって我が国にむかっていると言うのだな。分かった。そちは下がって傷を癒せ」
玉座に座ったシーマは、血の滲んだ包帯姿も痛々しい兵士の報告を聞き終えると、早々に彼を下がらせた。
謁見の間から兵士が去り、広間には女王であるシーマと近衛隊長として彼女についているサムソンだけとなった。
「さて、どうする」
二人だけになった気安さで、サムソンが低い声で訊ねた。
「どうするもこうするも、この国に戦える兵なんて……！」
叫んでしまってから、シーマは広間のがらんとした空気に響き渡った自分の声の大きさに怯えて、慌てて言葉を詰まらせた。
人のいない広間は寒々として、どこか非人間的であった。
「確かに、ハーディンの命令でアリティアに進軍させたのはこの国の全軍だ。それとて、アカネイアの騎士団にくらべれば、わずかな兵だがな。彼らは、何と言って出撃していったか覚えているか」
サムソンに言われて、シーマはわずかに目を伏せた。
「憎いアリティアを倒すのだと。国の名と、私の名を口々に叫びながら、元気に出発して

いったわ」
「彼らは、勇気を持って出かけたと思うか」
サムソンの問いに、シーマは静かに首を横に振った。
「いいえ。無謀であったと思う。私は、なぜ彼らを止めなかったんだろう」
シーマは、祈るように両手を膝の上で組み合わせた。
「みんな、元はと言えばあの父がアリティア王を騙し討ちにしたことから始まっているということを忘れている。アリティアに憎まれることはあっても、アリティアを憎むことは間違いだというのに。こんなことなら、グラになど戻ってこなければよかった」
「でも、お前は戻ってきたのだろう」
「ええ。憎い父親とともに捨てた国だったのに……」
シーマは、思わず両手に力を込めた。
彼女の母親は、王宮に仕える侍女であった。正式にジオルの妻であったわけではない。母親はシーマを生んで、すぐに死んでしまったそうだ。その死因すら、定かではない。独り残されたシーマは、乳母によって城の片隅で育てられた。ジオルには、他に生きている子供がいなかったからだ。女たちの間で、どんな醜い戦いがあったのかは分からない。だが、王家の血を引く子供がシーマただ一人だということは事実であった。
ジオルは、シーマを守るために彼女を軟禁した。人の目を避けることによって、彼女の存在を隠したのである。そのため、グラ王家に王女がいることは噂されていたが、誰もそ

の姿をはっきりと見たことはなかった。ジオルがシーマを愛していたかどうかは分からない。なぜなら、彼自身、シーマに会いにきたことはないからだ。

物心がつくようになったシーマにとって、ジオルは父親という存在とはもっとも遠い男であった。やがて、彼女は隙を見て出奔した。グラ王家など、彼女を縛る鎖以外の何物でもなかったのである。すべてを捨てて、彼女は自由となる身を選んだ。

パレスに移り住み、やがて美しい娘に成長したシーマの運命を変えたのはハーディンであった。

暗黒戦争時のパレスでのドルーア帝国と解放軍の戦いの時に、ハーディンはシーマの持つペンダントの意味に気づいたのである。それは、グラ王家の紋章が刻印されたペンダントであった。ジオルがシーマの母に贈り、そのまま母の形見となった物だ。そして、そのペンダントを捨てられずに肌身離さず持ち続けていたということがシーマの未練であった。

それを見抜いたハーディンは、ある日突然シーマをパレス王宮へと呼び出したのである。その時になっても、彼女はまだ自分がずっと見張られていたということに気づかなかった。ハーディンに雇われた傭兵サムソンが、グラの隠れた姫君を守るようにと命令されていたのである。

王宮で、ハーディンはシーマにグラの女王にならないかと持ちかけた。当時、ハーディンは、グラはアリティアの圧制下にあって国民は酷（ひど）い暮らしをしていると彼女に告げた。

そして、グラをアリティアから解放するためには、シーマが王位を継いでグラを独立させるしかないと説いたのである。
シーマは悩んだ。そして、ハーディンの言葉を受け入れたのである。
グラは、彼女にとってやはり祖国であったのだ。
「でも、私は一国の王の器ではない……」
「だとしたら、どうすると言うのだ」
サムソンに言われて、シーマは言葉に詰まった。
「そうね。今さら逃げるわけにもいかないわよね」
そうつぶやくと、シーマは迷いを振り切るように顔を上げた。
「どのような結果になろうとも、私はこの国に留まるわ」
「国と運命をともにするか。それもまたいいだろうさ。俺もつき合おう」
微かに微笑みながら、サムソンが言った。
「そんな。あなたはただの傭兵だわ。グラには何の義理もないはずよ」
シーマは慌てた。迫りくるアリティア軍の攻撃に対決するのは自分だけで充分なはずであった。それが、王族であるということなのだ。それに、サムソンをつき合わせるいわれはない。
「そんなものはないが、俺はシーマに剣を捧げた身だ。お前のそばからは離れないとすでに決めている」

「ハーディンに命令されているから……？」

微動だにせずに言ってのけるサムソンに、シーマが訊ねた。

「奴など関係ない。俺は、ハーディンよりも先にお前と出逢ったはずではないか。俺はお前のそばにいる。そう決めたからそうするまでだ」

きっぱりとサムソンが言い切った。

「サムソン……」

思わず、シーマが立ち上がって彼の正面に立った。

「すでに市民たちからの義勇兵が、アカネイア兵と一緒に城の守りについている。精鋭で名の通っているアリティア騎士団に通用するかどうかは疑問だが、何とかアカネイアの援軍が到着するまでもたせよう。それがだめでも、お前は俺が最後まで……」

シーマは、サムソンの口を自分の柔らかな唇でふさぐと、それ以上彼にしゃべらせなかった。

5

「ドーガの重装騎士を先頭に、後方支援としてジョルジュ殿とゴードンの部隊を配す。カインの騎馬隊とミネルバ殿の部隊は待機。マリクとジェイガンは私と一緒にきてくれ。グラ兵たちを説得する」

陣容を決めると、マルスはグラ城目指して進軍していった。

対するグラ軍も、アカネイア軍とともに布陣を固めていた。城壁の上にアカネイア兵たちの弓兵が陣取り、城門の前に民兵からなるグラ軍がならんでいる。

「予想通り、グラには正規の騎士はほとんど残っていないようですな」

グラ軍のまちまちな装備を見て、ジェイガンが言った。その多くは老人や年端(としは)のいかない少年兵たちだ。そのほとんどは、国家存亡の危機と聞いて駆けつけたり、強制的に徴兵された者たちであろう。

「ああ。彼らは兵士じゃない。戦うなんて無理だ」

マルスは、予定通り、グラの兵士たちに投降を呼びかけた。

「我々は、あなたたちを害しにきたのではない。アカネイアの非道を正すために、パレスへとむかう途中なのだ。だが、あなたたちが戦うと言うのであれば、我々も剣を振るわなければならない。お願いだ、あなたたちの女王に会わせてほしい。我々は、停戦と和平を求めている」

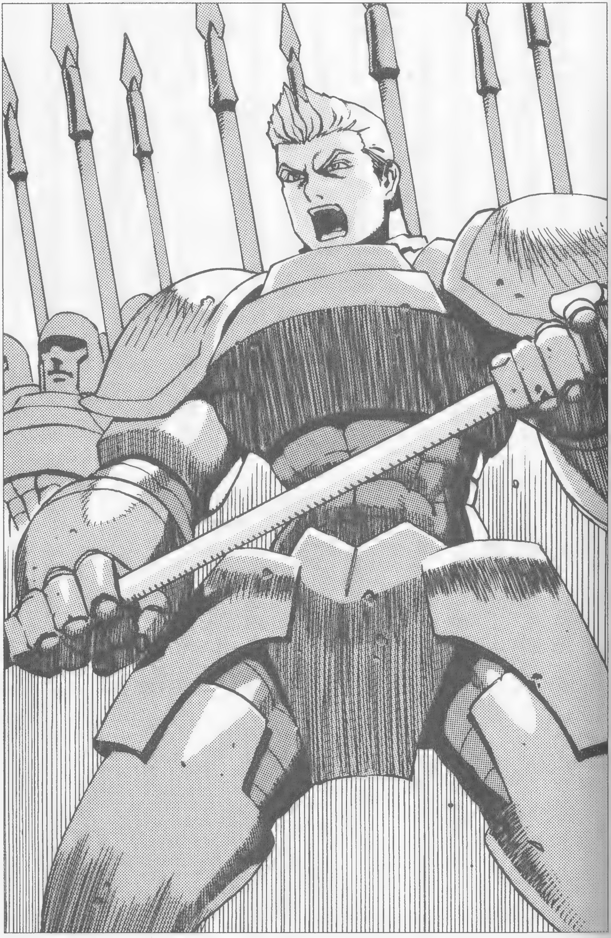
マルスの呼びかけに、グラ兵たちは明らかに動揺した。

「惑わされるな。奴らはお前たちを騙そうとしているのだ。降参してしまえば、皆殺しにされるぞ。戦え。一人でも多くの敵兵を殺すのだ！」

安全な城壁の上から、アカネイアの部隊長が叫んだ。

どうしていいか、グラ兵たちが右往左往する。

「マルス殿下、いたずらに時間を浪費するわけにもいきません。ここは、グラ兵を殺さずに蹴散らし、城内のアカネイア兵を倒してシーマ女王の所まで一気に辿り着くのが賢明かと。後は、シーマ女王の態度一つで、グラの運命が決まりましょう」
「仕方ないか。ドーガ、部隊を前進させろ」
マルスの命令で、ドーガの重装騎士団が隊列を崩さずに前進を始めた。
全身を鎧につつみ、大型の盾を前面に構えて進む彼らは、さながら大壁が音をたてて前進してくるかのようであった。
「嫌だ、戦ったって、勝てっこねえ」
ドーガたちの圧倒的な威圧感に、戦意を喪失したグラ兵たちが我先に城へと逃げ込もうとした。
「戦え。敵前逃亡する臆病者は、軍律によって死罪に処するぞ」
アカネイア兵たちが、あろうことか味方であるグラ兵たちにむかって矢を射かけた。
逃げかけていたグラ兵たちが、慌ててアリティア軍の方にむかってくる。すでに逃げ場所がないと悟った彼らは、死にものぐるいであった。
むかってくるグラ兵たちに、ドーガたちは槍衾(やりぶすま)をむけて対応した。密集隊形のドーガたちに近づけず、グラ兵たちが右往左往する。
「武器を捨てるんだ。そうすれば、我々の後ろにかくまってやる。アカネイアの矢も、我らの後ろにいれば恐れることはない」



ドーガの言葉に、先頭の兵士たちの幾人かが剣を投げ捨てた。
それに対して、ドーガが約束通り槍衾の一部を開いて受け入れてやる。それを見たグラ兵たちが、我も我もと後に続いた。
「おのれ、裏切り者の恥知らずめ」
アカネイア兵たちは、無差別に矢で攻撃を始めた。アリティア軍もグラ兵も区別はない。たちまち、グラ兵たちは悲鳴をあげて逃げ惑い始めた。
「何ということを。投降したグラ兵を守れ。一気に城内へ突入せよ！」
マルスが命令した。
ドーガたちが陣形を崩し、めいめいが盾を掲げて武器を捨てたグラ兵たちを守る。ジョルジュとゴードンが応戦を始めた。反撃を受けてアカネイア兵たちが隠れる。その間に、マルスたちは一気に城の大門にとりついた。マリクが魔法で門扉（もんぴ）を破壊し、アリティア軍は城内へとなだれ込んでいった。
もともとが留守居部隊に毛の生えたような守備部隊である。頼みのグラの兵士たちも役に立たないのでは、アカネイア兵たちにはどうすることもできなかった。城壁に駆け上がってきたマルスたちによってあっと言う間に制圧されていく。
城内を次々に制圧していくと、マルスは玉座の間を目指した。アカネイア兵の若干の抵抗はあったものの、グラ兵は完全に戦意を喪失して次々に投降していった。
さしたる戦闘もせずに、マルスはドーガたちとともにシーマの許へ辿り着いた。

「とうとうやってきたか」

サムソンが剣を抜いてシーマの前に進み出た。あくまでも、シーマを守り通そうという決意を見せつける。他にも、ここへ逃げ込んできた少数の少年兵たちがいた。

シーマも深紅の鎧に身をつつみ、姿格好だけは戦闘できるふうを装っていた。

「待ってくれ、私はグラを侵略しにきたのではない。グラと同盟を結びにきたのだ」

マルスは広間の入り口に兵士たちを留めると、シーマたちと安全な距離をおいて剣を収めた。

「甘言（かんげん）を弄（ろう）して、何を考えている」

あえてサムソンが訊ねた。

「本当だ。信じてほしい。もともとアリティアとグラは一つの国だったはずだ。不幸にして二つの国になってしまったが、だからといって、今の私たちが敵対し続けなければならないという理由にはならないはずだ」

「私の父を殺した、あなたがそう言われるのか」

シーマが、小さく言い返した。

「それは……。あなたたちが、私を恨む気持ちもわからないではない。だが、その恨みを持ち続けることが正しいとは言えない。ハーディンは、そのような何かを心の中に持ち続けていたために、闇の力に取り込まれてしまった。そのような思いは、どこかで断ち切らなければならないんだ」

あえて、ジオルの裏切りが父コーネリアスの死を招いたことには言及せずに、マルスはシーマを説得しようと努めた。
何かを考えるようなシーマに、少年兵の一人が耳打ちした。
「よろしいでしょう。マルス王子。私はあなたを信じて、このグラを預けることにいたしましょう。――あなた方は、逃げるグラの兵士たちには、一切危害を加えなかったそうですね。それどころか、卑劣なアカネイアの兵士たちから、国民を守ろうとしてくださった。アリティアのスター・ロード、いえ、アカネイア大陸のファイアーエムブレムの勇者マルス様。あなたは、すでに国という枠を超えた正義をお持ちなのですね。グラは、あなたにお従いいたします」
シーマは剣を床におくと、片膝をついてマルスに頭を垂れた。それは、服従の印ではなく、忠誠の印であった。それを見たサムソンや少年兵たちがそれに倣う。
マルスは剣をジェイガンに預けると、一人で彼らの許に歩みよっていった。そして、自らしゃがみ込んでシーマを支えるようにして立ち上がらせた。
「シーマ女王。どうか、私とは対等の立場で接してください。グラはもう、自由なのです」

「いってしまったな。まるで、春の嵐のようだった」
閑散とした城の風景を眺めながらサムソンが言った。
「ええ。本当に」
風に髪を遊ばせながら、シーマもバルコニーに立って答えた。
ハーディンに時間を与えては不利になると考えたマルスたちは、グラの管理をそれまで通りシーマに任せ、全軍を率いて出発していったのであった。
慌ただしいのには、他にも理由があった。
通常であればそのまま半島の西海岸沿いに南下してパレスへむかうのであるが、斥候に出た天馬騎士から大軍が待ち伏せしているという情報を得たからだ。
おそらくは、パレス東部のアカネイア神聖帝国サムスーフ領の兵士たちであろう。半島西部のメニディ領、南部のディール領の騎士団たちは、ミディアの反乱によって一時的に瓦解している。同じくオレルアンとの国境にあるレフカンディ領も領主であるレフカンディ侯が幽閉されているため、騎士団は動かしてはいない。パレス北部に位置するアドリア領の騎士団はラングとともに壊滅しているため、パレスの主力はハーディンの聖騎士団とサムスーフ騎士団、そして、金で集めた大量の傭兵やはぐれ騎士たちである。

未だに大陸最大規模の軍隊を擁してはいるが、帝国軍にかつての威光は残ってはいなかった。

マルスの目的はあくまでもハーディンであった。闇のオーブの呪縛から彼を解き放つことができれば、帝国軍は戦う意味を失うはずだ。正攻法で敵と全面対決をするよりも、奇襲によってハーディンの本隊のみを相手にする方が賢いといえる。

そのため、アリティア軍はメニディ領に入ってから逆に北上し、旧アドリア領であるアドリア渓谷を抜けてパレスの北東に抜けようというのである。距離的には遠回りになるが、戦闘による時間的遅れを考えればこちらの方が早くパレスに辿り着け、軍の被害も最小に抑えられるはずであった。

唯一の懸念といえばオレルアン騎士団による待ち伏せであるが、マルスはあえてその可能性は低いと考えた。ハーディンによるアリティア奇襲の報に、彼の兄であるオレルアン王はいったん騎士団を帰国させてしまっていたのだ。かつてアリティア騎士団の活躍によってドルーア帝国から解放されたことのあるオレルアン王は、マルスを強く信頼していたのである。そして、兄弟であるからこそ、ハーディンの変化を誰よりも分かっていた。

アリティア軍が去った後、グラの国民には二つの道が残されていた。このままグラに留まるか、一時的にアリティアに疎開するかである。

アリティアに降伏したグラを、アカネイアが見逃してくれるかどうかは不明だったのだ。アリティア軍の電撃戦が成功すれば、待ち伏せのために出撃していたサムスーフ騎士団は

急いでパレスに戻るだろう。だが、彼らがそれに気づかずにグラに攻め込んでくるということも充分に考えられたのである。それに対して兵力を割くことは、戦力の分散となり、軍を弱体化させる愚策であった。かといって、アリティアの守備隊をグラに進めるのも得策ではない。グラ城はアリティア城にくらべれば、お世辞にも戦闘にむいているとは言えないからである。

そのため、マルスはシーマたちに一時的なアリティアへの避難を勧めたのである。戦力を集中させることで、アカネイア軍に対する守りを強くできるとも考えたからだ。早馬で伝令はすでに発っており、アリティアでも準備が進められているはずであった。

シーマはそれを国民に知らせ、希望する者をすぐにアリティアへと出発させた。町の有力者たちを集めた最初の説得には出発前のマルスも加わっていたため、人々はその提案を信じてくれたのだ。

「マルス王子が説得してくれたから助かったわ。おかげで、多くの人々が安全なアリティアに避難してくれました」

閑散とした城下と、遠くの街並みを見やりながらシーマは言った。ほとんどの民がアリティアにむかい、今グラに残っているのはどうしてもこの地を去れないでいる者たちと、最後までシーマに従おうと誓った少年兵たちだけである。むろん、サムソンはいつも彼女の隣にいた。

「安全かどうかは分からんが……。まあ、ここよりはましだな。いっそ、シーマもアリテ

ィアへいけばと思うのだがな」

「私は、もうしばらくはグラの女王としてここに留まります。それが、私のけじめです。でも、この戦争が終わったら、私はグラをマルス王子にお返しするつもりです。やはり、私には一国を治めることなどできません。それに、グラとアリティアはもともと一つの国だったのですから……」

シーマは、しっかりとした意志を持ってサムソンに答えた。

「マルスは、それほどまでに信じるにたる男か」

「ええ。あなたの次に信用できます」

にっこりと微笑みながら答えるシーマに、サムソンが少し困ったように照れて顔を逸(そ)らした。振り仰いだ風景が赤く染まっていく。

もう落日だ。

赤い夕陽の名残(なごり)が、グラに一瞥をむけながら消えていこうとしている。

「あまりかいかぶるな。さあ、もう日が暮れる。中に入ろう。残ってくれた兵たちが心配してはいけないだろう」

「そうね、夜になりますもの。明日の朝陽を見るために、私たちも頑張らねば」

そう言うと、シーマはサムソンの腕にそっと両手を絡ませた。

伝承２　アカネイア聖王国

その男がラーマン神殿に現われたのは、酷い雨の晩であった。旅をしている途中で、盗賊に襲われて逃げてきたのだと言う。ラーマン神殿の神官たちは、最初彼を受け入れることに躊躇したが、神官長であるメディウスが断を下し、男は一夜の宿を許されることとなった。

妙に馴れ馴れしく、また愛嬌のある男は、一言礼を言って客人となった。

名を訊ねられた男は、一瞬考えた後アドラと名乗った。それが本当の名であるかどうかは怪しいものであったが、神官たちは深く追及することはなかった。

気さくなアドラは、宿と食事を与えてもらったお礼にと、自分が旅で見てきたことを神官たちに話し始めた。

彼が話す物語は誇張に満ちていたが、神殿から一歩も出ない生活を続けていた神官たちは、面白く彼の物語に聞き入った。

彼がやってきたのは、遙か遠くの大陸だという。

そこでは遙か昔に邪教が広まり、多くの者たちが虐げられていたというのだ。だが、やがて聖なる戦士たちが現われて、邪な者たちを倒したのだという。

だが、数百年の時を超えて邪神が蘇り、聖戦士たちの子孫と邪神との戦いが繰り広げられたのだ。その戦いに参加して、自分は大きな功績をあげたのだとアドラは自慢した。
その後、官職を辞したという彼は、知り合いであった騎士と王女の駆け落ちに巻き込まれて、このアカネイア大陸まで逃げのびてきたのだという。
件(くだん)の恋人たちと別れたアドラは、あてどなく旅を続けてきたのだった。
身振り手振りを交えて面白おかしく語るアドラに、神官たちは簡単に心を許していった。
もともとラーマン神殿の神官たちは、特別の信仰に囚われていたわけではない。封印の盾と三つの武器、そして、神殿内の部屋に収められた竜人たちの各種の竜石を管理することが彼らの仕事だったのである。だが、それは長命な竜人たちにとっては、単調な変化の少ない仕事であった。
それゆえに、アドラの訪問は何百年ぶりかの大きな出来事だったのである。そのため、食事の後に催された酒宴も、夜遅くまで続けられた。

メディウスもアドラを気に入り、彼は今しばらく神殿に滞在することを許されたのだった。
酒宴の席で、アドラは今度はアカネイア大陸のことについてメディウスたちと語り合った。彼のいた大陸ではいくつもの国があり、人々は秩序の下に暮らしているという。だが、竜族の狂気に席捲されたアカネイア大陸では、未だに国家と呼べるものは誕生していなかったのだ。そのため、アドラを追い立てたような盗賊も、数多く存在していた。
アドラとメディウスは、互いにそのことを嘆いた。アドラは、やっとやってきた新天地の大陸が平和の地ではなかったことに。メディウスは、ナーガとともに同族から守ってやった人間が未だに矮小な心の存在だということに。
アドラは、いつかこの大陸にも国を起こして、人々が安心して暮らせるようにすると語った。メディウスは、その夢を讃えて彼を励ました。人間たちが、彼のように平和を求めるのならば、未来は明るいと考えたからである。そうでなければ、メディウスたちの今までの戦いの意味がなくなるからだ。
だが、そんなメディウスの思いは、あっけなく壊されることとな

る。

翌日、酒で酔い潰れたメディウスは、同様に寝ているであろう神官たちを起こしにむかった。だが、そこで彼が見たものは、無惨に殺された彼らの姿だったのである。おそらく、昨夜の酒に薬でも混ぜてあったのであろう。朦朧とする頭をかかえながら、メディウスは神殿の中を調べて回った。

そこには、封印の盾と三種の武器の姿はなかった。そして、アドラの姿も。

アドラが、メディウスを薬で眠らせた後に、神官たちを殺して至宝を奪っていったのだ。

メディウスは、人間を呪って叫んだ。だが、その叫びは、すでに遠くに逃げおおせていたアドラの耳には届かなかった。

もともとアドラは、最初からラーマン神殿に祀られているという宝目当てだったのである。それが、メディウスに情が移ってしまったのだ。アドラとしては、一番仲がよくなったメディウスを殺さなかったのはせめてもの情けであった。

アドラは、封印の盾から五つの宝玉を取り外すと、商人たちに売りさばいて大量の武器や食糧を手に入れた。それを元手として、他

の部族との抗争に明け暮れていた一つの部族を傘下におさめ、流れ者たちを傭兵として雇ったりして、曲がりなりにも軍隊と呼べるものを作り上げたのである。そして、瞬く間に周辺の部族を制圧して領土を広げていった。

　やがて、大陸南東部の半島を手中に収めたアドラは、大陸の名にあやかって、アカネイア聖王国を建国したのである。

　国王となった彼は、すべてのきっかけとなった封印の盾を国家の紋章とした。五つの宝玉を取り外したとたん、中央で炎が燃えさかるように輝いていた封印の盾は色褪せてしまっていたため、アドラはそれを美しく修復させた。箔が被せられ、まるで違う盾であるかのように美しく飾られた盾を、人々は紋章の盾、中央に描かれた炎の意匠からファイアーエムブレムと呼んだ。そして、それを勇者の印とし、これを掲げるものは全権を持つとしたのである。

　この時、アドラはすでにメディウスのことなどすっかり忘れていた。

　そして、王としての繁栄を謳歌したままアドラは没し、人々はファイアーエムブレムに対するメディウスの嘆きと怨嗟を知らずに時を過ごした。

ファイアーエムブレムが、その存在自体で平和を維持している物だとは微塵も思わなかったのである。

オーブを失い、本来とは違う形で存在しなければならなかったファイアーエムブレムは、ゆっくりと周囲の運命を歪ませていった。盾が不完全であることによって、アカネイア王家も不完全なものに変化していったのである。

それが盾の呪いなのか、あるいはアカネイア王家が代々背負ってしまった業なのかは分からない。だが、それがアルテミスの運命を生み、アカネイアという国に何度も滅びをもたらしたのである。

第3章　暗黒皇帝

1

アドリア峠。

マルスたちは帝国の裏をかいたと思っていたが、ハーディンはそれほど甘くはなかった。完全とは言えないまでも、ちゃんと手を打っていたのである。アリティア軍を無傷でパレスに到着させる気など、ハーディンには微塵(みじん)もなかった。

狭い峠を一列となって進むマルスたちの前に現われたのは、アドリア砦に駐留する少数の部隊であった。それ自体はたいした障害ではない。予想の範囲内であったとも言える。そのため、マルスたちは躊躇(ちゅうちょ)することなくアドリア砦の攻略を開始した。

だがその時すでに、砦手前のオレルアンへむかう道と峠道が交差している場所に、危惧していたオレルアン騎士団がむかっていることには気づかなかったのである。しかも、それはかつてハーディン直属であった狼騎士団の精鋭たちであった。

「ウルフ！」

「ロシェじゃないか。お前も、援軍にきてくれたのか」

部隊を追いかけるようにして後方から息せき切ってやってきた盟友を見て、騎士団長であるウルフは喜んで彼を迎えた。

「そうじゃない。お前たちを止めにきたんだ。陛下の御命令もないのに、こんな所で何を

しているんだ」

ロシェは、ウルフとは対照的な厳しい面持ちで彼に言った。オレルアン王の近衛騎士団に在籍していたロシェは、王の命令を受けて、突然国境警備を放棄して姿を消したウルフたちの部隊を追いかけてきたのである。事態を重く見たオレルアン王は、近衛騎士団を率いて、先行したロシェに追いつくためにオレルアン城を発っている。

「何を言っているんだ。皇帝陛下の御命令なら、すでに受けている」

怪訝（けげん）そうに、ザガロが言った。そばにいたビラクも、その通りだとうなずく。

「違う。僕が言っているのはオレルアン国王陛下のことだ。ハーディン様のことではない」

「お前こそ何を言っている。俺たちは、ハーディン様に忠誠を誓っているのではなかったのか。あのお方以外に、俺たちに命令できるお方がおられるものか」

ロシェの言葉に、ザガロが怒ったように言った。

「だが、だからといって、国王陛下の御命令を無視したり、マルス王子と戦うなんておかしいとは思わないのか。だいたい、いつハーディン様からアリティア軍を迎え撃てという命令がでたんだ」

「ハーディン様は、国境で待機していた俺たちの騎士団に直接姿を現わされて御命令なさったのだ。どうしてそれを断れよう」

半ば夢見るような目でウルフが言った。その目の持つどこか虚ろな輝きに、ロシェは微かに身震いした。

伝令がきたのであれば、それは直接オレルアン国王に対してが正道のはずであった。末端の部隊に直接命令するというのは、いくらハーディンといえども越権行為である。まして、アリティア軍の侵攻に対してパレスにいるはずのハーディンが、どうやって遠く離れたオレルアンにやってこれたというのであろうか。魔道の手管でも使わない限り、それは無理な話であった。だが、逆にそのような力を使ったというのであれば、ウルフたちの度を超えた盲信も、どこかうなずけるというものだ。

「それに、マルス王子は、自らの野心のためにアカネイア大陸を我が物にしようとしているのだぞ。マケドニアを支配した王子は、グルニアを占領し、カダインも支配下に収め、グラをも滅ぼしたという。これを見逃していいのか」

ザガロが、少し興奮しながら言った。

「グラを滅ぼしたと言うのか」

それは、オレルアン王の許にいたロシェにとっては初耳の話であった。

「俺たち草原の民は、ハーディン様によって奴隷の身から解放されたんだ。だからこそ、俺たちはハーディン様のためなら、命を捧げてもいいと誓い合ったはず。今アリティア軍を叩かねば、ハーディン様のお命が危ないのだぞ。マルス王子の野望のために、そのようなことをさせるわけにはいかん」

「ビラクの言う通りだ。ここでならば、長く隊列の延びたアリティア軍を分断して撃破することができる。千載一遇の機会なのだ」

ウルフが、言葉を続けた。

「でも、国王陛下は、中立をお望みだ。今も、戦いをやめさせようとここへむかわれておられる。それを無視して騎士団を動かすようなことは……」

「そのようなこと……。お前は、マルスの味方なのか、それともハーディン様の味方なのか」

語気荒く、ウルフがロシェに詰めよった。

「よく考えてくれ、マルス王子がそのような野望をいだくようなお人か」

辛抱強く、ロシェはウルフたちを説得しようとした。

「では、ハーディン様が俺たちを騙していると言いたいのか。もういい、お前の言うことなど聞く耳は持たん。ザガロ、ビラク、全軍をアリティア軍にむけて進めろ」

「ウルフ！」

「これ以上邪魔だてするなら、たとえお前でも容赦はしない。俺たちは命を懸けてハーディン様の御命令を遂行するまでだ。いってオレルアン王に伝えろ」

すでにオレルアン騎士団の軍籍を離れているかのようなウルフの言葉に、ロシェはそれ以上の説得を諦めた。ウルフたちに率いられた騎士たちが、ぞろぞろとロシェのそばを通り過ぎていく。

「待て、みんなよく考えろ！」

ロシェはなおも叫んだ。だが、気にしたように振り返る兵士たちは何人もいたが、立ち

止まる者は一人としていなかった。
「やはり僕の言葉ではだめか。仕方ない、ここは何としても陛下に説得してもらうしかない」
ロシェは、急いでもときた道を引き返していった。
だが、彼が戻る前に戦端は開かれてしまった。
アドリア砦に残る少数のアカネイア軍を制圧して道を急ごうとしたアリティア軍の中央に、突然ウルフたちの部隊が奇襲をかけてきたのだった。
縦に長い陣形をとっていたアリティア軍は、マルスのいる旗本隊に側面から奇襲を受けてしまった。これは、戦術的には致命的である。前後の部隊を呼び集めようとすれば混乱を招き、統制のとれないまま各個撃破されかねない。
マルスは、個々の兵士たちの技量を信じて、戦闘によって敵の戦術を跳ね返すしか道はなかった。だが、それはマルスたちに全力の戦闘を強いることとなり、オレルアン騎士団に対して手加減ができないことをも意味していた。
「オレルアン王は、ハーディンに疑問を感じていったん兵を引いたのではなかったのか。そうであれば、こんな無駄な戦いはするべきではないのに」
マルスは悔しがったが、現状ではどうしようもなかった。
「マルス殿下、お下がりください。ここは我らが防ぎます」
トーガが、マルスの盾となって叫んだ。

「マルス王子、覚悟！」
そこへ、ビラクの小隊が突っ込んでくる。
「ビラクじゃないか。無駄な戦いはやめて兵を引いてくれ」
彼の姿を認めたマルスは、大声で叫んだ。
「問答無用」
マルスの言葉を無視して、馬上のビラクが槍を構えて突進してくる。
「いかせるか！」
ビラクたちの前に壁として立ちふさがったドーガたち親衛隊が、槍衾(やりぶすま)を作って馬を攻撃した。乗馬を槍に貫かれたビラクが落馬する。だが、すぐに剣を抜くと、彼はマルスにむかってきた。
「この大陸を、マルスの好きにはさせ……」
「許せ！」
ドーガが槍を突き出した。穂先が、ビラクの腹を捉える。なおもむかってくるビラクの身体を、他の騎士の槍が貫いた。

「前衛が崩されたか。さすがはマルスというところか。兵を引かせろ。弓馬騎士で敵歩兵を崩す。その後、最後の突撃を行なう」

ウルフが、周囲の騎士たちに命令を下した。そこへ、彼らの背後から新たな部隊がやってくる。

「双方とも戦いをやめよ。この戦い、オレルアン王が預かる。双方ともに、今すぐ戦いをやめよ！」

近衛騎士団を率いたロシェは、先頭に立って大声で叫んだ。

「構わぬ。アリティア軍に攻撃を続けろ」

ウルフが部下たちに命令した。弓馬騎士がアリティア軍にむかって一斉に矢を射始める。

「やめるんだ、ウルフ。やめないと……！」

ロシェたちが速度を上げた。騎馬の一隊が、見る見るうちに近づいてくる。

「ええい、邪魔だてする者はすべてハーディン様の敵だ。近衛騎士団を近づけさせるな」

ウルフの命令で、ザガロの一隊がむきを変えて同胞であった騎士たちに矢を射かける。

その攻撃を受けて、数人の騎士が倒れた。

それを見た近衛騎士団の本隊で角笛が吹き鳴らされる。オレルアン王が、決断したのだ。

2

ウルフたち狼騎士団を脱走兵と断定し、攻撃命令を下したのである。
「我らオレルアン騎士団は、アリティア騎士団に加勢する。アリティア！」
近衛隊長が、大声で叫んだ。
「アリティア！」
オレルアン騎士団の騎士たちが、それに応える。その唱和が、マルスたちに援軍がやってきたことを知らしめた。
「大馬鹿者！」
ロシェは悲しく叫ぶと、先陣を切った騎士たちとともにザガロの部隊にむかっていった。
ザガロたちも、一歩も引かないで攻撃を続ける。
ザガロの放った矢が、ロシェの頬をかすめ、すぐ後ろを進む騎士の命を奪った。怯むことなく、ロシェを始めとする騎士たちがザガロたちの懐に飛び込む。こうなってしまえば、弓矢は役には立たない。
「ロシェ、やはり我らを裏切ったな！」
ザガロが、弓を投げ捨てて剣に手を伸ばす。だが、剣を抜く前に、ザガロたちの部隊は、ロシェたちの槍の前に倒れていった。
アリティア軍を分断してマルスの旗本隊を潰すつもりが、オレルアン近衛騎士団の登場によって、ウルフの狼騎士団は挟撃される形になってしまった。そのため、有利であったはずの地形が逆に仇となって、ウルフたちの命運は尽きた。

「ウルフ、オレルアン陛下がおいでだ。降伏してくれ」
ロシェは、ウルフに懇願した。
苦虫を噛み潰したような顔のまま、ウルフは答えなかった。
「皆の者、静まれ。このような無益な戦いは即刻やめるのだ。今ならば、そなたらの罪も不問に付そう」
ロシェたちに守られたオルレアン王が、生き残ったウルフたちにむかって言った。彼らを挟んで、そのむこうにはマルスも姿を現わしている。
「何をおっしゃられる。陛下は、マルス王子の野望をお見逃しになるおつもりか」
ウルフが叫んだ。
「ハーディンの言葉を信じるでない。あ奴は、悪い夢に取り憑かれておるのだ。大陸の覇権を握ろうとしているのは、ハーディンに他ならぬのだぞ。その証拠に、ここにニーナ王妃から託された手紙がある。アリティア占領後に軍を引いた時、運良くニーナ様の命を受けた侍女と出会うことができて手に入れた物だ。ここには、ニーナ様自らのお考えで、マルス王子にファイアーエムブレムを渡すと記されておる。マルス王子の意思こそが、アカネイア王家を代弁するものであり、大陸制覇の悪夢に取り憑かれたハーディンの目を覚まさせてほしいと……」
「そんなことは、でたらめだ！」
オレルアン王がなおも続けようとするのを、ウルフは突然剣を抜いてやめさせようとし

た。
「ウルフ、やめろ！」
王のそばにいたロシェが、ウルフの前に飛び出した。
二人の剣が交差して、鮮血が飛び散る。
「ロシェよ、後悔することになるぞ。マルスの行く末を……その目で……」
唇から血を滲ませながら、ウルフが倒れた。
だが、ロシェもウルフの剣を脇腹に受けてがっくりと膝をつく。
「しっかりするのだ」
オレルアン王が、自分を守ってくれたロシェに近づき、懐から取り出した命のオーブをその身体にあてがう。オーブが輝き、ロシェの傷が見る見るうちにふさがっていった。
「みんな、ファイアーエムブレムに従う心を忘れていないのであれば、おとなしく武器を捨ててくれ。私たちは、これ以上かつての戦友たちと戦いたくはない」
ファイアーエムブレムを掲げてマルスは狼騎士団の騎士たちに言った。それに従って、多くの騎士たちが武器を下げる。アリティア騎士団とオレルアン騎士団の者たちが、素早く彼らの武器を取り上げて武装解除していった。
危機が去ったのを確認して、マルスはオレルアン王の許に駆けよった。
「ありがとうございました。おかげで、救われました」
「なに、元はと言えばわしの監督がゆきとどかなかったことによる此度の戦。頭を下げな

ければならぬのは、わしの方だ」

元気になったロシェを立たせると、命のオーブを持ったオレルアン王が言った。

「それは、命のオーブでしょうか」

それを見たマルスは、ガトーの語った五つのオーブのことをオレルアン王に説明した。

「そうか。では、その闇のオーブという物が、ハーディンを変えてしまったのだな。だが、すべてがそのせいではあるまい。ハーディンにも、もともとそういう面が隠れていたのだろう。それが、闇のオーブのせいで表面に出てきただけなのかもしれぬ。マルス殿、よければこの命のオーブをお持ちいただきたい。これは、持ち主の生命力を高める我が王家の秘宝。だが、実際には、昔、先代が旅の商人から買い取った物とされておる。王子であれば、このオーブを必ずや役立ててくれるであろう。わしが持っていても、病弱なわしの体力を維持させることにしか役立たぬでな」

「それでは、王のお身体が……」

オレルアン王が生来の病弱であることを知っているマルスは、王の身体を気遣った。

「気にすることはない。わしの身体はもともとのもの。わしがこんな身体ゆえ、ついに子供は授からなかった。ハーディンがアカネイアの王となった時に、いずれはオレルアンも弟かその子供に譲るつもりであったのだが、今となってはそれも叶うまい」

「そんなことはありません。私は、きっとハーディンを正気に戻らせるつもりです」

ハーディンを諦めたかのようなオレルアン王の言葉に、マルスはきっぱりと答えた。そ

れを聞いて、オレルアン王が嬉しくも悲しげな微笑みを浮かべる。
「ありがたいお言葉だが、先ほどのウルフたちを見ても分かるように、一度妄執に取り憑かれた者は、簡単には己を取り戻せないものだ。しかも、戦場でそのために躊躇すれば、命を落とすことにもなりかねん」
オレルアン王は、ロシェの方をちらりと見ながらマルスに言った。傷は癒えたものの、ロシェの鎧は自分自身の血と、返り血によって赤く染まっている。
「ハーディンとて、道を誤ったとはいえそれは自らが招いたこと。こと、戦いとなれば迷わずにマルス王子の命を絶とうとしてくるであろう。あ奴が騎士であるならば、戦いによけいな情けはさまぬもの。そうであるからには、マルス王子も迷われずにハーディンと剣を交えてくれ。それで死することとなろうとも、騎士たる者、本望であろう」
「それでは、ハーディンがあまりにも……」
かわいそうだと言いかけるマルスの言葉を、オレルアン王が遮った。
「どうか、あ奴に誇りだけは失わせないでやってくれ。お願いする。その後のアカネイアとオレルアンは、ニーナ様に願い出てマルス王子にお任せするつもりだ」
「それは、また別の話です」
突然の話に、マルスはやんわりと辞退した。彼としては、ハーディンを救い、ニーナを救いたいだけなのであって、戦後の国の領地の問題などは意識の外であったのだ。むろん、まったく考えていなかったというわけではない。国力の低下したグラを立て直すため、一

時的にアリティアへ編入する程度のことは考えていた。だが、それも一時的なものであり、時期を見て再独立させるつもりであった。当然、アカネイアを始めとするアカネイア各王国は、それぞれの指導者の下での再建を援助するつもりであった。ハーディンのように、大陸すべての国を支配下におこうという野望は少しも持っていなかったのである。

「そうだな。では、急がれよ。アリティア軍の進路が帝国に知られた今、パレスにすべての兵力が集められるであろう。時間を無駄にしてはいかん。わしは命のオーブなくしては足手まといになるゆえ、代わりにロシェを始めとする兵士たちをつけよう。彼らなら、王子の命令に従ってハーディンとも戦ってくれるであろう。よいな」

オレルアン王が、マルスに言った後、ロシェたちの方を振り返って確認した。

「承知いたしました」

ロシェを始めとする近衛兵たちがうなずく。

マルスは、彼らを配下に加えると、オレルアン王に別れを告げた。命のオーブをマルスに渡したオレルアン王は、近衛騎士団の半数をつれて、国への帰途についた。

マルスは、すでに三つのオーブを塡め込んだファイアーエムブレムの表面の窪みの一つに、命のオーブを塡め込んだ。

カインが攻め落としたアドリア砦で軍の再編成をすますと、マルスはいよいよパレスにむかって最後の進軍を開始した。

3

黄金の都と称えられたアカネイア神聖帝国の首都パレス。その都もかつての美しい姿を失っていた。

ハーディンの辣腕によって暗黒戦争で受けた痛手も短期間で回復し、かつてのアカネイア大陸最大の都市としての威容を取り戻したはずであった。

だが、ハーディンが闇のオーブに染まっていくと同時に、彼の周りには心の中に闇を潜ませる邪な人間たちが集まり始めたのだ。おそらく、ハーディンの放つ闇の波動に、自然と引きよせられてきたのであろう。

ハーディンは、それらの者たちを退けることなく政治に登用していった。グルニアの司令官に任じたラング然り、パレスの治安を任せたネーリング然りである。

そのため、国政は私利私欲に走る者たちによって牛耳られ、自然とパレスの生活はすさんでいった。ハーディンは、それら国民のことは少しも省みず、軍事の増強にのみ心血を注いでいったのである。そのため、アカネイア神聖帝国は軍事大国となりえたが、国民の生活はますます苦しいものになり果てた。

ハーディンは、アカネイア大陸すべての覇権を握るという野心に取り憑かれていたのだ。それは、闇のオーブが彼の心の奥底に潜むものを増大させたからに他ならない。だが、そ

のきっかけは謎のままであった。
ハーディンの国政は、当然のごとく市民の反感を買った。心ある家臣たちが、国民を代弁して何度も具申をしたが、そのたびに彼らは幽閉されてしまい、替わりにラングのような男が重要な地位についていったのである。
そして、ついにミディアを中心とする騎士団が反旗を翻したが、闇のオーブを持つハーディンにはかなうはずもなかった。そのため、人々を守るべき騎士団さえも、傭兵やごろつきどもに取って代わられてしまったのである。乱発された騎士の位によって、名前だけは騎士ということになっているが、その実体は騎士としての徳のかけらもない者たちの集まりであった。
ノルダの街に陣を張ったマルスたちは、町の人々に再び解放軍として暖かく迎えられた。だが、パレスの惨状を聞くにつれて、マルスの顔は曇るばかりであった。
帝国軍とアリティア軍は、ともに陣を動かず、決戦は翌日という暗黙の了解が両軍の間に交わされていた。もとより、帝国軍は守りに徹してアリティア軍を消耗させた後に、サムスーフ騎士団の帰還を待って前後から総攻撃をかけようという心づもりであった。先の暗黒戦争の時に、ドルーア帝国軍が戦力を過信して討って出たために、解放軍に各個撃破された轍を踏まないようにしていたのである。アリティア軍としても、強行軍で進撃していた兵たちを休めると同時に、パレスの状況を知る時間が必要であったのだ。
あとは、サムスーフ騎士団の帰還までに、パレスを落とせるかどうかであった。各国の

兵力を集めたといっても、数の上ではアリティア軍の兵力は帝国軍の半数以下であった。だが、アリティア軍が数々の戦いを切り抜けてきた精鋭であるのに対して、帝国軍はよせ集めの軍隊であり、とても統制がとれているとは言えなかった。そこに勝機があると、ジェイガンがマルスに説明した。

軍議の席で、グルニアの騎士団を預かるシリウスがマルスに進言した。

「明日の戦い、私の預かる部隊が先鋒を務めよう」

「いや、あなたにはニーナ王妃の救出を頼みたい。ガトー様からも、各国に残した者たちからもニーナ様たちの居場所を見つけたという知らせがこない以上、私の姉上やマリア姫、レナ嬢を含む四人の司祭は、ガーネフによってパレス王宮に未だ囚われているとみるのが妥当だろう。だとすれば、彼女たちを救い出すことは、ハーディンと戦うよりも大切なこととなるはずだ。だからこそ、シリウス殿には、その大役を頼みたい」

マルスは、シリウスに自分の作戦を明かした。敵はハーディンだけではないのだ。

「あなたは、遠い大陸から、アカネイア大陸のゆく末を見届けるためにやってきたと言われた。ならばこそ、ニーナ様を見届けてほしい」

「傍観者である私に何を見届けよと言われるのかは分からぬが、マルス王子が言われるのであれば、ニーナ王妃は必ず私が救い出そう」

シリウスが、マルスの言葉に従った。ここまでも堅実な戦いでアリティア軍の一角を支えてきたシリウスであるが、本人が傍観者と名乗るように、先陣を切って戦いを繰り広げ

るようなことはなかった。表舞台に立つということを極端に嫌っていたのである。

「この戦いが終わったら、あなたはどうなさるおつもりですか」

マルスは、シリウスに訊ねた。

「私は、傍観者だと言ったはずだ。すべてを見届けたら、バレンシア大陸へと戻るつもりだ。あそこには、私を待っていてくれる人がいる。私は、すでにアカネイア大陸の者ではないのだ。それを分かってほしい。そうでなければ、こうしてマルス王子の手助けをしてはいなかっただろう」

「分かりました。では、なおさら、あなたにニーナ王妃のことを頼みたい。無理なお願いかもしれないが、あなたにとってもけじめをつけるために、それが必要だと思います」

マルスは、シリウスに言った。オグマから、彼の正体がカミュではないかとの話は聞いている。彼の戦い方を見て、マルスもそうだと確信していた。もし、カミュが生きていたと知ったら、ニーナはどれほど喜ぶことだろう。だが、それは、ハーディンを巻き込んだ愛憎を生み出すかもしれない。けれども、時はすでに三人の道を別のものに変えている。ニーナがハーディンと結婚したのと同様に、カミュも異国の地で伴侶（はんりょ）を迎えていたのだとしたら、ニーナの心境も変化するに違いなかった。

それによってハーディンが救われるとか、事態が好転するなどという甘い考えは、さすがのマルスももってはいない。だが、何も知らないまま悲しんでいるよりは、現在（いま）を知ることによって、救われる魂もあるかもしれない。マルスは、そう考えていたのだ。

それは、マルスが純粋であるがゆえ、そして、シーダとの恋愛に何も障害がなかったからゆえのことであった。もっとも、それはマルスが気づいていないだけのことであって、マリーシアの子供っぽい憧れや、カチュアの淡い思慕、チキの求める愛情に、異性としての意識を持たないからだとも言えた。純粋さは、時に残酷であることを、マルスはまだ知らない。だが、それゆえに、彼はハーディンのように闇に囚われることはないのだろう。はっきりと自分の気持ちを伝える勇気をもまた、マルスは持ち合わせているのだから。

シリウスも、今では同じ強さを身につけているはずであった。

作戦はそんな個人の想いとは別に立案されていった。

先鋒はカインの率いるアリティア騎士団が務め、ミネルバとペガサス三姉妹が補佐する形で盆地入り口の砦を攻略する。そこで歩兵との合流を果たした後、全軍で一気にパレス市街を攻略する予定であった。もしも手こずる場合は、バヌトゥとチキに竜となってもらい、敵を追い払う算段だ。傭兵主体の帝国軍には愛国心というものがないため、士気をくじいてやれば簡単に瓦解するであろうと目論(もくろ)んでのことである。

市街を制圧した後は、パレス王宮に突入し、シリウスとアストリアの部隊がマリクの魔道士たちの部隊とともに、王宮内に囚われている人々を助け出すことになっている。だが、もしもガーネフと遭遇した場合、彼がマフーの魔道書を持っていると少しやっかいであった。スターライト・エクスプロージョンの魔道書は、光剣ファルシオンとともにアリティア城から盗み出されていたからだ。だが、それまでにマルスがハーディンから闇のオーブ

を取り戻していれば勝機はあるはずであった。すべてのオーブの力を備えたファイアーエムブレムであれば、闇のオーブの力だけでできているマフーの魔法も跳ね返せるという希望があったからだ。

すべては、マルスがいかに早くハーディンを闇のオーブから解放できるかにかかっている。

それによってファイアーエムブレムを元の姿に戻して、すべての戦いを終わらせるのだ。

「ハーディンはグラディウスを持っている。あれと戦うのであれば、それなりの剣が必要だろう」

そう言うと、アストリアが自分の持っていたメリクルソードをマルスに手渡した。

「ありがとう。遠慮なくお借りする」

ファルシオンのないマルスは、アストリアの好意に甘えることにした。アカネイアの三種の神器の一つであるグラディウスを持つハーディンと戦うことがあれば、テーベで手に入れたドラゴンキラーやマスターソードでも心許（こころもと）ないと感じていたところであったのだ。

「では、全員、今のうちによく身体を休めてくれ。砦攻めは、夜明けとともに開始する。それに間に合うように進軍を開始するので、準備してほしい」

マルスの言葉に、居合わせた者たちは力強くうなずいた。

「いよいよ、決戦なのですね」

「ああ、これで戦いを終わらせるつもりだ」

解散して人が出ていった部屋で、マルスは残ったシーダを安心させるように答えた。
「私も、ミネルバ王女とともに、力一杯戦うつもりです」
「くれぐれも、無理はしないでおくれ。この戦いが終わったら、私たちの結婚式が待っているのだから」
マルスの言葉に、シーダが軽く頰を染めた。

4

翌日、夜が明けきらないうちに進軍を開始したアリティア軍は、夜明けとともにパレスのある盆地の入り口に建てられた砦への攻撃を開始した。
アリティア軍の猛攻によって、砦は、あっけなく落ちた。夜陰に紛れて歩兵部隊が予想以上に早く砦に到達したのと、それによってバヌトゥが火竜となって砦の大門を焼き壊したせいである。
バヌトゥの姿を見て混乱をきたした帝国軍に対して、カインたち騎馬隊が遺憾なくその機動力を発揮して攻撃を仕掛けた。逃げ惑う敵兵の混乱によって、せっかく各所に備えられた砲台も威力を発揮する前に騎士団によって壊されたのだった。そうなれば、ミネルバたちの天下である。地上と空からの二面攻撃に、帝国軍は次々に部隊を潰されていった。
パレス周辺の砦からアリティア軍を包囲しようと伏兵がやってきたが、逆に歩兵部隊によ

って挟み撃ちにされて各個撃破されていった。
「これが、アカネイア騎士団の名を騙る者たちか。冗談ではない」
パレス市街に待ちかまえていた敵を見て、ジョルジュが怒りをあらわにした。ろくな装備も持たない一部の帝国兵たちは、野盗と変わりがなかったからだ。
そのため、アカネイア騎士団の誇りを傷つけられたと思ったジョルジュやアストリアたちは、敵に対して容赦がなかった。帝国の騎士団を率いて王宮前を守っていたネーリング将軍は、もろにその怒りにさらされ、パルティアの前にその命を落とした。
アリティア軍の猛攻に、倍近い戦力を有していた帝国軍は、あっけなく崩壊していった。だが、それでもハーディンは討って出ることなく、パレス王宮内にどっしりと構えていた。
「王宮内には、まだかなりの兵士たちがいるはずだ。気を抜くな」
マルスは兵士たちの注意を促すと、王宮内に突入していった。
「第二部隊の者たちは、私に続け」
シリウスが、マルスとは別の部隊を率いて王宮に突入していく。
市街には、ロシェの部隊とミネルバの部隊が残って、王宮に近づく敵を掃討していった。
「戦いは順調のようだが、何か臭うな。いこうぜ、バヌトゥ、チキ。なんか、いやがるぞ」
竜人の姿に戻ったバヌトゥとチキに、チェイニーが言った。王宮の中に、何かの気配を感じたようだ。
チェイニーが同族を連れて王宮の中へむかった頃、彼の予想通り、マルスたちは窮地に

陥っていた。
「馬鹿な、メディウスがなぜここにいるんだ」
王宮の中で地竜に遭遇したマルスは、絶望的な声をあげた。
ガトーが、地竜族の封印が弱まっているとは言ったが、すでにメディウスが復活しているとは予想もしなかったからだ。しかも、今のマルスたちには、メディウスを傷つける力を持つ唯一の武器であるファルシオンはなかった。
マルスは、ハーディンに囚われすぎていた自分を呪った。ガーネフが復活している以上、メディウスの復活も疑ってしかるべきであったのだ。今となってみれば、ハーディンの必要以上の自信もうなずくことができる。
「まともに戦おうとするな。散らばって、全員で攻撃するんだ」
すぐに気を取り直したマルスは、兵たちを散開させた。広間の中央で咆哮する地竜を、全員で取り巻くようにする。だが、注意力を分散させたからといって、敵の力が弱くなるわけではなかった。一人一人に狙いをつけた地竜は、容赦なく人間たちを闇のブレスで殺していった。
「マルス下がれ、そいつはメディウスじゃない！」
駆けつけたチェイニーが叫んだ。一緒にやってきたバヌトゥが火竜に変身して地竜に立ちむかっていく。
「別の地竜なのか」

チェイニーの許に駆けよったマルスは、そう神竜族の青年に問いた。
「そうだ。いくらなんでも、メディウスが復活するには時間が早すぎる。ガトーが言っていただろう、地竜族は大地から生命力を吸い上げて復活すると。だが、それにはちょっぴり時間がかかるんだ。竜族にとっちゃ、たいした時間じゃないが、人間にとっては世代が替わるほどのな。メディウスはナーガの牙によって生命力を大地に還されたから、一〇〇年は復活できないだろう。だから、あれは別の地竜だ。とはいえ、封印されたはずの地竜が目覚め始めているということはまずいな。早く封印の盾を元通りにしないと、すべての地竜族が蘇ることになるぞ。そうなったら、人間たちは終わりだ。チキが成竜になるまでに、みんな殺されてしまうだろうさ」
バヌトゥと地竜の戦いに巻き込まれないように安全なところまで下がりながら、チェイニーがマルスに説明した。
バヌトゥと地竜の戦いは続いたが、マルスたちができる限り戦いを助けたにもかかわらず、だんだんと分が悪くなっていた。格闘によって壁や天井が崩れ始め、建物自体が壊されかねない有様となる。
「あたしもいく」
チキが、マルスが止める間もなく神竜石を取り出して竜の姿になった。
二対一となり、さすがに地竜が押され始める。
「こうなると、俺も神竜石があればと思うぜ。俺の神竜石は、暗黒竜の魂を受け継いだ司

なもんだが……」

祭を倒すために、魔道書に変えて人間にやっちまったからなあ。まあ、捨てちまったよう

少し悔しそうに、チェイニーが言った。

バヌトゥが前足に噛みついたところを、地竜は力ではねのけた。その瞬間、無防備とな

った地竜に、チキが霧のブレスを吐きかける。光の粒子が霧状となって敵をつつむ神竜の

ブレスは、竜の力をその身体から放出させた。力を失って地竜が倒れる。そこへ、バヌト

ゥが炎を吐いて止めを刺した。高熱の炎につつまれた地竜の頭部が消し炭となり、ぼろぼ

ろと崩れ落ちた。

元の姿に戻ったチキとバヌトゥが、崩れた柱の残骸の上に座り込んでさすがに荒く息を

弾ませる。

「マルスお兄ちゃん、もう大丈夫だよ。先に進めるよ。チキ、頑張ったでしょ」

チキが、少し引きつったような笑いを浮かべて、マルスに言った。

「ああ、ありがとう。二人のおかげで、助かった」

マルスは、チキのそばに駆けよるとそっとその頭をなでた。嬉しそうに、チキが微笑む。

「二人は俺が見ているから、マルスは先を急げよ。闇のオーブを早く何とかしてくれよな」

チェイニーの言葉にうなずくと、マルスはドーガやカインたちを連れて、ハーディンの

許へと急いだ。

5

立ちはだかる帝国兵士たちを退けながら、マルスはハーディンのいる玉座の間に突入していった。
「ハーディン！」
マルスが、かつて友であり、今は敵となってしまった男の名を呼んだ。しんと静まりかえった玉座の間に、マルスの声が響き渡る。ハーディンの親衛隊がすぐに攻撃してこないのを見て、カインたちもマルスに従うようにして様子を見守った。
「マルスか。我が臣下の存在でありながら、帝都を踏みにじるとは見下げた奴よ。勇者アンリの血を引くという光の王子も、地に落ちたものだな」
王座に座ったまま、多くの兵士たちを周囲におきながらハーディンが答えた。彼らの姿は、アドリア峠で戦ったウルフたちのように、どこか鬼気迫るものがあった。そこだけ、心の闇のようなどんよりとした空気が澱んでいるかのようである。
「何を言っているんだ。あなたは、あなたの持っている闇のオーブに利用されているだけなんだ。頼む、目を覚ましてくれ」
「利用されているだと、この俺がか。はははは……。あいかわらず愚かだな、マルスよ」
マルスの言葉を聞いたハーディンは、突然哄笑をあげた。

「俺は、俺自身の考えで戦いを起こしたのだ。誰の考えでもない、俺自身の気持ちのままに戦ったにすぎん。だが、そう……、最初はグルニアという国をこの世からなくせればよかった。あんな国があったからこそ、あんな男がいたからこそ、アカネイアは他国に蹂躙(じゅうりん)され、ニーナの心も他人に土足で踏み込まれたのだ。そうでなければ、あの女の心が……。そう、あの女の心は、いつでも他の場所にあった。まるでアルテミスのように、自らの心を偽って生きてきたのだ。そうでなければ、なぜニーナはお前にファイアーエムブレムを託したのだ。先の戦いの時も、今度の戦いの時も、あの女は俺よりもお前を選んだ。それは、アンリの子孫だからということか。愚かな。ニーナは何も分かってはいないのだ。何も見えてはいない。そう、お前もカミュと同じ、ニーナを惑わせるだけの悪しき存在に他ならない。ラングから、お前がグルニアの味方をしたと聞いた時に確信したのだ、お前もまたカミュなのだと」

「何を言っているんだ、ハーディン。私は……」

ハーディンの言葉のすべての意味を理解できず、マルスは戸惑いながらその言葉を否定しようとした。

「うるさい。貴様など、俺の力がなければ、オレルアンを出た後にドルーア帝国に殺されていたはずの存在だ。俺がいなければ、今現在のすべては成り立たなかったのだ。なのに、今俺に盾突く者は間違っている。そんなものは存在してはならんのだ。そう、そのような者はすべて滅ぶべきだ。マルス、貴様も滅べ！」

ハーディンが、玉座から立ち上がると、手に持った闇のオーブを高く掲げた。

高圧的な波動が、マルスたちの身体と心を強く打ち据えてその動きを封じた。対照的に、ハーディンに群がる兵士たちが、その敵意を剥き出しにして力を増す。

「ハーディン、だめだ、目を覚ましてくれ。お前は、そんな弱い男ではなかっただろう」

マルスは叫ぶと、ファイアーエムブレムを掲げた。そこに埋め込まれた光のオーブが強い輝きを放つ。他の三つのオーブも同時に光を放ち、それらの光は闇のオーブの呪縛をマルスたちの上からはねのけた。そして、輝きはそれに留まらず、闇のオーブを持つハーディンやその部下たちをもつつみ込んだ。

「これは……」

たちまちわき起こる光と闇の力の鬩(せめ)ぎ合いの中心におかれて、ハーディンが身悶えした。周囲の兵士たちにも、明らかに動揺が広がる。

「これは、俺は……。俺は何をしていたんだ……」

大きく目を見開いて周囲を見回しながらハーディンがつぶやいた。

「正気に戻ったのか、ハーディン」

希望に目を輝かせて、マルスがハーディンに呼びかけた。

「そうか、俺は……。俺はこのような……」

再び、ハーディンが大声で笑い出した。その笑声は、どこか自嘲的な響きを持っていた。

「マルス王子よ、決着をつけようではないか。今がその時なのだ。この小さな大陸に英雄

は二人は必要ない。俺かお前か、どちらが未来を導くにふさわしいか、ここで決めようではないか！」

そう言うと、ハーディンは玉座に立てかけてあった聖槍グラディウスを手に取った。

「そんな、だめなのか……」

マルスの願いも空しく、戦いは再開された。

「ハーディンの相手は、私にしかできない。カインたちは、他の兵士たちを頼む」

「分かりました。みんな、敵をマルス殿下に近づけさせるな」

マルスの命令を受けて、カインやドーガたちが帝国兵たちを抑えにかかった。

邪魔がなくなり、マルスはハーディンと一騎打ちとなった。

「ハーディン、ニーナ様は……」

「言うな、マルス！」

ハーディンの気合いのこもった一撃が繰り出される。ファイアーエムブレムで受け止めたマルスは、衝撃で後ろへと飛ばされた。だが、すんでの所で踏みとどまり、転倒だけはまぬがれる。

「どうした。本気でかかってこないとでも言うのか。それは、騎士である俺に対して失礼ではないのか。俺は、戦いに手を抜いたりはせぬぞ」

ハーディンが、怒りをあらわにしてマルスを挑発した。

「ハーディン……」

マルスは、メリクルソードを構え直した。息を整えると、一気に間合いを詰めた。

闇のオーブの波動が、マルスをつつみ込もうとする。だが、光のオーブの輝きが、それをはねのけた。マルスの突進は止まらない。

繰り出されるグラディウスの穂先をファイアーエムブレムで横に逸らすと、マルスはメリクルソードを横に薙（な）いだ。ハーディンの首が飛ぶかと思われた瞬間、ハーディンがグラディウスを横に振って、その柄でマルスの身体を押し飛ばした。そのため、剣が届かず、剣先がわずかにハーディンの頬を浅く傷つけるに留まる。

引き戻されるグラディウスの穂先を避けると、マルスはハーディンの横へと回り込んだ。

「ふっ。それでいい。少し面白くなってきたぞ」

頬から唇の端に流れ落ちた血の味を確かめて、ハーディンが低く笑った。

グラディウスの長い間合いを生かして、ハーディンがマルスを攻め立てた。ファイアーエムブレムでそれを防ぎつつ、マルスも果敢にハーディンを攻め続けた。

その激しい戦いとともに、周りでも激戦が続いていた。だが、闇のオーブの力が光のオーブによって弱まったせいか、ハーディンの部下たちの士気は急速に低下していった。そのため、大勢（たいせい）はほぼ決していたのである。

やがて戦いの喧噪は数が絞られていき、残るのはマルスとハーディンだけとなった。だが、闇のオーブに守られたハーディンには、光のオーブを持ったマルス以外では立ちむかうことができなかった。また、ハーディンも、マルス以外は眼中にないという状態だ。

「ハーディン、闇のオーブを捨てろ。そうすれば、呪縛から解き放たれるんだ」
マルスは、必死にハーディンに呼びかけ続けた。
「俺は、呪縛など受けてはおらぬ」
ハーディンが、マルスの頭上からグラディウスを叩きつけるようにして打ち下ろした。かろうじて、マルスがファイアーエムブレムでそれを凌(しの)ぐ。
「甘いぞ、マルス。それで覇者になれると思っているのか。他人を律することができぬのならば、ファイアーエムブレムを捨てて、俺に屈しろ」
激闘に疲れたマルスが膝を屈して荒く息をつくのを見て、ハーディンが言い放った。
「それはできない！」
マルスは叫んだ。
その時、止(とど)めとばかりにハーディンがグラディウスを突き出した。負けじとマルスもメリクルソードを突き上げる。避けきれず、マルスが右胸に致命傷を受けたかに見えた。
「マルス様！」
戦いを見守っていたカインたちから、悲鳴があがった。
血溜りが、床に広がっていく。マルスの身体からグラディウスを引き抜いたハーディンが、数歩後ろに下がった。その腹には、メリクルソードが深々と突き刺さっていた。止めようのない大量の血が、傷口から剣を伝って床に零(こぼ)れ落ちていく。
「ハーディン……」



苦痛に呻きながら、マルスが立ち上がった。だが、命のオーブが放つ光がマルスをつつみ込み、その傷口を見る見るうちにふさいでいく。

「よくやったな、マルス……」

メリクルソードを抜き捨てたハーディンが、そう言いつつ倒れていった。はずみで、彼の持っていた闇のオーブが床の上に転がる。

「俺の命で……すべてが許されるとは思わぬが……、これで少しは……償えよう。許してくれ、マルス……。俺は、自分の中の闇と……戦おうとして勝てなかった。だから、せめてお前の手で……」

「ハーディン、もういい、しゃべるな」

マルスは、命のオーブを使ってハーディンの傷を治そうとした。だが、マルスの傷を治したばかりの命のオーブは、すぐにはその力を発揮できなかったのである。

「どうか……ニーナを……頼む。……伝えてほしい、俺は……あなたを……愛していた……と……。最後まで……。許し……て、ほし……」

「ハーディン！」

マルスの呼びかけに、ハーディンは二度と応えなかった。

「あなたは、弱い男なんかではなかった。光のオーブの力を浴びた時点で、すでに正気に戻っていたのに……」

「封印の盾と五つのオーブでも、万能なんかじゃない。救えない魂だってあるさ。まして、

それが人間だとな」
いつの間にやってきていたのか、マルスの後ろに立ってチェイニーが言った。
「マルス、早く闇のオーブを封印の盾に。これ以上、ハーディンやガーネフのような奴らを出しちゃいけない」
チェイニーが、マルスを促した。
「ああ。分かった」
マルスは答えると、闇のオーブを拾い上げた。すぐに、ファイアーエムブレムの最後の窪みに填（は）め込む。それによって、五つのオーブが再び揃ったのだ。中央の炎の意匠（ファイアーエンブレム）の真上にある透明な輝きを放つ光のオーブ、右上には微かな青みを帯びた星のオーブ、右下には緑に澄み渡る大地のオーブ、左下には赤く脈打つ命のオーブ、左上には漆黒の沈黙をたたえる闇のオーブ。
五つのオーブが揃って輝きを放った時、ファイアーエムブレムに後世施された装飾がぼろぼろと剝がれ落ちた。数百年の時を隔てて、封印の盾がその元の姿を取り戻す。その中央では、不思議な炎の文様が本物の炎のようにゆらめき動いていた。
「これがファイアーエムブレムの真の姿か……」
マルスは、感慨深く封印の盾を見つめた。
その時、ミディアたちを助け出したアストリアたちが玉座の間に現われた。嬉しいことに、シリウスにつきそわれて、ニーナを始めとする四人の司祭の無事な姿が彼らとともに

あった。マケドニアの貴族の娘であるレナと、第二王女であるマリア姫、そして、マルスの姉であるエリス姫である。
「姉上、それにニーナ様、マリア姫もレナもよく無事で」
マルスは、初めて顔をほころばせた。
「マルス殿、よくやってくれました。ついにハーディンを倒してくれたのですね」
ニーナが、そう言いながらマルスに近よっていった。
その態度に、横を歩いていたシリウスが、素早く剣を抜いてニーナの首筋にあてた。
「何をする！」
アストリアが叫んだ。
「貴様、ニーナではないな！」
アストリアを無視すると、シリウスがニーナを凝視した。仮面のせいで正確な表情は読みとれないが、彼が怒りに満ちていることだけはよく分かった。
「私には分かる。貴様が本当のニーナであるならば、ハーディンに対してそのような言葉を吐くはずがない。マルス王子、騙されてはいけないぞ。さあ言え、貴様は何者だ！」
シリウスが、剣を持つ手に力を込めながら言った。
「ふふふふ……」
ニーナが、おかしそうに忍び笑った。
「貴様、何がおかし……」

詰問しようとしたシリウスが、突然見えない力によって後ろに跳ね飛ばされた。よろけながらも、何とか踏みとどまって体勢を立て直す。

「貴様、何者だ、正体を現わせ！」

マルスは、ファイアーエムブレムを掲げて叫んだ。その輝きを浴びたニーナたち四人の司祭の封印の盾の光が、瞬間的に広間を満たした。その姿はガーネフとその部下である暗黒司祭のものの姿が陽炎のように崩れ出す。そして、その姿はガーネフとその部下である暗黒司祭のものに変化した。

「貴様は、ガーネフ！」

マルスが叫んだ。

姿を現わした暗黒司祭に、マルスたちが一斉に身構える。

「それは、封印の盾か。やっかいな物を復活させたものだ。地竜どもの復活を急がねばならんな。マルスよ、もはや貴様と遊んでいる暇はない。この世界は、地竜によって破壊され、わしのための世界へと生まれ変わるのだ……」

不敵にガーネフが笑った。

「そうはさせるか！」

シリウスが、ガーネフたちに斬りかかった。だが、暗黒司祭たちの姿は、斬りつけられる直前に霧となってかき消えてしまった。

「逃がしたか」

大きな音をたてて剣で床の石を打ち据えたシリウスが、悔しげにつぶやいた。
「探せ。エリス殿下や、ニーナ王妃の行方の手がかりとなる物を見つけるのだ。ガーネフをこのままにしてはおけぬ」
ジェイガンが、呆然としている兵士たちに命じた。
慌ただしく、その場にいた兵士たちが王宮中に散っていく。
だが、マルスたちの懸命の捜索にも関わらず、手がかりになるような物は何も見つからなかった。一つだけ分かったことと言えば、ガーネフが地竜の復活を押し進めているということだけである。それは、人間たちの世界の終わりを意味している。ハーディンと同じように、いや、それ以上に闇のオーブによって他人への憎悪を増幅されていたガーネフは、自分以外の世界の破滅だけを願っていたのだ。
打つ手がなくなったマルスたちは、アカネイア大陸規模の危機にさらされていることをやっと実感した。かつて戦ったメディウスや、今日戦った地竜のような者たちが、何千と現われるのだ。そうなってしまっては、たとえファルシオンがあろうと、チキがいようと、人間に勝ち目はないだろう。アリティアとアカネイアの戦争など、それにくらべればちっぽけな内紛にすぎない。
とにかく、アカネイア大陸のすべての国々にこの未曾有(みぞう)の危機を知らせ、ガーネフを捜し出して倒す協力をとりつけようとマルスたちが動き始めたところに、大賢者ガトーその人が現われたのだった。

「ガトー様、よいところにおいでいただきました。今こそ、あなたの助言が必要です」
マルスは、希望にすがりながらガトーを出迎えた。
「うむ、首尾よく封印の盾を修復できたようじゃな。さすがはマルス殿だ。わしの方も、やっとガーネフの居所をつかんだ」
「それはどこなのですか」
「竜の祭壇じゃ。パレスから転移したガーネフの足跡を丹念に辿ったところ、奴が竜の祭壇に潜んでいることが分かった。そこで、奴はメディウスを始めとする地竜復活の儀式を行なっているに違いない。おそらく、さらわれた司祭たちは、そのための贄(にえ)とされているのであろう」
「そんな！」
ガトーの言葉に、思わずマルスは叫んだ。
「いや、メディウス復活の兆しはあるが、完全に復活してはいまい。奴の波動は、まだ完全ではないからな。そうであれば、まだ儀式は終わってはおらぬ。わしも、氷竜神殿でガーネフの魔道の邪魔をするゆえ、少しは時間が稼げるであろう。その間、司祭たちの命は守られるはずじゃ。だが、急がねば司祭たちの精神は地竜たちを目覚めさせるための呼び水とされ、復活の際に地竜どもに心を食われてしまうであろう。それは、肉体の死よりも遙かに辛い心の死を迎えるということじゃ」
「そのようなことはさせません。絶対に！」

マルスは叫んだ。
「その通りじゃ。スターライト・エクスプロージョンとファルシオンがガーネフに奪われた今、あ奴を倒す決め手にかけるが、致し方あるまい。今また魔法生成を行なって星のオーブが失われれば、それこそガーネフの思うつぼじゃからの。それを見越してガーネフはハーディンの嫉妬心をあおり、大陸中を混乱させて自らの行ないを我らの目から隠し、アリティアを襲わせて自らの脅威となる物を盗み出したに違いない」
「すべては、ガーネフが仕組んだことだったのですか」
マルスは、驚きとともに激しい怒りを込めて言った。陰謀を隠すことだけのために、アカネイア大陸中の国々を戦わせて、多くの人々を死に至らしめたのだ。さらに、ガーネフは、この世界をも滅ぼそうと画策している。もはや、その行為は怨念としか言いようがなかった。
「すべてがそうだとは言い切れぬがな……」
まだ思い当たる節があるのか、少し浮かぬ顔でガトーが言った。
「それで、竜の祭壇とは、どこにあるのですか」
マルスは、ガトーに訊ねた。
「マケドニアの北、旧ドルーア帝国の飛竜の谷の中にある。そこで囚われた司祭たちを救い出し、ガーネフの行なっている地竜復活の儀式をやめさせるのだ。その上で、封印の盾で地竜たちを完全に再封印するのだ。さすれば、ガーネフ一人だけでは、すぐに何かが出

来るというわけではない。その上で、何とかファルシオンとスターライト・エクスプロージョンを取り返し、ガーネフのさまよえる魂を黄泉へと送るのだ。苦しい戦いとなるが、よいな、マルス」

「分かりました。すぐに、出発いたします」

マルスは新たな決意を固めると、竜の祭壇にむけて出発の準備にかかった。

伝承3　暗黒竜

神竜の長(おさ)であるナーガは、その数千年に渡る生涯の最期の時を迎えようとしていた。

彼の一生は、決して幸せであったとは言えなかった。その晩年、竜族が種族としての黄昏(たそがれ)を迎えたからだ。

長命であるがゆえの反動か、竜族の子供は数が少ない。だが、幸いにも、ナーガはチキという子供を手に入れることができた。彼の強大な力を受け継ぐ、竜族の指導者にふさわしい力を秘めた子供である。

だが、チキは生まれた時代が悪かった。

竜族は謎の退行を引き起こし、そのままでは理性を失って野獣と化してしまう時代であったのだ。そのため竜族を二分する戦いが起き、竜としての破壊本能の力を竜石に封じ込めて竜人となった、神竜ナーガ率いる神竜族を中心とする長老議会と、竜の誇りを保つと言い張った、暗黒竜ロプトウス率いる地竜族を中心とする者たちが、互いに争ったのであった。そのため、竜人となった者たちが造った美しきテーベの都は破壊され、ナーガの力に守られた神殿のあるテーベの塔だけが唯一残り、その他の建物は瓦礫と化して焼き尽くされて砂漠となった大地に埋もれた。

地竜たちが拠点としたドルーア地方も荒れ果て、地竜たちは大地に封印されてその地に竜の祭壇が建てられた。

神竜族の持つ光のオーブ、飛竜族の持つ星のオーブ、氷竜族の持つ大地のオーブ、火竜族の持つ命のオーブ、そして、地竜で唯一ナーガの同志となったメディウスが持ち出した地竜族の持つ闇のオーブ、それら五つのオーブすべての力を使ってナーガは地竜族を封印したのであった。

ナーガは自らの鱗を一枚剝がすと、五つのオーブをそれに埋め込んで封印の盾とした。それを安置するためにラーマン神殿を建立し、竜人以外の竜族が入れぬように結界を張ったのだった。

竜としての本能を竜石に閉じこめることにより、ナーガたち竜族は理性を保つことができた。だが、まだ幼竜であるチキは、すべての力を竜石にすることが困難であった。増大していく力が、竜石に変換しきれないのである。力の落ち着く成竜となれば、本能と理性の分離は可能であるが、それまではチキの力を抑えておく必要があったのだ。

竜族の中でも、神竜の王族は二段階の変化をする。それによって力を飛躍的に増大させるのだ。同様に、地竜の中でも暗黒竜へと変

態する者もおり、火竜は魔竜に変化する。氷竜と飛竜はそのような変態は行なわない代わりに、幼竜の時代は身体も小さい。後の世に、マケドニアの竜騎士たちが乗用とする飛竜は、退化して幼竜のまま成長が止まってしまった亜種である。

ナーガすら凌ぐという力を持つチキが成竜となれば、世界は新たな守護神を戴くことになるであろう。だが、もしも幼竜の時代に本能に囚われて野生化したチキがそのまま成竜となれば、世界は最悪の破壊神を生み出すこととなる。そうなれば、地上のすべては破壊され尽くすだろう。

天寿を全うする時が近づき、余命がいくばくもないと悟ったナーガには、チキを安全に導くだけの時間がなかった。そのため、ナーガは封印の盾の力を使って、チキを氷竜神殿に封印したのである。そして、その監視役をガトーに命じた。

また、地竜族でありながらナーガの意思に賛同して竜人となったメディウスには、ラーマン神殿の司祭として、封印の盾を守るように命じた。

同時に、ナーガは自らの牙を抜いて、それを一振りの剣へと変えた。また、彼とともに地竜族と戦って命を落とした火竜族の長の角

から一張りの弓を、氷竜族の長の牙からは一振りの剣を、飛竜族の長の爪からは一条の槍を作りだして、神殿へと収めた。後の世に厄災があれば、人間たちがこれを使って乗り越えてくれるようにと願ったのである。

また、神殿内には、竜人となった竜族たちの竜石が数多く収められた。ラーマン神殿の目的の一つに、竜人たちが竜に戻ることのないように竜石を保管するという意味もあったのである。

すべての指示を与え、ナーガは数千年に渡る生涯を閉じてテーベに没した。

そして、チキが成竜となるまで、歴史は止まったかのように思えた。

ナーガとともに人間を愛したメディウスは、司祭としてラーマン神殿をよく守った。だが、時が下るにつれて、神殿の宝物を狙う盗賊たちが現われるようになった。もちろん、メディウスにとってはそのような者たちは敵としてはとるにたらない者たちであったが、長い年月をかけてメディウスの人間に対する認識を少しずつ変えていく要因となったのもまた事実であった。

そして、事件は起こる。

メディウスが親切からラーマン神殿に泊めた男が、封印の盾を盗んで逃げたのだった。
この裏切りは、メディウスの人間に対する認識をあらためさせた。
さらに、男は人間の王国を作って大陸に覇を唱えたのである。それ自体は、無秩序状態であったアカネイア大陸に秩序だった国家をもたらすという意味でよいことであった。だが、大きな勢力を持った人間たちは、各地でひっそりと暮らしていた竜人たちをマムクートと呼び、迫害を始めたのだ。
それは、かつて地竜族が人間たちに行なった行為と同じであった。むろん、竜石を用いて竜としての力を行使すれば、竜人たちはむざむざ迫害されることもなかったであろう。だが、人間と争わずに暮らすようにというナーガの教えを、竜人たちは忠実に守ったのである。その結果、多くの竜人が命を落とすこととなった。
メディウスは、ナーガの教えを否定した。今の人間たちとかつての地竜たちと、どこが違うのであろうかと。もし同じであるとするのならば、地竜族と同じく、人間たちも滅んでしかるべきだと思い立ったのである。
奇しくも、その時、地竜族の長であった暗黒竜ロプトウス存命の

知らせがもたらされた。
散逸した五つのオーブの行方を求めて東奔西走していたガトーが、その途上で知ったのである。
ナーガとの戦いに敗れた暗黒竜は、身を隠した後、唱えていた竜の誇りを捨て、竜人となってかろうじて生きながらえていたのである。封印の盾の力によって、かつての力を発揮できないと知った暗黒竜は、旅の司祭にその魂を宿らせた。そして竜石から魔道書を作り出すと、司祭の故郷へと逃れたのである。彼は、新たな地を支配下において、生き残った竜人たちに復讐するつもりであったのだ。
それを知ったガトーは、チェイニーを始めとする十一人の竜人たちを連れてアカネイア大陸を旅立った。その時、ナーガの神竜石を持ち出している。異国の地で暗黒竜と戦うのに、ナーガの残した神竜の力が必要だと考えたからだ。
後に暗黒竜を見つけだしたガトーは、その地の十二人の若者たちに竜石から作りだした魔道書や剣などの武器を与え、それを使いこなすための力を授けた。それによって、暗黒竜の野望は潰え去り、ガトーたちは異国の地に残ることを希望した一人をのぞいてアカネイア大陸への帰国の途についた。

その途中、ガトーたちは散逸したオーブを捜し、すべてのオーブを無事見つけだすのだが、その間にアカネイア大陸は大きな変動を迎えていた。

五つのオーブをラーマン神殿に奉納しにいった時、そこにメディウスの姿はなかったのである。

人間を見限ったメディウスは、竜人たちだけの国を作ろうとしていたのだ。

ラーマン神殿から持ち出した竜石と、多くの仲間を集めたメディウスは、帰国したガトーでも簡単には手を出せない勢力を作りだしていた。そして、ドルーア帝国を建国するのである。

やがて、ドルーア帝国の竜人たちと、人間たちの戦争が始まった。第一次ドルーア戦争である。

ナーガの教えを頑なに守るガトーは、陰ながら人間たちを助け続けた。そして、封印の盾が盗まれた時に氷竜神殿へと隠しておいたファルシオンを、勇者アンリに与えたのである。

戦争は人間たちの勝利に終わり、メディウスはドルーアの地で倒れた。

だが、封印の盾が壊れてしまったために、時を経ればメディウス

が復活するだろうことをガトーは知っていた。しかも、メディウスの年齢と力から言って、次に復活してほどなく暗黒竜へと進化するだろうことも感じ取っていたのだ。

ガトーはカダインに魔法学院を作ると、人間たちが少しでも野生化した竜たちに対抗できるようにと数々の魔法を教えていった。けれども、慢心する人間はガトーをも失望させ、彼は氷竜神殿での隠遁の道を選ぶのである。

そして、人知れずメディウスは復活を遂げていた。メディウスは姿を変えて各地を渡り、大胆にも魔法都市カダインへも訪れていた。

だが、当時すでにガトーは隠遁しており、彼の正体に気づく者はいなかったのである。

そこでメディウスは、ミロアとガーネフという二人の司祭に出会った。

彼らは高い志を持っており、かつてメディウスが失望した人間とは違うように感じられたのだ。もしも、彼らのような心を持つ多くの者が人間を導いていくのであれば、人間は変わっていくのではないかとメディウスは希望を持った。

けれども、子細に観察するうちに、メディウスはガーネフの中に人間の持つ変わらぬ欲望を見出してしまったのである。そのため、メディウスは一つの試しをガーネフに与えた。すなわち、闇のオーブへの関心をかき立てたのである。ガーネフが闇のオーブの誘惑に耐え、欲望を抑えることができるのならば、人間は変わったと考えようと思ったのである。だが、もしも、ガーネフが闇のオーブに囚われるような者であるのならば、人間であるガーネフの手によって人間たちに滅びをもたらそうと考えたのである。

　結果は後者であった。

　ガーネフは簡単に闇のオーブに精神を囚われると、人間の本性をあらわにしたのである。すなわち、自分以外のものはすべて支配する対象であり、従わないものは破壊するしかないというもっとも暗き思いに囚われたのだった。

　魔王と自称するようになったガーネフを、メディウスは言葉巧みに仲間に引き入れた。

　そして、ガーネフを手駒として使うことによって、暗黒戦争を引き起こしたのである。もっとも、ガーネフの方は、自分はうまくメディウスを支配下においていると思い込んでいたのだが。ファルシ

オンとマフーさえあればメディウスに勝てると、ガーネフは思い込んでいたのである。そして、オームの杖の力を使って永遠にも近い長寿の力を手に入れれば、竜族にも勝ると考えたのだ。

だが、魔道士のガーネフではファルシオンを使いこなすことは無理であった。それに、やがて封印の盾の力が切れて地竜族が復活してしまえば、ガーネフ一人では何もできるはずがなかった。数千の地竜相手にマフーの力を使い切って、哀れな最期を遂げるのは間違いないことであったのだ。

暗黒戦争は、順調にメディウスの思惑通りに進んでいった。だが、ガトーの介入と、マルスの存在によって、メディウスの計画は崩れだしたのだ。

ガトーは、暗黒戦争の始まるかなり前から、メディウスの動向に注意していたのだった。だが、それは彼の集中力を分散することとなり、ガトーが留守の間にバヌトゥがチキの封印を解いてしまうという結果をもたらす。この時、ガーネフはメディウス以外にチキの力も欲した節がある。慢心が、メディウスの対極にある存在をも支配しようとガーネフに考えさせ、バヌトゥをそそのかしたのである。

ガトーの介入とチキの目覚めに不安を覚えたメディウスは、もし

ものことを考えてガーネフに自分に対する依存心を強く植えつけることにした。暗黒竜となった自分を使えば、無敵の力を使えると信じ込ませたのだった。

それは功を奏した。

マルスによってメディウスもガーネフも倒されたが、ガトーに妨害されて部分的にしかオームの力を取り込められなかったとはいえ、ガーネフは闇のオーブの力も借りてさまよえる魂として生きながらえたのである。

人間の妄執そのものと化したガーネフは、自分を殺そうとした者たちの存在の消滅を願い、暗黒竜であるメディウスの存在を強く欲した。

そして、ニーナたちの拉致（らち）を考え出した。

大地の力をメディウスに集めるための依代（よりしろ）として、高位の司祭である四人の女性の高潔な精神を利用したのである。命を尊ぶ彼女たちの祈りを、砕けたオームの杖の破片を媒介としてメディウスに注ぎ込み、大地の生命力を取り込む力としたのである。それによって、一〇〇年はかかる地竜の復活を一年ほどで実現しようとしていたのであった。

そして、司祭たちの衰弱と引き替えに生命力は集まり、今まさにメディウスは復活しようとしていた。

第4章　竜の祭壇

1

マルスたちは、パレスの治安を牢から出されたレフカンディ侯とミディアに任せると、急いで竜の祭壇へとむかった。
ニーナ奪回を担って、アストリア、ジョルジュが直属の部下たちだけを連れて同行する。大軍では行軍が遅くなるのと、ハーディンの集めた傭兵たちが野盗化するのを防ぐために、ある程度の数の兵士が必要だったからである。
ロシェの部隊は、ことの顚末(てんまつ)をオレルアン王に告げるため、いったん帰国の途についた。
マルスの軍は、カイン率いるアリティア騎士団を中心に、ミネルバ率いる天馬騎士たちと、シリウス率いるグルニア義勇兵、アリティア傭兵部隊と自由騎士団という構成であった。
グラ経由でひとまずアリティアを目指したマルスたちは、途中でサムスーフ騎士団と遭遇した。だが、ハーディンの死を知らされると、サムスーフ騎士団はあっけなく投降した。彼らとしても、強いられた戦いを続ける気力はなかったのである。
グラで、マルスは当面の危機が去ったことをシーマに告げた。それによって、疎開した人々をグラに呼び戻しても大丈夫だということを伝えたのである。引き続きグラのことをシーマとサムソンに任せると、マルスは先を急いだ。

アリティアに帰国したマルスたちを、国民は歓呼をもって迎えた。そこには、ナバールとともにやったきたフィーナとジュリアン、そしてエルレーンの姿があった。
「カダインは、ウェンデル先生が守ってくださっている。私も、今度はマリクたちとともに戦わせてくれ」
エルレーンは、マリクとリンダの手をとって言った。リカードは居心地がよかったのか、カダインに残ったが、逆に、フィーナはナバールのいく所についていくと言い張って、無理矢理やってきている。
「もちろんだとも」
マリクは、喜んでエルレーンに答えた。
ナバールたちも、当然のことのようにマルスの軍に加わった。特にジュリアンは、レナの現状を聞いて、いてもたってもいられなくなっていた。
マルスはアリティアで、軍の再編成を行なった。精鋭だけに、兵を絞り込んだのである。アリティアに残ることとなった兵たちは、文官たちとともにアリティアの再建に注力することとなった。
「もちろん、私はマルス様と一緒にいきます」
シーダは、一歩も引かないという様子でマルスに言った。それを見て、マルスは微かに苦笑した。
「私だって、君のことはもうよく分かっているよ。死ぬ時は一緒だ。だが、私は、決して

君を死なせはしない。これからは、いつでも二人一緒だ」
マルスは、シーダの頭をだきよせて言った。
慌ただしく補給をすませてアリティアを出発したマルスたちは、そもそもの発端であったグルニアに再びやってきた。
アランとオグマの協力の下、ユベロとユミナは立派にグルニアの平安を取り戻していた。
わずかな期間のうちにいろいろとあったらしく、ユベロはいつの間にかより男の子らしく、少し精悍な顔つきになりつつあった。対するユミナは、あいかわらず口やかましくはあったが、いろいろの決定はユベロに任せ、女の子らしく一歩引いた場所にいた。
「もう、グルニアは大丈夫でしょう。ここはアラン殿とサムトーに任せて、私たちはマルス王子に同行いたします」
オグマの言葉は、マルスにとって心底頼もしかった。カシムとマリーシアは残ったが、マケドニア出身のマチスたちは、帰国もかねてマルスたちに同行した。
いよいよマケドニアへと進んだマルスたちは、竜の祭壇へむかうための最後の準備に余念がなかった。
ここまでの強行軍によって不調を訴えた兵たちは最終的な攻撃軍の編成からは外され、マチスとウォレンが率いる後続の補給部隊へと回された。さすがに、フィーナもそちらへと回される。
「竜の祭壇へは、飛竜の谷を抜けていくんだ。ここは、火竜の墓場や氷竜の神殿のように、

飛竜が集まっている場所さ」
マルスが広げた地図の上を、大ざっぱに指でなぞりながらチェイニーが言った。ドルーア帝国のあったマケドニアの北の土地は、正確な地図ができていない。野生化した竜が徘徊していたため、足を踏み入れる者がいなかったのだ。自由に空を飛んで地上を見下ろせる竜騎士たちでも、同様に空を支配する巨大な飛竜を恐れて近づくことはなかった。一対一では、竜と人間では戦いにならないからだ。
「谷の入り口には、開拓民の小さな集落があるはずだ。もっとも、最近の度重なる戦争で、今もそこに住んでいるかは疑問だがな。だが、一つの目印になるし、距離的にも野営するには適当な場所だろう」
マケドニアに近い地域の地理に明るいミネルバが、チェイニーを補足した。
「では、ひとまずはその集落を目指して進もう。その後に東進して飛竜の谷を抜け、竜の祭壇を目指す。ガーネフやメディウスに対抗する力は、残念ながら今の私たちにはない。封印の盾が守ってくれるとは思うが、敵を倒す力を引き出すことは、人間である私たちには無理だろう。だから、最優先の目的は、四人の司祭たちを助けることにある。それで、メディウスの復活は阻止できるはずだ。残念だが、ガーネフとは後日あらためて決着をつけよう」
マルスは、各部隊の指揮官たちと作戦を確認し合った。
「では、準備が整い次第、直ちに出発する」

マルスの言葉に、全員がうなずいた。

ほどなくして、準備の整った軍勢が出発する。

先頭は、カインの率いるアリティア騎士団の精鋭で、アベルが副官として半数を預かっている。その中には、ルーク、ロディ、セシルの若き騎士たちの姿もあった。

その後に、アストリア、オグマ、ナバールの傭兵たちが続く。その後ろは、ジョルジュとゴードンが率いる弓兵隊であった。ライアンも、立派に兄と同行している。

マルスの旗本隊には参謀としてのジェイガンがつきそい、近衛部隊としてドーガの重装騎士団が主体となっている。また、マリク、エルレーン、リンダの魔道士たちと、チェイニー、チキ、バヌトゥの竜人たちもマルスとともにいた。レナを心配するジョルジュも、特別にマルスのそばにいる。

殿(しんがり)は、シリウスと、彼がグルニアの若い兵士の中から選りすぐった騎馬の兵士たちが受け持った。

上空には、ミネルバの率いる天馬騎士と竜騎士の部隊が展開している。その中には、パオラ、カチュア、エストのペガサス三姉妹と、シーダの姿もあった。

マルスの部隊を追うようにして、マチスの率いる補給部隊が続いていた。ウォレンたちマケドニア義勇兵が護衛し、フィーナが陽気に物資を管理しながらゆっくりと進軍していった。

2

出発した日の夕方、マルスたちの部隊は、ミネルバが言っていた集落に辿り着いた。
予想していた通り、家々は放棄されて誰も住んではいない。
マルスは兵を休ませると同時に、ドーガたちに廃屋となった家々を調べさせた。相手はガーネフの率いる暗黒司祭たちである、思わぬ伏兵などを見落としては致命的な痛手を受けかねない。
彼らが家々に散ってからほどなくして、ドーガが慌ててマルスとミネルバを呼びにやってきた。
「それは本当なのか」
我が耳を疑ったマルスは、思わずドーガに聞き返していた。
「間違いございません。どうかその目でお確かめください」
ドーガに言われて、マルスはジェイガンとミネルバを伴ってドーガの案内する家に急いだ。
その家の中にいたのは、誰あろうミネルバの兄のミシェイルであった。だが、寝台（ベッド）に横たわるその姿には、雄々しく飛竜を駆る竜騎士の面影はなかった。布団には血の跡が染みつき、顔は青ざめて死相が浮かび上がっていた。

「マルス、それにミネルバか。よもや、生きているうちに再会できるとは思っていなかったぞ。これも、マリアの導きか……」
ミシェイルが、力を振り絞りながらか細い声で言った。
「いったいどうしたというのだ、ミシェイル。君が生きていることはミネルバ殿から聞いて知ってはいたが、その怪我は……」
驚きを隠せず、マルスはミシェイルに聞いた。その後ろで、ミネルバが口を真一文字に結んだまま、無言で立ちすくんでいた。
「情けないことだが、ガーネフにやられた……」
ミシェイルが、途切れ途切れに事の顚末（てんまつ）を語り始めた。
ミネルバをマルスに託した後、ミシェイルはマケドニアに戻って妹マリアの行方を捜し続けた。そして、ついに旧ドルーア領であるマケドニアの北の大地に、マリアが暗黒司祭たちによって連れ去られたということを突き止めたのであった。
ミシェイルは谷の入り口にある打ち捨てられた集落を拠点とすると、マリアを捜して単身ドルーアの地を飛び回り続けた。そして、ついに竜の祭壇を発見したのである。
密かに建物の中に忍び込んだミシェイルは、宝物庫を見つけてスターライト・エクスプロージョンの魔道書と光剣ファルシオンを手に入れたのだった。ガーネフは留守であるらしく、警備も手薄であったのが彼には幸いした。だが、続けてマリアを捜そうとした矢先、運悪くガーネフがパレスから逃げ帰ってきたのである。

もちろん、最初からガーネフを倒そうと考えていたミシェイルは、果敢に戦いを挑んだ。ガーネフさえ倒してしまえば、安心してマリアを捜し出して助けることができるからだ。だが、魔道士ではない彼では、せっかく手に入れたスターライト・エクスプロージョンの魔道書を使うことができなかった。同様に、ファルシオンも、剣が本来持つ力をすべて引き出すことはできなかったのである。そのため、ミシェイルはガーネフを傷つけることができず、逆に敵の放ったマフーの魔法によって致命的な痛手を受けてしまったのだ。けれども、正式な持ち手ではないはずの彼を、ファルシオンはその力で守ってくれたのである。

かろうじて一命を取り留めたミシェイルは、無念の撤退を余儀なくされた。だが、最大の脅威である二つの武器を奪われたガーネフは、配下とした魔道士や蛮族たちを総動員してミシェイルの後を追わせた。

逃げる途中で多くの傷を負いながらも、ミシェイルは何とかガーネフの許から逃げおおせたのだった。それは、ガーネフが、メディウス復活の儀式を急いでいたせいでもあった。そうでなければ、ガーネフ本人が執拗に彼を追いかけてきたことだろう。

「何と無謀なことを。マリア姫の行方が分かったところで、私たちに教えてくれればよかったのに。そうすれば、一緒にガーネフと戦えたかもしれなかったではないか」

マルスは、いかにも残念そうに言った。

「俺が、お前とか。冗談だとしても、酷いものだ。そのようなこと、あるはずがないでは

ないか」
ミシェイルが、無理に苦笑しようとした。
「そんなことよりも、俺にはもう時間がない。早く、寝台の下の物を持っていけ」
ミシェイルが、マルスを促した。言われた所を捜してみると、そこにスターライト・エクスプロージョンの魔道書と、光剣ファルシオンと、マケドニアの家宝であるアイオテの盾が隠してあった。
「頼んだぞ、マルス。俺はまだ、ミネルバに言っておかねばならぬことがある」
ミシェイルの言葉に、マルスはジェイガンとドーガを促して部屋を出ていった。
「兄上……」
一人残されたミネルバがつぶやいた。
「何という顔をしている。それが、俺を殺そうとした者の顔か」
消え入りそうなミネルバの声に、お前の方が死にゆく者のようだとミシェイルが笑った。
「お前に一つだけ言っておきたいこと、いや、頼みごとがあるのだ」
「何でしょうか」
ささやくようなミシェイルの言葉に、ミネルバが顔を近づけて訊ねた。
「マリアのことを頼む。結局、俺はあいつを助け出すことができなかった。無念ではあるが、俺は戦って破れたのだから、ある意味仕方ない。だが、マリアは、無抵抗のままガーネフの手にかかろうとしている。こんなことが許されていいものか」

「その通りです。マリアは、私が命に代えても助け出してみせます」
兄の手をとりながら、ミネルバが言った。
「それを聞いて安心した。頼むぞ。それでこそ、お前は俺の……。どうした、なぜ泣くのだ」
ミネルバの頬を伝う物を見て、ミシェイルが怪訝（けげん）そうに訊ねた。彼女の涙など、ミシェイルは初めて見たからだ。
「やっと、本当の兄上が戻っていらっしゃった……」
流れ落ちる涙をぬぐおうともせずに、ミネルバが言った。
「馬鹿な奴だ。今も昔も、俺は少しも変わってなどおらぬというのに」
そう言って、ミシェイルは幼い時のように妹の頭をなでてやった。

3

新月を翌日に控えた夜。星々も瞬かず、闇は世界を覆い尽くしているかのようであった。
その日の深夜、ミシェイルの許を訪ねてきた者がいた。
「誰だ、貴様は」
見覚えのない仮面の騎士を見て、ミシェイルは訊ねた。
「久しぶりだな……」

シリウスが、そう言うと仮面を外してミシェイルに素顔を見せた。
「お前は……。そうか、お前も生きていたのか。つくづく、ドルーアに荷担した者たちというのは悪運が強いというか、いや、呪われていると言うべきか。それで、お前は何をしているのだ」
シリウスの正体を知ったミシェイルは、面白い物を見たと言わんばかりの顔になった。久しぶりに見る旧友の顔に、ほっと緊張の糸が解れたかのようだ。
「すべての顚末を見届けるために、マルスと行動をともにしている。どのみち、私もお前も、すでに死んでいるはずの身、今さら表舞台に立つつもりはない」
シリウスが、きっぱりと言った。
「そうだな。だが、お前がいてくれるのならば心強い。ミネルバとマリアのことを頼めるか」
「そのつもりで、お前に会いにきたのだ」
その言葉に、ミシェイルはにやりと笑った。
「あいもかわらず律儀な男だ。その律儀さゆえに、一度身を滅ぼしたというのに。そろそろ、好き勝手に生きてもいいだろうが」
「これでも、充分好きに生きている。お前だってそうだろうが」
「ああ。国など捨ててしまってせいせいした」
最後のわだかまりが消えたかのように、ミシェイルは言った。

「アカネイアなど、マルスに任せてしまえばいいのだよ」
シリウスが言い添えた。
「時代は、俺たちよりも、マルスを選んだと言うのか。そうだな、俺たちよりはもっと上手に世界を治めてくれるかもしれんな」
マルスの持つ不器用なまでの誠実さを思って、ミシェイルはつぶやいた。
「カミュ……」
思い出したように、ミシェイルがシリウスの本当の名を呼ぶ。
「何だ、ミシェイル」
カミュが、旧友の名を呼んで聞き返した。
「すまなかったな、いつぞやは巻き込んでしまって」
かつてドルーアとの同盟を進めるようにと声をかけたことを、ミシェイルはカミュに詫びた。
「いや、そのおかげで、俺はいろいろと楽しませてもらったつもりだ。貴様が気にすることはない」
屈託なくカミュが答えた。
「そうか。では、安心だな。またいつか会おう。また、いつかな……」
ミシェイルは静かに目を閉じて、それっきり黙してしまった。
「ああ。ゆっくりと休むがいい。いつかまた会えるだろう……」

そう言い残して、再び仮面をつけてシリウスに戻ったカミュが、ミシェイルの部屋を後にした。

翌朝、補給部隊と合流したマルスたちは、後のことをフィーナとウォレンに任せ、飛竜の谷にむかって進軍を開始した。

「どこへいかれるのか」

出発前だというのに、騎竜を離れようとするミネルバを見てシリウスが声をかけた。

「兄上に出発の挨拶をしたいのだが」

「彼は、眠っている」

答えるミネルバに、シリウスが言った。瞬間、それがどうしたのかと問いかけようとしたミネルバに、シリウスは無言で語った。その言外の意味を、ミネルバは悟った。

「そうか……」

ミネルバは兄が愛用していたアイオテの盾をだきしめると、気丈にも自分の騎竜の方に戻っていった。

幅の広い飛竜の谷に近づくにつれ、上空を飛び交う飛竜たちの姿がいやでもマルスたちの目に入ってきた。同様に、飛竜たちもマルスたちを見つけたようである。獲物が大挙してやってきたと感じた飛竜たちは、迷うことなくマルスたちに襲いかかってきた。

「ゴードン！」

すかさず、マルスは弓兵隊に攻撃を命じた。
「一匹ずつ、攻撃を集中させて確実に仕留めるんだ！」
ゴードンが、部下たちに命じる。
翼で空を切る音を響かせながら、巨大な飛竜が上空から急降下してくる。
「槍を立てぃ！」
カインが叫ぶ。騎士たちが持っている槍を空にむかって突き立て、針の山のように槍衾を作りだした。足の爪で人馬を襲おうとした飛竜が、慌てて反転して空に戻ろうとする。
「撃て！」
ゴードンが命じた。無防備にさらけ出された飛竜の腹にむかって一斉に矢が放たれる。
無数の矢によって針鼠となった飛竜が、バランスを崩して墜落した。空を飛ぶために軽量な身体へと進化した飛竜には強靭な鱗はない。傷つけることは可能であった。また、巨体ゆえに高空から墜落すれば、衝撃で致命的な骨折を負う。
パルティアの炎につつまれた矢は一撃で飛竜の頭部を射抜き、死んだ飛竜が空中で他の飛竜に衝突して、そのままもつれ合いながら谷の斜面に激突して転げ落ちていく。
何頭もの飛竜が、次々にゴードンやジョルジュたちによって倒されていった。
「今だ、前進せよ」
マルスが命じた。
飛竜たちが怯むのを見て、全軍が移動を始める。

それを見て、様子をうかがっていた遠方の飛竜たちが近づいてこようとした。そこへ、パオラたちペガサス三姉妹が突っ込んでいく。上下に三角形の編隊を保ちながら、パオラたちが高速で飛竜とすれ違った。飛竜の身体に三本の手槍が確実に刺さっている。飛竜が飛行体勢を崩したところへ、ミネルバがすれ違い様に首筋を槍の穂先で薙いだ。動脈を断ち切られ、飛竜が血飛沫を振りまきながら墜落していく。

同様にして、天馬騎士たちが小回りのよさを駆使して、マルスたちに近づこうとする飛竜を排除していった。

「谷を抜けるぞ」

先頭を走るカインが叫んだ。

大きく開けたマルスたちの視界の前に、小高い丘とその上にそびえ立つ巨大な建物が姿を現わした。

「あれが、竜の祭壇だ」

マルスの横で、チェイニーが言った。

「よし、急ごう」

マルスが答えた。

飛竜たちの追撃を逃れて、マルスたちが竜の祭壇へとむかう。

不思議なことに、竜の祭壇の近くには飛竜たちはやってこなかった。おそらくは、飛竜の谷が飛竜たちの生息場所であり、竜の祭壇は地竜たちの領域なのであろう。

マルスたちが近づくと、丘と見えたものは巨大な一つの岩塊であった。竜の祭壇を支える礎(いしずえ)だ。その岩塊には、周囲をぐるりと回る形で螺旋状の階段が刻み込まれていた。竜が登れるほどの、幅の広い巨大な階段だ。

マルスたちは、その階段を登り始めた。

半分ほど登った時、突然マルスたちの頭上から巨大な火球が降り注いできた。ガーネフ配下の暗黒司祭が、メテオの魔法で攻撃してきたのだ。

逃げ場所が限定されている階段の上では、狙い撃ちもいいところであった。兵たちが混乱を起こしかけるのを、マルスは何とか抑え込んだ。

その間に、ミネルバ配下の天馬騎士たちが、暗黒司祭にむかって決死の突撃をかける。それが成功し、何とか敵を排除することができた。そのままミネルバたちが竜の祭壇の入り口付近を制圧してくれているうちに、マルスたちは一気に階段を駆け登った。

「よし、突入！」

マルスは半数の者を休ませつつ、元気な者たちで強行突入をかけた。兵の数を上手に使いつつ、最良の状態の兵が常に先頭に立って戦えるように、見事な運用の手腕を見せたのである。

竜の祭壇と呼ばれる建物の中には、案の定ガーネフ配下の者たちが大挙して待ちかまえていた。カダインでガーネフに下った暗黒司祭たち、魔道によって支配された各地の蛮族たち、そして、凶悪な魔竜の姿もいくつかあった。

「マルス、魔竜たちはチキに任せろ」
「ああ、分かった」
チェイニーの助言に、マルスはうなずいた。
神竜の姿となったチキが血路を開く。その後に続くオグマたちに、エルレーンが持ってきていた聖水を振りかけた。魔道による力をわずかながらではあるが跳ね返す力を持つ薬品だ。
立ちはだかる魔竜が、灼熱の炎を吐き出した。負けじと、チキが霧状のブレスで応戦する。魔竜の炎はチキの鱗を軽く焦がしたにすぎなかったが、チキのブレスを全身に浴びた魔竜は、全身から黒い煙を立ち上らせながらばったりと倒れた。
その周囲では、暗黒司祭がドゥラームの魔道書によって呼び出した敵の生命を吸い取る邪眼を、オグマたちにむけようとしていた。だが、聖水を浴びたオグマたちを、冥府の瞳は捉えることができなかった。その一瞬をついて、オグマとナバールが暗黒司祭たちの懐に飛び込んで敵を倒していく。
「雷鳴は輝く。浄化の閃光は悪しき魂を光にて消し去らん。走れ、聖なる雷光よ！」
エルレーンが、トロンの魔道書を掲げて呪文を唱えた。黄色みを帯びた輝く魔方陣が中空に描かれ、そこから雷球がスパークをあげながら飛び出した。呪われた巨大な斧を持って迫っていた蛮族が、全身を雷球につつまれて感電死する。
「我は求む聖なる願い。悪しき力は浄化を経て光となりぬ。其の力、聖なる糧に！」

リンダも、リザイアの魔法を唱える。蛮族の足下に青白い魔方陣が浮かび上がると、生命力を吸い取られた敵が力無く倒れていった。

乱戦となりつつも、マルスたちは確実に敵を押し退けていく。そこへ、火竜となったバヌトゥを先頭としたカインたちがやってきた。充分な休息をとったカインたちは、気力に満ちあふれていた。オグマたちとの戦いで疲弊していた敵に、猛然と攻撃を仕掛けていく。その間に、いったん下がったマルスたちは、神殿とも塔ともつかない構造の竜の祭壇の深部へといくための道を探した。

「こいつだ」

チェイニーが、ひときわ頑丈そうに見える扉を指して言った。

ドーガが、マルスたちを下がらせて扉に体当たりする。わずかにきしみはするが、閂のかけられた扉は頑強にマルスたちを拒んだ。

「仕方ないな。手伝ってやるよ」

チェイニーがドーガに変身する。

二人のドーガが、思いっきり扉に体当たりした。何度か繰り返し体当たりすることにより、蝶番が緩み、さすがの扉も隙間をのぞかせ始める。ドーガとチェイニーは二人で聖槍グラディウスを持つと、思い切り扉の隙間に突き入れた。閂の砕ける音が響き、扉が開いた。その奥には、さらに上の階へと続く大きな階段が姿を見せていた。

「みんな、こっちだ！」

マルスは叫んだ。

あらかたの敵を掃討（そうとう）したオグマたちが、マルスの許に駆けつけてくる。

ある程度の手勢が集まったのを確認すると、マルスは階段を登っていった。

「きたか、小僧。またしてもわしの邪魔をするとはな。だが、もう遅い。間もなく暗黒竜が誕生する。すべては滅びの闇の中に消え去るのだ」

竜の祭壇の上層に辿り着いたマルスたちを出迎えたのは、ガーネフ本人であった。広間の奥には、長い階段とともに壁から張り出したような祭壇があり、その上にガーネフは立っていた。

「では、まだメディウスは復活を遂げてはいないのだな。間に合ったか。姉上たちを返してもらおう。貴様の野望もここまでなのだ、ガーネフ！」

マルスは、ファルシオンとファイアーエムブレムを掲げて叫んだ。

「わしの言葉の意味も分からぬ愚か者めが、すでにメディウスは復活しておるわ。後は、地竜から暗黒竜へと変態を遂げるのみ。四人の司祭たちの命を最後の一滴まで搾り取って、最高の破壊神へと生まれ変わるのだ。すべては、わしを認めなかった世界が悪いのだ。滅びて当然。世界も、司祭たちも、そしてマルス、お前もだ。ゆけ、我が分身たちよ、魔竜どもよ！」

ガーネフが叫んだ。彼の哄笑とともに、広大な広間のあちこちから暗黒司祭と魔竜たちが現われる。

「みんな、ここが戦いどころだ。ガーネフを倒し、メディウスの復活を阻止するのだ。チキ、バヌトゥ、魔竜を頼む。リンダ、聖水をみんなに。アストリア、カイン、敵の魔道士を頼む。ジョルジュ、ゴードン、皆の援護を。オグマ、マリク、エルレーンは、私と一緒にこい、ガーネフを倒す！」
マルスは、力強い声で皆に命令を発した。
スター・ロードの言葉に、彼とともに戦ってきた者たちが応える。
たちまち、竜の祭壇の最上層すべてが戦場と化した。
チキとバヌトゥが、魔竜たちを退けてガーネフへの道をマルスたちにもたらす。
ジョルジュの放つパルティアの矢が、マルスたちの頭越しに、彼らの行く手を阻もうとする魔道士たちを射抜いた。
「邪魔だ、どけぇ！」
魔法を唱える暇さえ与えずに、オグマとマルスが血路を切り開いていく。スターライト・エクスプロージョンの魔道書を持ったマリクが、エルレーンとともにその後に続いた。
「敵を、マルス殿下に近づけるな！」
マルスたちがガーネフのいる祭壇へと続く階段を駆け上がり始めたのを見て、カインが他の敵の前に立ちふさがりながら叫んだ。
「新手だ！」
シリウスが、階下からしつこく現われた蛮族たちを切り捨てながら叫んだ。

「こちらは、私たちとシリウス殿で何とかする。アリティア騎士団は、マルス王子を守ればいい！」
ミネルバが、パオラやカチュアとともに剣を振るいながら叫んだ。駆け上がってくる蛮族たちを、階段から広間へは一歩も入らせないとばかりに奮戦する。
「セシルは、シーダ様のそばを動くな」
ロディとルークが、隠し通路から次々に現われる敵の相手をしながら言った。
「シーダ様は、ここを動かれませんように」
セシルが、シーダを後ろにかばいながら言う。
乱戦の中、バヌトゥが引き倒した魔竜が彼らのそばに倒れ込んできた。
「聖なるかな正しき心。闇は千々に己が罪にて消え去らん。輝け、浄化の光輝よ！」
シーダのそばにいたリンダが、かろうじてオーラで止めを刺す。
ふうとリンダが一息ついた時、魔竜の死体の陰から一人の暗黒司祭が姿を現わす。慌ててセシルがシーダとリンダを守ろうとするが、気づくのが遅かった。暗黒司祭が、ドゥームの魔法を唱える。その時、邪眼の正面にさらされたセシルの前にロディが飛び出した。邪眼から放たれた閃光がロディの身体を貫き、彼はそのまま後ろへと倒れた。
「ロディ！」
セシルが悲鳴をあげる。連続して暗黒司祭が呪文を唱えようとした時、駆けつけたルークが敵を斬り倒した。

「ロディ、しっかりして。こんなの嫌よ」
蒼白になっていくロディの顔を見て、セシルが彼をだき起こそうとした。
「彼を放して。そのままでは死んでしまうわ」
リンダが、セシルをロディから下がらせた。
「どうするつもりですか」
シーダが、リンダに訊ねた。
「試してみます」
そう言って、リンダが背負っていた布の袋から癒し(リカバー)の杖を取り出した。
「ウェンデル様から司祭の資格を与えられたばかりで、まだまともには使いこなせてはいないのだけれど……」
つぶやきながら、リンダが杖を掲げた。
セシルとルークが、気持ちを奮い立たせると、友の危機を救うために敵をこの場所に近づけないように戦いを繰り広げた。
「想いは人の命を燃やす炎。蘇れ、熱き命の灯火よ！」
リンダの呪文とともに、淡い輝きがロディをつつみ込んだ。わずかな間があって、ロディが息を吹き返す。
「大丈夫なの、ロディ」
ロディが起き上がったのを見て、セシルが彼にだきついた。それを見て、ルークが、や

れやれというふうに少し悲しげな笑みを唇の端に浮かべる。
「悪運が強い奴だ。もう戦えるのか」
「ああ、大丈夫だ」
ルークの言葉に、ロディが元気に答えた。
「よかった。リンダさんが癒しの杖を使えるのならば、怪我を負った者を助けることができます。ルーク、ドーガを呼んで怪我人をここへ連れてくるように伝えなさい」
「分かりました、シーダ様。ロディ、セシル、ここは頼んだぞ」
シーダの命令を受けて、ルークが乱戦の中へと飛び込んでいった。
敵の攻撃も無尽蔵とはいかないらしく、形勢はマルスたちに有利にかたむいていった。
広間にいる魔竜を、バヌトゥがドラゴンキラーを持ったナバールと連携して何とか倒す間に、チキが魔竜たちの登ってくる通路を見つけてそこに立ちふさがった。先頭の数匹を倒して、その死体で通路自体をふさいでしまう。
魔竜という最大の脅威を取り除いてしまえば、数で勝るマルスたちは俄然優位となる。兵士たちに犠牲は出しながらも、ガーネフの配下たちはじょじょに広間から駆逐されていった。
「マリク、魔竜を頼む！」
ジョルジュたちの援護によって、祭壇へと到着するかに見えたマルスたちの前に、突然魔竜が現われた。マルスは、階段の端に身をよせながら、マリクの名を呼んだ。

「オグマも下がって！」
エクスカリバーを掲げながらマリクが叫んだ。
「手伝うぞ、マリク！」
エルレーンが、その隣でトロンの魔道書を広げた。
「風は光に輝かん。荒ぶる魂は敵を切り裂く刃となれり。舞い踊れ、風の白刃よ！」
「雷鳴は輝く。浄化の閃光は悪しき魂を光にて消し去らん。走れ、聖なる雷光よ！」
エクスカリバーの真空波と、トロンの雷球が同時に魔竜にむかって放たれた。
階段の降り端まで進んでマルスたちに炎を吐きつけようとしていた魔竜は、その攻撃に身悶えて階段を転げ落ちていった。巻き込まれぬようにと、マルスたちが何とか階段の端に避難して難を逃れる。もんどりうって長い階段を下まで転がり落ちていった魔竜は、下の床に全身を強く打ちつけて動かなくなった。
「ガーネフ、観念しろ、もう逃げ道はないぞ」
祭壇に辿り着いたマルスは、ガーネフにむかって叫んだ。ガーネフの周りにいた暗黒司祭たちが、魔法を唱えようとする。
「静寂は、心の静けさ。沈黙の霧よ、言葉をつつめ」
エルレーンが、それに先んじて沈黙の杖を使った。この瞬間のために温存していた物だ。ウェンデルに正式に高司祭に任命されたエルレーンは、この沈黙の杖を受け継いでいた。
オグマが、ガーネフ以外の暗黒司祭たちを瞬く間に斬り倒していく。その間に、マリク

がスターライト・エクスプロージョンをいつでも唱えられるようにと身構えた。
　エルレーンの手の中で、沈黙の杖に亀裂が入って砕け散る。最後に残っていた力を使い切って、杖が壊れたのだ。
「愚かな。一時的に呪文を封じたからといって、剣ではわしを倒すことはできん。スターライトとて、再びわしを倒せるものか」
「はたしてそうかな。光と星の宝玉よ。星々の解放は……」
　マリクが、すかさずスターライト・エクスプロージョンの呪文を唱え始める。
　ガーネフが、マフーの力によって斬りつけたくとも動けなくなっているオグマに一歩近づいた。その瞬間に放たれた波動によって、オグマの身体がマリクの方に弾き飛ばされる。ふいをつかれたマリクが、飛んできたオグマとぶつかって体勢を崩した。
　マリクが呪文を失敗した間に、ガーネフがマフーの呪文を唱えた。
「漆黒の宝玉よ。闇に棲みし眷属(けんぞく)は心の闇を喰らえり。放たれよ、暗黒の亡者どもよ！」
　暗黒の魔方陣が浮かび上がり、人の生気を食らう亡霊どもが放たれた。ここでスターライト・エクスプロージョンを持つマリクがやられては万事休すかと思われた時、マルスがマフーの前に雄々しく立ちふさがった。
　マルスの持つファイアーエムブレムが輝きを放ち、マフーの力の大半を跳ね返す。
「馬鹿な、封印の盾で防いだだと。光のオーブの力か、いや闇のオーブの……」
　ガーネフが、思わず後退(あとずさ)った。もともと闇のオーブから力を得ていたガーネフである。

今やその闇のオーブがファイアーエムブレムの一部として、マルスの支配下にあるという現実を突きつけられて狼狽したのであった。

「マリク！」

　さすがに消耗したマルスは、がくりと片膝をついて叫んだ。

「マリク、今だ！」

　エルレーンが、マリクに手を貸してスターライト・エクスプロージョンの魔道書を一緒に掲げる。

「光と星の宝玉よ。星々の解放は闇を砕く光。弾けよ、星辰（せいしん）の閃光よ！」

　マリクとエルレーンが、声を合わせてスターライト・エクスプロージョンの呪文を唱えた。

　虹色に輝く魔方陣が二人の前に現われた。無数の輝きが魔方陣から飛び出し、ガーネフを取り巻くとその身体を貫いた。閃光が走り、ガーネフの身体が光に溶けていく。

「このわしが……。ふふふふ……。このわしも滅びるというのか。はははは。そうだ、すべて滅びてしまえ。暗黒竜によって、すべて……」

　ガーネフの声が、その身体とともにスターライト・エクスプロージョンの光の中に消えていく。

　後には、罅（ひび）の入った黒い玉石が一つ残っただけであった。

「ガーネフ、私はお前のようにはならない」

おそらくは、闇のオーブに取り込まれたガーネフのなれの果てなのであろう玉石を見下ろしてエルレーンがつぶやいた。

「マルス王子」

エルレーンがマルスを促した。

それにうなずくと、マルスはファルシオンを両手で逆手に持って掲げた。玉石めがけて勢いよく光剣を突き降ろす。その一撃で、玉石は粉々に砕け散った。

その瞬間、竜の咆哮にも似た音が竜の祭壇全体をゆるがした。

マルスたちのいる場所の奥の壁が音をたてて崩れ、そこに奥へと続く回廊が現われる。

「ガーネフの結界が解けて、隠されていた通路が現われたのでしょう。おそらく、エリス様たちはあの奥です」

マリクが言った。

「いこう。姉上たちを助けるんだ」

マリクとうなずき合って決意を確かめ合ったマルスは、祭壇の上から下を見下ろした。広間の戦いも、ほぼ決着はついている。残った敵は、ガーネフの呪縛から解き放たれて遁走を始めていた。

「囚われた司祭たちを助けにいく。ついてこられる者は、一緒にきてくれ」

マルスは、階下の仲間たちにむかって叫んだ。

4

大きく広い回廊の中をマルスたちは進んでいった。思えば、竜の祭壇の内部は竜の巨大な体格に合わせて造られているようだ。
ファイアーエムブレムの放つ光で回廊内を照らしながら、マルスは進んでいった。
通廊が終わると、そこは広い空間であった。一面に拳大の石が敷き詰められており、その中央に巨大な魔方陣が描かれていた。そして、その中央に地竜メディウスが横たわっている。そして、メディウスの四方を取り囲むようにして、ニーナたち四人の司祭が立っていた。
「姉上、ニーナ様！」
マルスは叫んだが、目を閉じたまま彫像のように立ちすくむニーナたちには聞こえていないかのようであった。ガーネフのかけた術が未だに効力を保ち続けているのか、それぞれが福音(リザーブ)の杖を掲げたまま、一心不乱に何かの呪文を唱え続けている。その顔は血の気がなく、紙のように白かった。そして、彼女たちが呪文を唱えるたびに、その足下から脈動する輝きが魔方陣の文様を伝って中央のメディウスに注がれていく。
「マルス、まだメディウスは変態を終えていない。今なら奴は動けないぞ」
チェイニーが、マルスに告げた。

「ならば、すぐに助け出そう。あのままでは、姉上たちが死んでしまう」
マルスは叫んだ。
その言葉に応じて、何人かの者たちが走り出した。石像のように身体の表面を固く変化させたメディウスは、以前見た時の倍以上の大きさになっており、その姿を見ただけでも人間に多大な恐怖を与えた。そのため、たとえ眠っているように見えたとしても、地竜のそばまで近づいて司祭たちを助けようとする者たちは限られたのである。
それでも、マルスに同行していた多くの者たちが勇気を持ってメディウスに近づいていった。床に厚く敷き詰められた無数の地竜石を踏みしめながら、シリウスとマリクたちが進んでいく。
その時、建物全体が震撼し、竜石の中から何者かが姿を現わし始めた。それは、地の底から蘇りつつある地竜の群れであった。
運悪くそのそばにいた兵士の一人が、地竜の吐く闇のブレスを受けて絶命する。シリウスたちも足を止めて、武器を構えざるをえなかった。勇気を出して近づいた兵士たちのほとんども、敵意を剝き出しにして現われた地竜に恐れをなして逃げ帰ってくる。
「まずい、メディウスの力が強くなるとともに、封印が解けかかっているんだ。マルス、封印の盾をかげろ、地竜を封印するんだ」
チェイニーが叫んだ。
床から身を起こした五匹の地竜を見て、自らもエリスに駆けよろうとしていたマルスは、

慌てて立ち止まるとファイアーエムブレムを掲げた。
「封印の盾よ、地竜の魂を大地に鎮めよ！」
マルスの声に応えて、ファイアーエムブレムが強い輝きを放つ。その光を浴びた地竜たちが、身悶えしながら咆哮をあげて再び竜石の中へと沈んでいく。
「今のうちだ！」
ジェイガンが叫んだ。
その言葉に、後からやってきたミネルバやジュリアンが魔方陣にむかって走り出した。
「マルス、気を抜くな。メディウスが生きている限り、地竜たちは次々に現われるぞ。封印の盾の力を、地竜たちに集中させるんだ」
チェイニーの言葉通り、地竜たちは様々な場所から次々に頭をもたげてきた。そのたびに、マルスはファイアーエムブレムを新たに現われた地竜たちにむけて再封印する。
その間に、シリウス、マリク、ミネルバ、ジュリアンたちが、決死の覚悟でそれぞれ大切に思う人の許に駆けよる。彼らが呼びかけると、司祭たちは呪縛から解かれたようにその場にくずおれた。
マリクたちが慌てて彼女たちをだき起こそうとした時、中央のメディウスに変化が現われた。その身体に、細かい亀裂が走っていく。
「まずいぞ！」
チェイニーが叫んだ。

「早く、司祭たちをこの場から連れ出すんだ。ぐずぐずするな！」
遅れてやってきたオグマやアストリアたちが、シリウスたちを急かした。協力して、ぐったりとしたニーナたちをその場から運び出す。
「こっちへ」
エルレーンが、マリクたちを呼んだ。
「彼女たちが持っている杖を私に。リンダ様、手伝ってください」
エルレーンが、エリスが固くつかんでいた福音の杖を何とかもぎ取って叫んだ。言われて、リンダもマリアの持っていた杖を手に取る。メディウスにほとんどの生命力を吸い取られて、ニーナたち四人はまさに死にかけていたのだ。
「暗黒竜として復活するのか……。チキ、バヌトゥ」
ファルシオンとファイアーエムブレムを構えると、マルスはチキたちを呼んだ。
神竜と火竜の姿となったチキとバヌトゥが、マルスの左右に立つ。たとえメディウスが復活しても、エリスたちを救おうとしているエルレーンたちの邪魔は絶対にさせないという決意であった。
「我が望みは、皆への慈愛。祝福あれ、我らが愛(いと)し子たち」
エルレーンとリンダが、福音の杖に込められた癒しの力を解放した。二人が心に描く者たちに、一様に生命力が注がれる。戦いで疲れたマルスたちは、それによって活力を取り戻した。だが、尋常ならざる方法で生命力を奪われた四人の司祭たちは、簡単には蘇生し

なかった。
「もう一度だ。杖が砕けるまで！」
エルレーンが、リンダを促した。
「頼む、エルレーン、エリス様たちを救ってくれ」
リンダと違って、司祭とならなかったことをマリクは悔やんだ。三人を司祭にと言うウェンデルの言葉を、マリクはエルレーンが先だと言って断っていたのだ。その後は、すぐにテーベへとむかったため、マリクは司祭の指輪をウェンデルから授かる機会を逸していたのである。
エルレーンとリンダは、言葉通り杖が砕けるまで呪文を唱え続けた。その甲斐あって、四人が息を吹き返す。だが、まだ意識は回復しない状態であった。
その間にも、確実にメディウスが目覚めようとしていた。力を集中しているのか、一時的に地竜が現われなくなる。
硬質化した地竜の皮膚を崩しながら、暗黒竜となった新たな身体が姿を現わしていく。その姿は、蛹（さなぎ）から現われる蝶や、蛇が脱皮するかのようであった。
マルスはファイアーエムブレムを掲げてメディウスの変態を阻止しようとしたが、動きが若干緩慢になっただけで、たいした効果は与えられなかった。
「暗黒竜には、オーブの力も絶対ではないのか。チキ、バヌトゥ、奴が動き出す前に、頼む」

地竜にはない巨大な翼を広げ始めたメディウスを見て、マルスは叫んだ。
『はい、マルスお兄ちゃん』
答えるなり、チキとバヌトゥが前に進み出てメディウスにブレスを浴びせかけた。
霧と炎のブレスがメディウスの身体でぶつかり合い、閃光とともにメディウスの身体が砕けて飛び散ってもうもうと煙が立ちこめた。
「やったか」
戦いを見守っていたカインがつぶやいた。
だが、マルスたちの期待を裏切るかのように、立ちこめる煙を吹き払うようにして巨大な影が現われた。素早い尾の一振りで、チキとバヌトゥを同時に弾き飛ばす。
きゅんという悲鳴をあげて、チキがマルスのそばに転がってきた。バヌトゥは、別の方向に飛ばされ、倒れたまま低いうめき声をあげる。
ジェイガンたちは、チキの下敷きにならないようにと逃げ惑った。ただ一人、マルスだけがその場を動かず、ファイアーエムブレムを構えたままメディウスを睨みつけていた。
チキとバヌトゥのブレスによって、蛹状の外皮の残骸のみを吹き飛ばされたメディウスが、生まれ変わったその全身をマルスの前にあらわにした。
ずんぐりとした地竜の姿からは想像もできないほど神々(こうごう)しくも猛々しい姿に、メディウスは変身を遂げていた。背中には巨大な黒き翼を広げ、全身は黒光りする強靭な鱗で被われている。長き尾と、すらりと延びた鎌首は今までマルスが見たどのような竜よりも長く

巨大であった。巨体に不似合いな前肢を動かしながら、メディウスは強靭な後ろ足で上体を起こした。首をしならせながら大きく顎(あぎと)を開き、建物を震撼させる咆哮をあげる。

次の瞬間、メディウスは強力な闇のブレスをマルスめがけて吐き出した。

体勢を立て直しつつあったチキが、慌てて頭を巡らせて霧のブレスを闇のブレスにぶつける。

だが、メディウスのブレスは勢いを相殺(そうさい)されながらも、チキのブレスを押し退けてマルスの身体をつつみ込んだ。

『マルスお兄ちゃん！』

チキが悲鳴をあげる。

けれども、漆黒のブレスが晴れると、マルスは無事な姿でその場に立っていた。ファイアーエムブレムが、ひときわ強い輝きを放っている。

『封印の盾か。小賢(こざか)しい。だが、その力も、今や暗黒竜となりおおせたわしには恐れるべき物ではない。ナーガの小娘も、いかほどの者であろうか。せいぜい、古びた力にすがりつくがよい。もっとも、しょせんは死ぬのがわずかに遅れるだけであろうからな。竜族も、人間も、何者もわしを害することなどはできぬのだ』

メディウスが、勝ち誇って言った。

「貴様の好きにはさせない！」

マルスが肩で息をしながら言い返した。

「この世界を滅ぼさせるものか」

『滅ぼす？　馬鹿なことを。世界は滅びぬ。滅ぶのは、人間だけだ。マルスよ、貴様を殺し、封印の盾を破壊し、我が一族が復活を果たすのだ。その上で、竜族が獣の本性に還ると言うのならば、それもよかろう。人間どもを食らいつくし、この大陸で本能の赴くままに生きればよい。そう、我らとて、生きる権利はあるのだ。何の必要があって、人間どもに遠慮せねばならぬ。獣に戻ったならば、また長い年を経て知性ある者へと変わっていけばよい。我らにとって、それは気の遠くなるような時間ではない。数世代で、猛き竜は賢き竜へと生まれ変われるだろう。わしは、それを見守るのみ。だが、その新しき世界には、竜人となった者たちも、人間たちも必要ではない』

メディウスが、圧倒的な存在感を持ってマルスたちに言った。その強大な威圧感に、マルス以外の者たちは、動くことも声を出すこともできなくなる。

『違うもん。マルスお兄ちゃんは、私のことを必要ないなんて言わなかったもん。竜だって人だって、一緒に暮らせるとマルスお兄ちゃんは言ったもん』

『愚かなことを……』

必死になって言い返すチキに、メディウスが冷笑を浴びせかけた。金色の目が、蔑むように細められる。

「チキの言う通りだ。メディウス、お前が竜族の再興を望むのであれば、それもいいだろう。だが、竜族だけの歪んだ世界を造ろうとしているのであれば、私はそれを許さない。

いや、お前以外の、すべての者がそれを許さないだろう」
メディウスの暴慢な態度に、マルスが怒りを新たにして言った。いかに強大な力を持つようになったからとはいえ、すべてを自分の思うがままにしようなどというのは間違っている。たとえ一族のことを持ち出したとしても、今のメディウスが見ているのは自分のことだけだ。それを一族のせいにして、我を押し通そうとしているにすぎない。彼が夢見ているものは、未来の世界ではなく、ただの過去の亡霊だ。メディウス自身、すでに過去そのものなのかもしれない。
『許さぬだと。かつて、ナーガは地竜族の長であった暗黒竜に同じことを言った。その結果が、この世界だ。すべては、ナーガが今の世を招いたのだ。だから、わしは、ナーガの残したものはすべて消し去ると決めたのだ！』
「私たちは、滅びなど望んではいない。ナーガも、そうだったはずだ。だからこそ、竜族は竜人となった。自分のためだけではない、私たちは、みんなの未来のために戦うんだ！」
マルスは、ファルシオンを掲げて叫んだ。
『うるさい。ナーガも、アンリも、すべて消え去るがいい』
メディウスが、大きく息を吸い込んで顎を開いた。
チキが、マルスのすぐ後ろに力強く立って同じように口を開いた。マルスが、ファルシオンを掲げる。光が、ナーガの牙であった剣の周りに集まってくる。それは、マルスの後ろで戦いを見守る人々の希望の光だった。



メディウスとチキが、同時にブレスを放つ。だが、先ほどとは違い、ファルシオンの真上に集まった光を巻き込んだチキのブレスは、輝ける光の奔流となってメディウスにむかっていった。闇のブレスを千々に引き裂き、光のブレスがメディウスを直撃する。
『ナーガの力……。そんな、まだのはず……』
よろけたメディウスが、前に突っ伏して倒れた。長い首が倒れ、顎が地竜石の上に叩きつけられる。
『おのれ……』
起き上がろうとしたメディアスが、突っ込んでくるマルスの姿を目にした。すぐに頭を上げようとするが持ち上がらない。
『封印の盾の力か……』
目映い輝きで自分の頭を押さえつけるファイアーエムブレムを見て、メディウスが呻いた。
マルスは、動けないメディウスの眉間に、ファルシオンを突き刺した。
メディウスが、断末魔の咆哮をあげる。
『おのれ。だが、人間の心に闇がある限り、再び封印の盾は壊され、我は復活する……』
最後まで言えず、メディウスの身体が石化していく。そして、それはぼろぼろと崩れていった。
ファイアーエムブレムが輝く。無数の岩塊と化したメディウスの身体が地竜石の中に沈

んでいった。少しして、いくつかの輝きがメディウスの消えた場所から飛び出した。それらは、倒れたままの四人の司祭の身体に吸い込まれていった。

「エリス様！」

マリクが叫んだ。エリスたちが意識を取り戻したのだ。息を呑んでマルスとメディウスの戦いを見守っていた人々の間から、初めて歓喜の声があがる。

「マルス様。よかった、御無事で」

マルスの許に駆けよったシーダが、涙ぐみながら言った。

「ああ。ここまで、みんなが一緒に戦ってくれたおかげだ。それに、私はシーダがいるからこそ頑張れた」

ファルシオンを鞘に収めると、マルスはそっとシーダをだきよせた。

「さあ、帰ろう」

マルスはシーダにささやいた。

「さあ、みんな、凱旋(がいせん)だ！」

マルスは、顔を上げると、ともに戦った人々にむかって叫んだ。竜の祭壇をゆるがすほどの人々の喜びの声が、それに応えた。

エピローグ　王の中の王

こうして、後に英雄戦争と呼ばれた戦いは幕を閉じた。
これによって、アカネイア大陸は新たな時代を迎えたのである。

ニーナ王妃は、すべての元凶が自分であることを悲しみ、アカネイアの全権をマルスへ委譲した。もちろん、マルスは固辞したのだが、ニーナの決意は変わらなかった。そのため、マルスもいつまでも断ることができなくなり、最後にはアカネイア王家に替わって、国を治めることを承知したのだった。

その背景には、再びニーナが国を治めることとなれば、またもや意にそわぬ婚姻が繰り返されるだろうとマルスが危惧したせいもあった。シーダとの結婚が決まっているマルスは、ニーナとの結婚はできない相談であったし、かといってシリウスと名乗っていたカミュをアカネイアの国王にすることもできなかった。周囲の反対もさることながら、カミュ自らがすぐにいずこかへ姿を消してしまったからである。

アカネイアの王妃としてのニーナには、自由などないのである。だとすれば、マルスはニーナをもう解放してやりたかった。二度に渡る辛い戦争の中心にあって、ニーナはどれほど心を痛めたことだ

ろう。

竜の祭壇からの帰途、ニーナはシリウスの正体に気づいて彼に愛をうち明けていた。だが、彼は別の大陸に残してきた人がいると言って最後までニーナにカミュであるとは名乗らなかったのである。

やがて、マルスへの全権委譲の手続きをすべて終えたニーナは、一人の女性としてパレスを旅立っていった。その旅が、自分の想いに決着をつける旅であるのか、新たな自分を求めての旅であるのかは、彼女にしか分からなかった。

アカネイア騎士団も再編成され、アカネイア自由騎士団としてジョルジュの下に、アストリアとその妻ミディア、ゴードンなどが集った。

パレスには、マリクが念願であった魔法学院を設立し、リンダとともに後進の育成に従事した。後にマリクは長年の想いをエリスに告げるのだが、それはもう少し後の話である。

アリティアは、カインの下に騎士団が再編された。病状の重くなったアランと、老齢を理由にしたジェイガンは騎士団を退いて、相談役に徹した。ライアンとともにロディとセシルは仲むつまじく騎

士団に残ったが、ルークは予備兵に退いて気ままな暮らしに戻った。
アベルも予備兵に戻ったが、しばらくして急にアリティアを旅立っている。突然姿を消したエストを捜しに出たのであるが、二人の間に何があったのかはマルスたちにも分からなかった。ただ、それを聞いたパオラは、自分はカチュアのようにはいられなかったと嘆いたという。

グラでは、マルスの帰還とともにシーマが王位を返上した。マルスはその必要はないと説いたが、傀儡として就いた王位であり、自分は今までのような市井の暮らしが好きなのだとシーマは答えた。

グラを後にしたシーマはパレスに戻ったが、その隣にはずっとサムソンの姿があったという。

グルニアでは、結局ユベロが王権を放棄した。ユミナはかなり反対したが、いつの間にかしっかりと自分の言いたいことを言えるようになったユベロは、頑として信念を曲げなかった。マルスは何とか考え直すように言ったが、彼は自分は人を導くような素質は持っ

ていないと固辞したという。その後、ユベロはマリクの魔法学院に入学し、ユミナはカダインの修道院で自分の道を模索した。

グルニアにはドーガが赴き、復興に努めていくことになる。

カダインは、ウェンデルが最高司祭に完全復帰し、後継者として高司祭となったエルレーンとともに正しき魔道士の育成に従事した。

マケドニアでは、レナとジュリアンがやっと所帯を持ち、修道院を開いた。そこで、この戦争で親を亡くした子供たちの世話を始めたのである。そこでは、マリアとミネルバも一緒に働いていた。

二人は、マケドニアの王位継承権を放棄して、戦いで国を守るのではなく、国を癒すことを望んだのだった。マリアは昔からそう生きてきたからといいしても、ミネルバにとっては大きな決断であった。だが、自らの野望によって身を滅ぼし、最後には自分たちのために命を落とした兄ミシェイルの生き様を見て、彼女は思うところがあったのだろう。

騎士団に残ったパオラとカチュアは、変わらず国のために働き続けた。

オレルアンでは、ハーディンの死とともに王族の後継者が完全にいなくなってしまった。そのため、オレルアン国王はマルスを後継者として、譲位を決定した。

もともと、ハーディンが生きていれば同じことになったはずなので、アカネイアを引き継いだマルスに譲位しても、まったく変わりはないのだとオレルアン王は言った。

タリスは、シーダとマルスの婚姻によって、二人の治める国となった。タリス王モスティンが、マルスによる統治を望んだのである。

このようにして、最終的にアカネイア七王国のすべての国はマルスの統治下となっていった。

奇しくも、戦死したザガロが言ったように、アカネイア大陸はマルスのものとなったのである。だが、それは、ザガロが嫌悪していたような独善的な統一ではなかった。

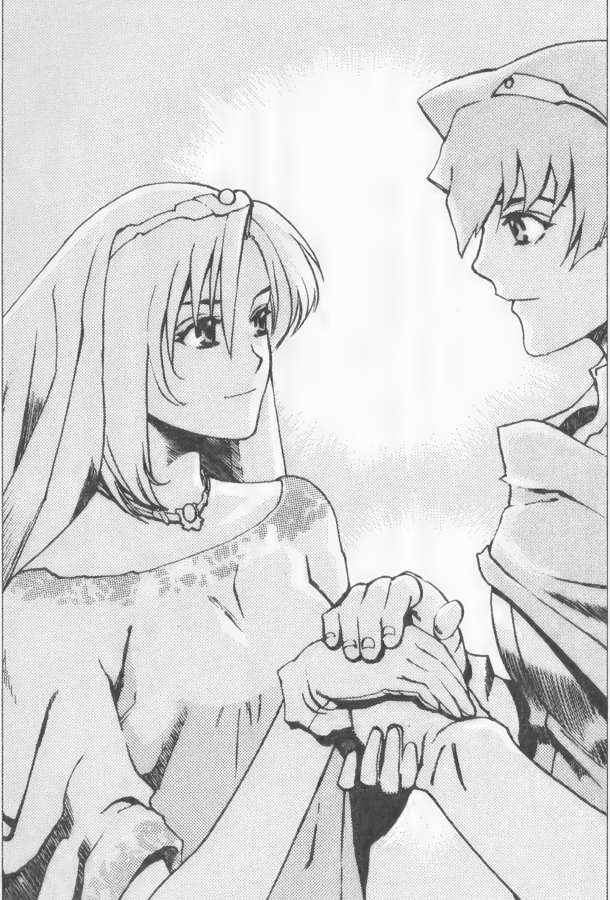
結局、二度に渡る大戦による各王家の弱体化が大きな原因でもあった。適した後継者を持つ国が、マケドニアとタリスしかなかった

のである。
一度は後継者を見出したグラやグルニアも、勝手に祭り上げられた感が強く、実質的な統治者としては無理があった。
結果としてアカネイアの下に各国を統一せざるをえなかったマルスは、アカネイア連合王国を建国し、その初代国王となる。かつての七王国すべての王たちを束ねる、王の中の王の誕生である。

世界が大きく変動する中、マルスとともに戦った者たちの中にも、歴史の表舞台から姿を消した者は多い。オグマやナバールやサムトーなどの傭兵のほとんどは、平和な世界では、表立って名前を見かけることはなくなっていった。フィーナやリカードのように旅に出て気ままな暮らしをする者もいれば、カシムやウォレンやマリーシアのように市井の生活に戻った者、ロシェやマチスのように自国の騎士団に残った者、ガトーやチェイニーやバヌトゥのように完全に人の前から姿を消してしまった者もいる。
だが、後にそれぞれの道を進み、再び出会ったり二度と出会うことのなかったりする人々が、一度だけ一堂に会したことがある。それは、竜の祭壇から帰還した直後の、延び延びになっていたマルス

とシーダの結婚式であった。
「どうしたの、浮かない顔をなさって」
純白のウェディングドレスに身をつつんだシーダが、少し不安そうにマルスに訊ねた。この期に及んで、マルスが結婚に疑問を感じているのではないかと、不安になったのだ。
「いや、これでよかったのだろうかと思って。アリティア一国だって、王となるには大変な重責なのに、みんなは私にすべての国を任せたいと言っているんだ」
マルスの言葉に、シーダはそのことかと、内心少し安心した。
「お嫌なのですか。でも、あなたがみんなをまとめなければ、また国の支配を巡って争いが起こるかもしれません」
「そうだね。もう、みんなを戦いや陰謀などには巻き込みたくはない。でも……」
シーダの言葉にうなずきながらも、マルスはまだどこか吹っ切れない様子であった。
「人を守るために、王となることはお嫌いなのですか」
再び、シーダがマルスに訊ねた。

「そういうわけじゃないさ。ニーナ様たちがそれを望むのであれば、私は彼女たちの重荷を少しでも軽くしてあげたいと思っている」
「でしたら、そうしてさしあげましょうよ。私も、あなたとともにそれを担いますから。ともに、苦労を分かち合って暮らしましょう」
シーダが、マルスの手をとるとにっこりと笑った。それを見て、マルスの不安はなくなった。一人で悩むことはない。これからはシーダとともに考えればいいのだ。ミネルバたちも、マルスにすべてを押しつけて自由になったのではなく、彼を信頼するからこそすべてを委ねたのだろうから。
「ありがとうシーダ。大変かもしれないだろうけれど、二人でともに歩んでいこう」
マルスがシーダの手を握り返した時、かわいく着飾ったチキが二人の所にやってきた。
「マルスお兄ちゃん、そろそろ入ってくださいって」
「分かったよ、チキ。シーダのベールを頼めるかい」
「うん。ええと……」
マルスに言われたチキが、シーダを見上げて少し言いよどむ。シーダを何と呼んでいいのか迷っているようだ。



「マルスがお兄ちゃんなら、私はお姉ちゃんね。これからは、ずっとパレスで一緒なのだから」
「うん、シーダお姉ちゃん」
にっこりと笑うと、チキはシーダの長いベールの端を持った。
微かに聖堂の中から音楽が通路に漏れ聞こえてくる。
「さあ、いこうか、シーダ」
「ええ、あなた」
二人は、目の前の扉を押し開けた。室内の光が差し、集まった懐かしい人々の顔が視界に飛び込んでくる。
マルスとシーダは、人々の待つ場所へとともに進んでいった。

【完】

後書き

「紋章の謎」下巻、そして、ファイアーエムブレムの最終巻をお届けいたします。
長かった物語も、これですべて終了です。
まあ、アフターストーリーのような外伝はいくらでも書けますが、篠崎版のファイアーエムブレムは、これにて全エピソード終了ということで。
最終巻ということもあって、今回はかなり元ストーリーを離れて、オリジナル要素の多い巻となりました。
特に伝承の部分なんか、独自解釈のオンパレードです。
まあ、これは完全に小説版のみの設定ですから、ゲームとはかなり無関係に近い設定となっています。ノベライズとはいっても、独立した創作小説なわけですから、原作と一字一句違ってもいけないというようなものでない限りは、書き手の領分というところですね。
その辺は、こういう解釈もあるのか程度で楽しんでもらえると幸いです。
特に他のエムブレムとリンクさせるために、かなりいじくってしまっています。
まあ、それでも、時間軸の微妙なゆれ以外は、矛盾がないように仕上げたつもりです。
だいたいが、伝承ですから、本来は曖昧な言い伝えだったと解釈してくださいませ。
しかし、こういった解釈遊びがいろいろできるところが、ファイアーエムブレムの楽し

ねくり回していくと、何となくこれが正解かもというようなアイディアが浮かんでくるものです。もちろん、正解らしきものであって、正解でないところがミソなんですが。
その辺の独自設定を矛盾なく織り込むというのは、結構難しい作業だったりします。下手すると、御都合主義で終わってしまいますからねえ。

みの一つでもありますね。どう考えてもおかしいというようなことも、いろいろ理屈をこ

文章書く時は、主にエディタを使ってまして、IMEはボイスATOKを使ってます。反応の速さから、さすがにエディタの方がいいですねえ。
一太郎は、主にゆらぎチェックに使ってます。語句統一に便利なので。ただ、もうちょっと効率よく解析して語句チェックしてくれると助かるんですけれども。それでも、大変重宝しております。
ATOKは音声認識に期待したんですが、ちょっと使い方が悪かったみたいです。いや、夜中、眼精疲労とか、睡魔で限界になったら、布団に寝たまま原稿を書こうなどという野望に燃えていたのですが、挫折しました。
まあ、現段階での音声認識率の問題もあるのですが、最大の問題は自分の声でした。なにしろ、眠りかけたくぐもった声でぼそぼそしゃべるわけですから、普段の声と声質が違うというので誤認識のオンパレードになります。
うーん、寝たままどんどん原稿が書けると思ったのですが、甘かったです。

寝っ転がると、キーボードも打ちにくいですから、ＭＳ－ＩＭＥの手書き入力なんてのも使ったりしました。自動的に複数文字を認識して変換可能文字にしてくれるのでかなり便利です。

そんなこんなで、日夜戦ってるわけですが（笑）、さすがに二〇〇〇年は七冊も書いて自爆したので、二〇〇一年は、オリジナル中心で少しゆったり書きたいなと誓うのでした。

篠崎砂美


某日ー。
日野です…
カッ
カッ
はい
それは担当であるMさんからのTELだった。
「あれ？ついこの間上巻入稿したばかりなのに…
まさかもう下…いや、そんなまさか…な」
下巻のスケジュールが決まりました！
やはり!!
……死んで下さい。
《あとがき》
死んでくれ!?
FIRE EMBLEMって 紋章の謎
何があったかはよくわからないが、とにかくメ切が手を伸ばさずとも届く距離にあるらしい。
もちろんこの後何度か死ぬ事となる…。
今までで一番辛かった。



篠崎さんのチキは"羽根"が付いていても良かったらしい…むう
はやく言ってよ。
マムクート
チキ
どっちが良い?
◎描いてみたら 妙に好評だったので、ちょっと チキ特集。
ゲームのグラフィックはもっと子供っぽいんですが、つい、自分の描きやすい形にアレンジしてしまいました。
彼女(チキ)の場合、「かわいけりゃ すべて ヨシ!」らしかったので、特にリテイクもなく、助かりました。



またまた
みなさま おつかれさまでした
To. 篠崎 先生。
気が付けば けっこうながい
コンビに なりましたネ
お別れするのが
何だかさみしい
です…。
ホントに
お疲れ様でした。
To、メディアミックス
Mさま。
描きたい放題の
日野君の相手は
さぞ大変だった
事でしょう…。(笑)
もう TELの
「どうもです―。」
が、聞けない
のが残念です。
To. アシ
KOTAMAくん。
君、最近 小腹
すきスギだぞ。
(?)
To、読者の
みなさま。
…の応援あって
なんとかここまで
がんばれました。
ありがとうござい
ました。
―また、いつか
どこかで。
To. Nintendo 様
INTELLIGENT
SYSTEMS 様
ながい間、大変お世話に
なりました。
From
日野 慎之助。

■ご意見、ご感想をお寄せください。

ファンレターの宛て先
〒154-8528 東京都世田谷区若林1-18-10
株式会社エンターブレイン　メディアミックス書籍部
篠崎砂美　先生
日野慎之助先生

■ファミ通文庫の最新情報はこちらで。

エンターブレインホームページ
http://www.enterbrain.co.jp/

ファミ通文庫

ファイアーエムブレム紋章の謎～紋章の謎・下～

二〇〇一年二月一日　初版発行

著　者　篠崎砂美
発行人　浜村弘一
編集人　青柳昌行
発行所　株式会社エンターブレイン
〒一五四-八五二八　東京都世田谷区若林一-一八-一〇
電話　〇三(五四三三)七八五〇(営業局)
編　集　メディアミックス書籍部
担　当　宮地千里
デザイン　伸童舎、スタジオ百哩
写植・製版　株式会社パンアート
印　刷　凸版印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります。
落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

ISBN4-7577-0309-0

篠崎砂美の著作リスト

ブレイク－エイジ
戦士たちの夏
Fighters in Summer grand Battle 2005

ブレイク－エイジ
戦士たちの秋
The hide-behind of the fighter 2009

アーマード・コア
～ザ・フェイク・イリュージョンズ～

アーマード・コア
～マスターオブアリーナ～

ファイアーエムブレム トラキア776①
～王都解放～

ファイアーエムブレム トラキア776②
～誓いの剣～

ファイアーエムブレム トラキア776③
～二つの槍～

ファイアーエムブレム紋章の謎
～暗黒竜と光の剣～

ファイアーエムブレム紋章の謎
～紋章の謎・上～

ファイアーエムブレム紋章の謎
～紋章の謎・下～

9784757703094
ISBN4-7577-0309-0
C0193 ¥640E
定価 本体640円 +税
1920193006407
発行○エンターブレイン

悲惨な暗黒戦争が終結し、アリティアのマルス王子以下戦いに勝利したメンバーは、祖国復興に全力を注ぎ平和な日々が続いていた。だが、突然、ハーディンがアカネイア神聖帝国皇帝を名乗り、各国への侵略を開始!!かつての朋友ハーディンを信じるマルスだったが、祖国を、愛する人たちを、そして人類の未来を守るため、戦禍の渦へと飛び込むのだった……。

"トラキア776""紋章の謎"とお贈りしてきた篠崎版ファイアーエムブレム・ノベライズシリーズ全6巻が、堂々ここに完結!!

Famitsu Bunko